

¥1000

風俗奇譚

風俗奇譚

昭和36年4月1日発行
昭和36年4月1日発行
昭和36年4月1日発行

昭和36年4月1日発行
昭和36年4月1日発行
昭和36年4月1日発行

昭和36年4月号

10月号

〈男女…

…記〉

定価 150 円



変装癖の男 モコパット (スー・デ・ザ・ボイの奇案で撮影された写真)



長靴と鞭 (スー・デ・ザ・ボイの奇案で撮影された写真)



アメリカの女子学生イーストの模範自画像

表紙……田上恵子
さしえ……江馬美久
小田利美
田上恵子
古正英生



グラビア

春に競う緊縛50態……(二)

- 太鼓しぼり……………(二二) 冷蔵庫の上に……………(二六)
- 木にくくられて……………(二四) シャツも破れて……………(二八)
- 荒れ小屋を背に……………(二六) ひじ曲げの拘束……………(三〇)
- 石の階段は冷たい……………(二八) 棒背負……………(三二)
- 古雅な中庭で……………(二〇) 双丘の魅惑……………(三四)
- 緊縛悶姿……………(二三)
- 早く叩いて……………(二四)

〈モデル〉
西牧えり子 島崎ユカ
風早由美子 井神せい子
村上ユキ 児玉幹也

(多色口絵) 赤い靴をはいたドミナ……………田上恵子(折込み)
浣腸器のいろいろ……………(折込み)

特集東西古今刑罰残酷物語……………(五)

- 刑罰にひそむサディズム……………奥村世紀男(五二)
- 世界残酷刑罰の生態……………真野麗(五二)
- 刑罰と拷問のいろいろ……………番場多計夫(六二)
- 江戸封建社会の刑罰……………芦立鋭吉(七七)
- 昔の刑罰は残酷だった……………(九九)
- 花井お梅の獄中日記……………雨妙院一太(七〇)
- 申城残酷記……………菅沢朗(八二)
- マダレナ殉教秘史……………あべ・さだよし(九二)

尻打ちの世界……………泰西名画集(三五)
責められる女の姿態……………古正英生ほか(四四)
晴雨流女のしぼり方……………伊藤晴雨(〇七)

マゾヒストの手紙から⑩……………谷貫太(二八)
鼻の穴がピコピコうごく……………宇佐美清(五四)
ほも禁秘帖⑥Hの中のSサドの形態……………かびや・かずひこ(四七)

サロン・マソキスチカ……………(九〇)
ホモの窓……………(二六)
女装愛好の部屋……………(二六)

手記私が禪マニアになったのは……………海老原真(五八)
告白私のいけになつた処女……………竜丸寺伸(六四)
☆読者サロン……………(一八四)
☆編集室より……………(一九四) ☆代理部ご案内……………(一九二)

鞭打浣腸小説 鞭魔ロベール……………北ミシェル・クレール(一四)
潤・訳

(絵物語) 快楽用の少女たち……………柏正彦(三九)

中国悪虐史 羅王と朋后……………青山三枝吉(七〇)

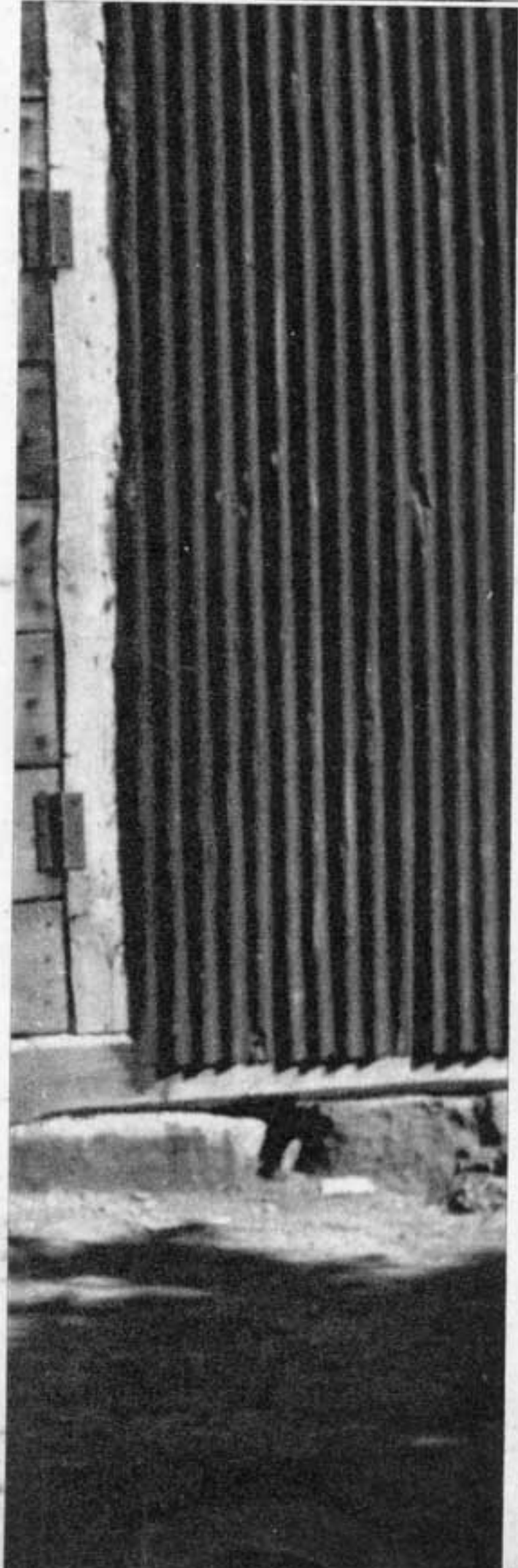
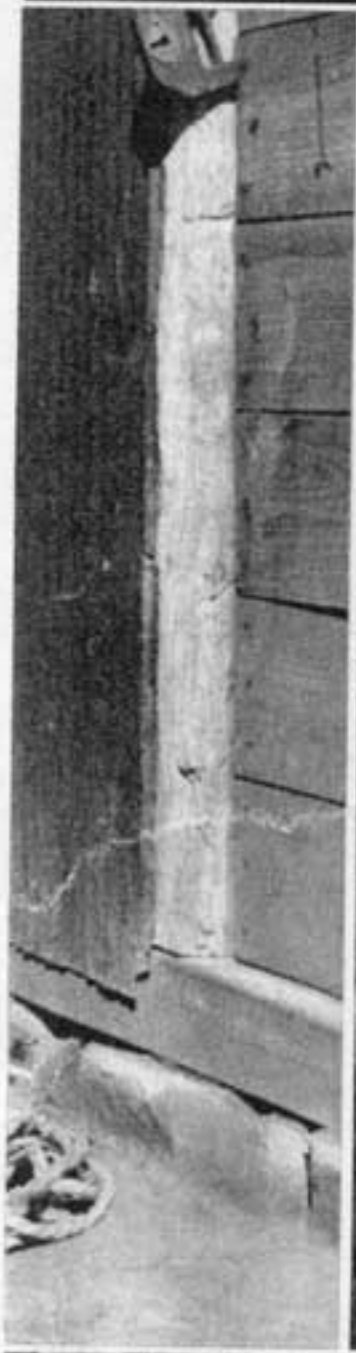


長靴と腰はサディ・スチム（ドラゴント・ウーマン）の象徴的な衣装

木にくくって

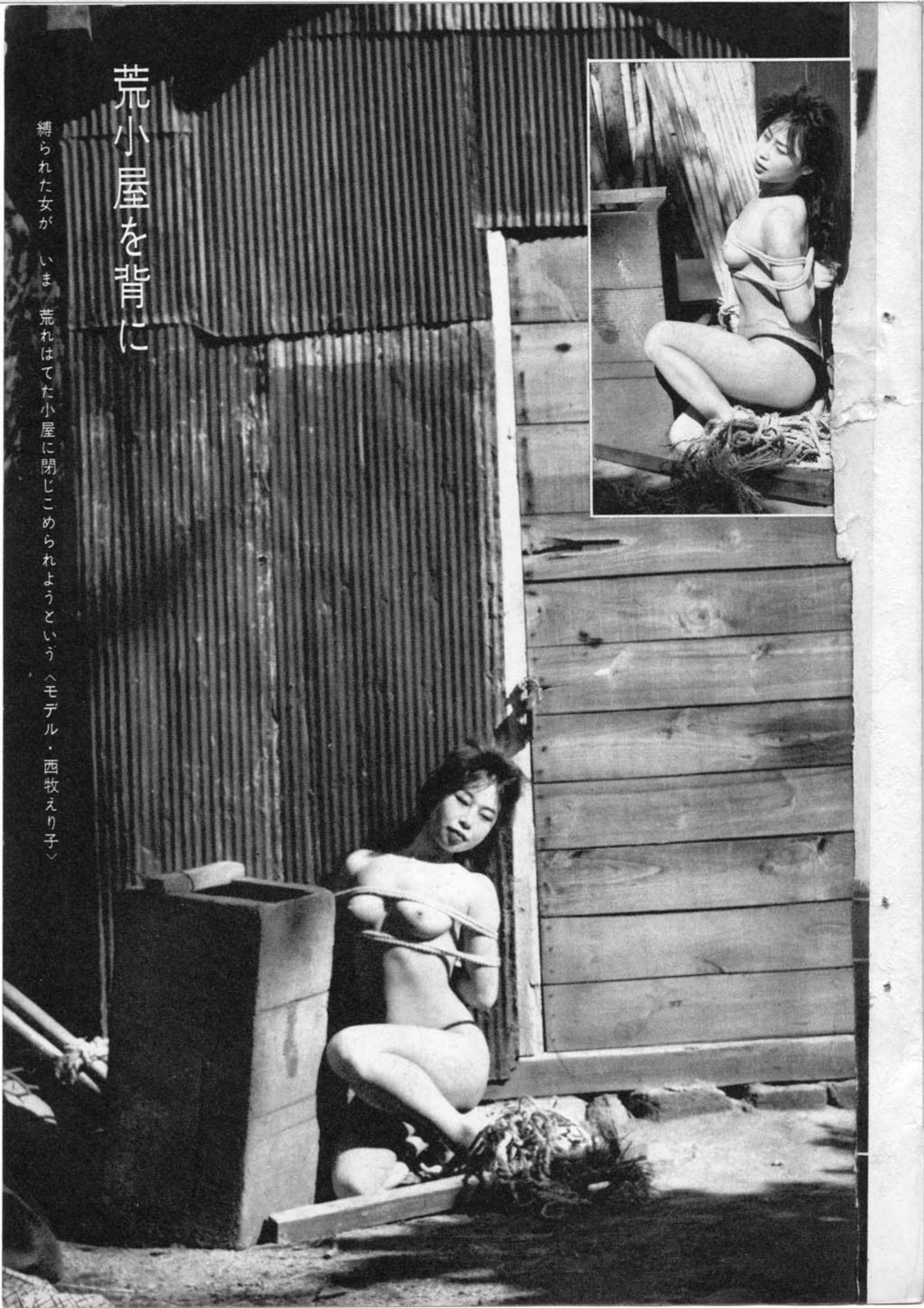
春の日ののどかにたゆたう芝ふで 太い木の根かたに縛られた女が ひっそり悦戯をかみしめる 〈モデル・風早由美子〉

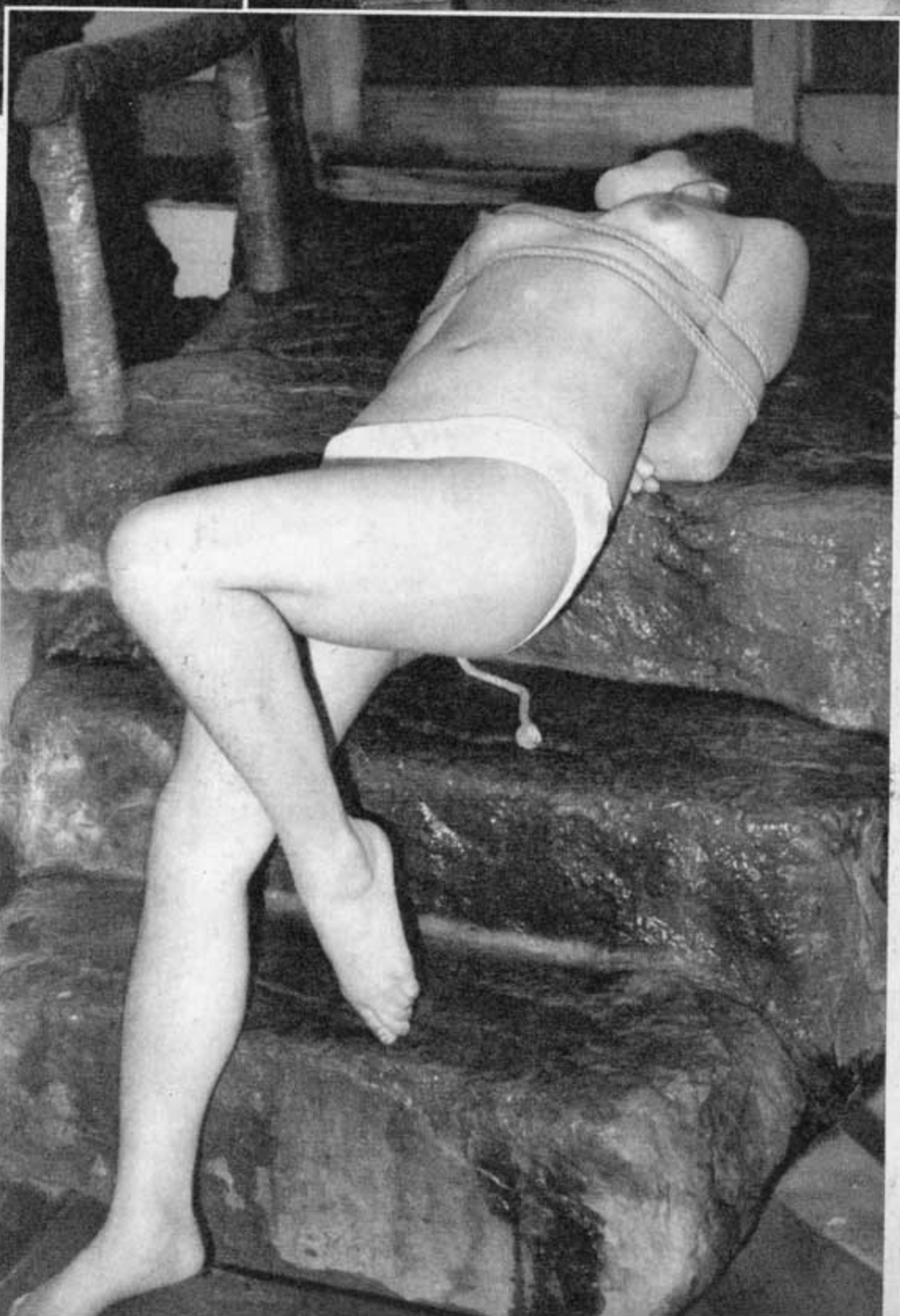




荒小屋を背に

縛られた女が いま 荒れはてた小屋に閉じこめられようというへモデル・西牧えり子





石の階段は冷たい

とにかく 痛くて冷たいのだ 石の階段は しかも うしろ
手に縛られたまま ころがされると 踏み段の角が 背中に
当たり そこから 幾つかの痛みが 全身を走り 冷たい感
覚となって 頭から足先まで 貫くヘモデル・風早由美子





古雅な中庭で

古風な それでいて雅味ある庭の点景に置かれた 長じゅばん一枚の 緊縛の女 その美しさの なんとも悲しく あわれにも艶（うつく）なることよ こぼれ出た白い脛（すね）が 痛ましいほど白くおいでて この雰（ふん）囲（い）気の なまめかしくも 哀切なることへモデル・村上ユキ





緊縛悶姿

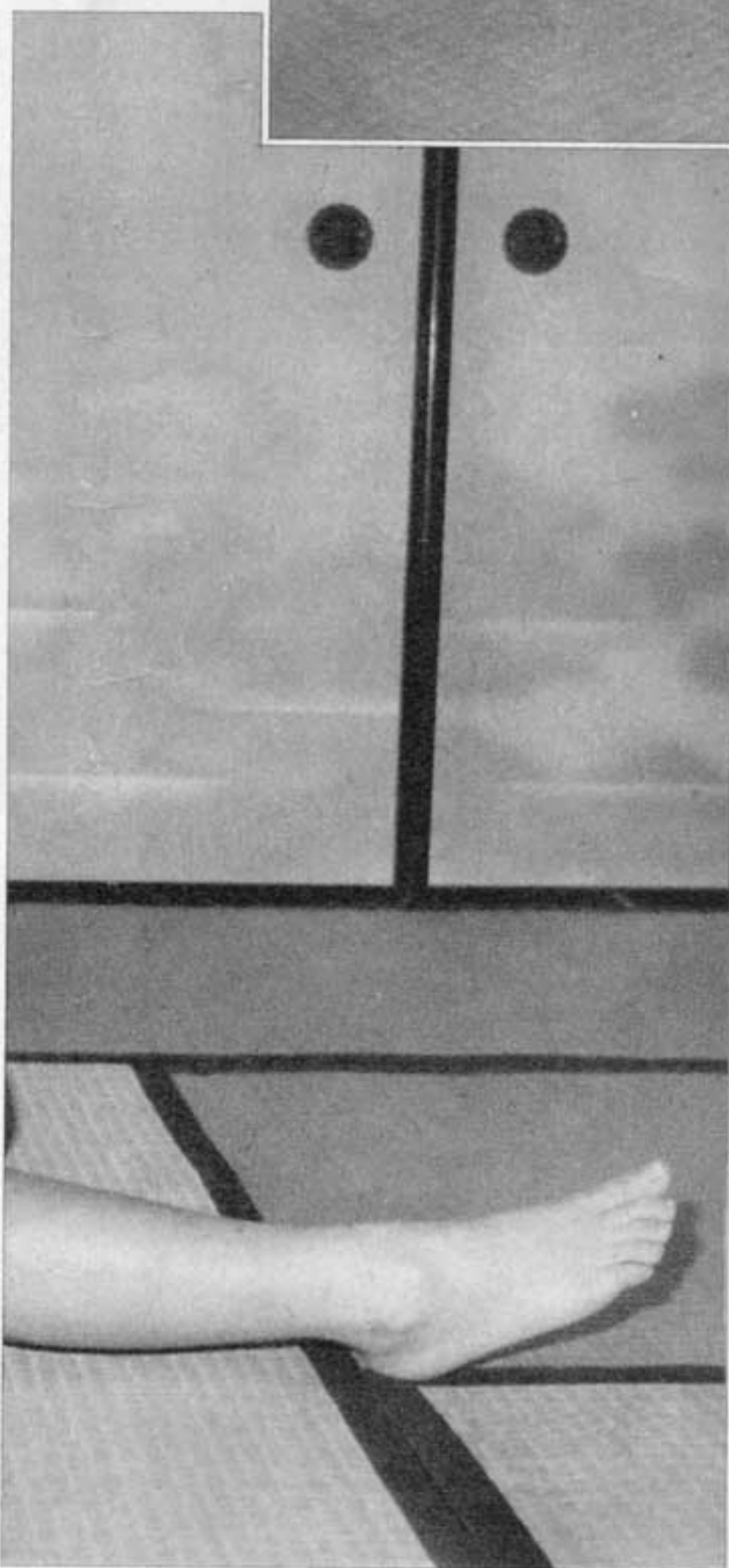
縛られてもだえるところに 女の美しさがあるという 丸い曲線のなまめかしさが 美を生むのだという〈モデル・島崎ユカ〉

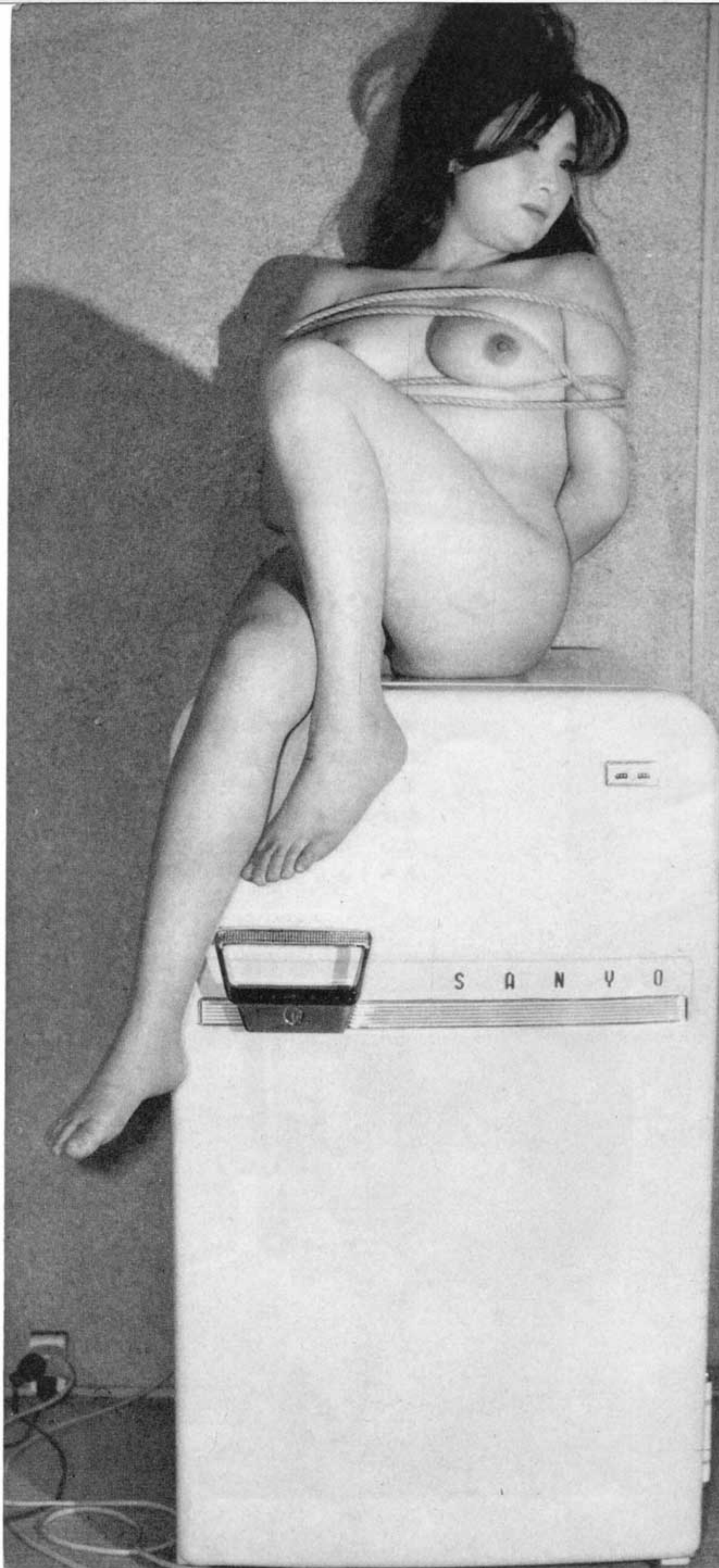




早く叩いて

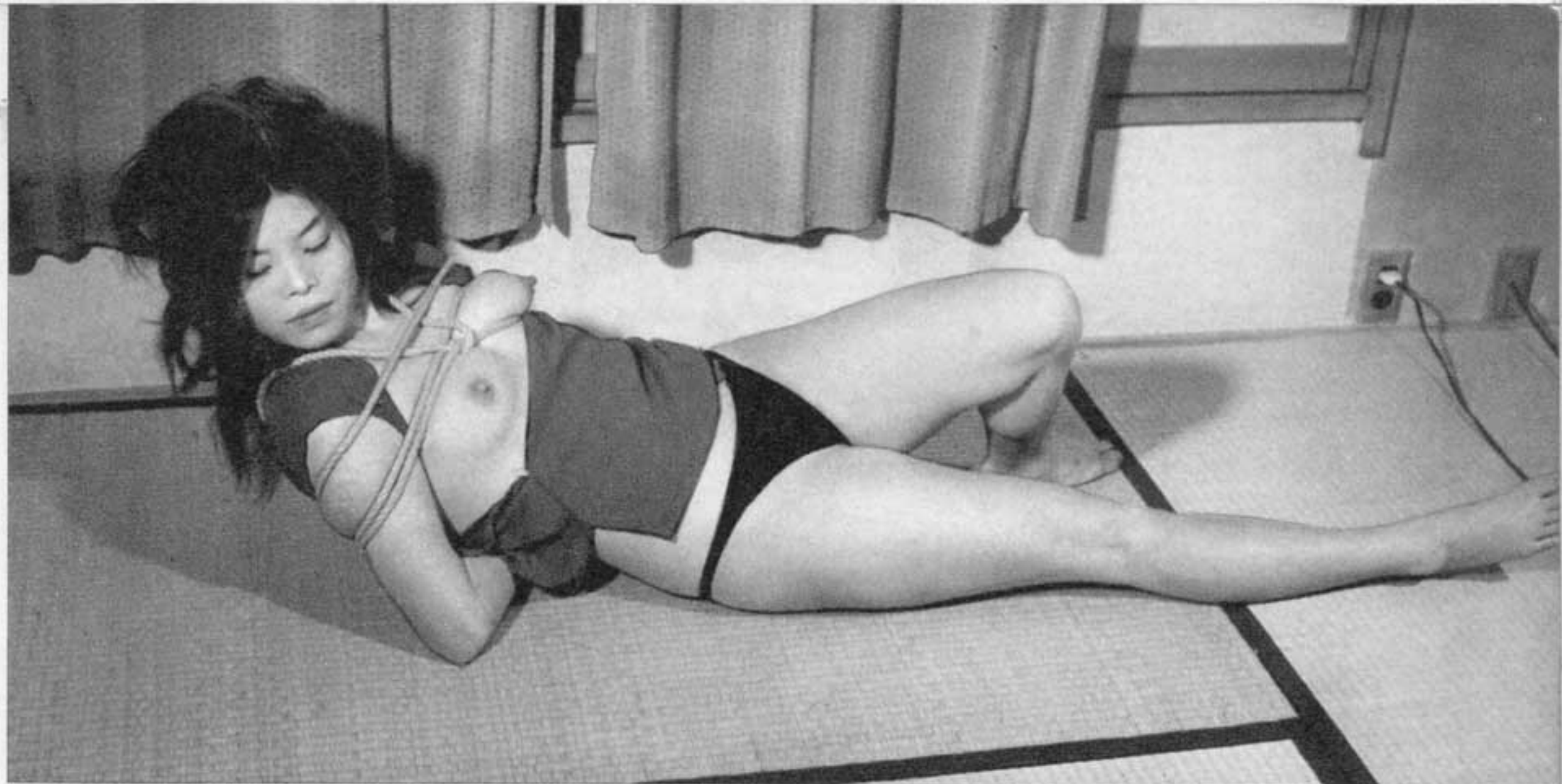
パンティーを下ろして むき出しのお尻 早く鞭を当ててほしいへモデル・西牧えり子





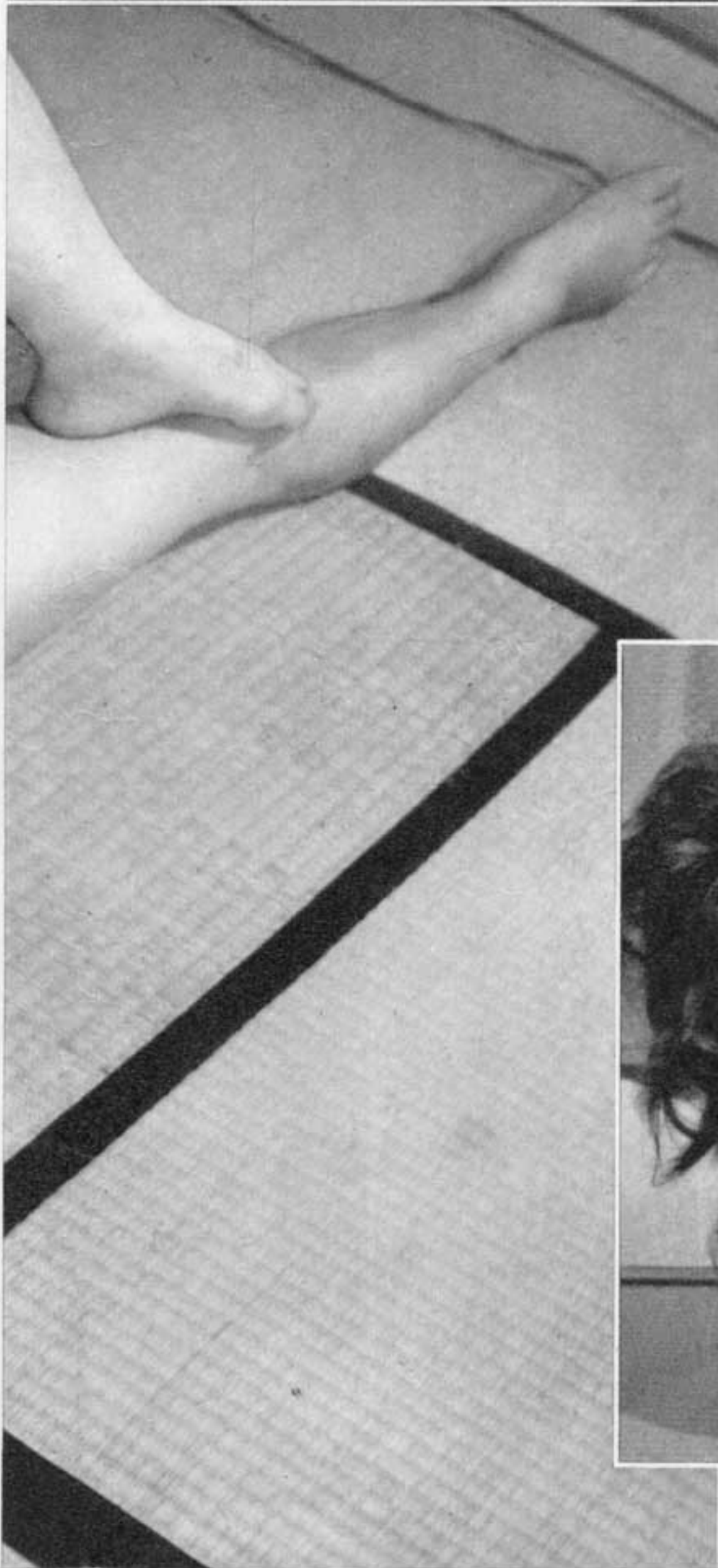
冷蔵庫の上に

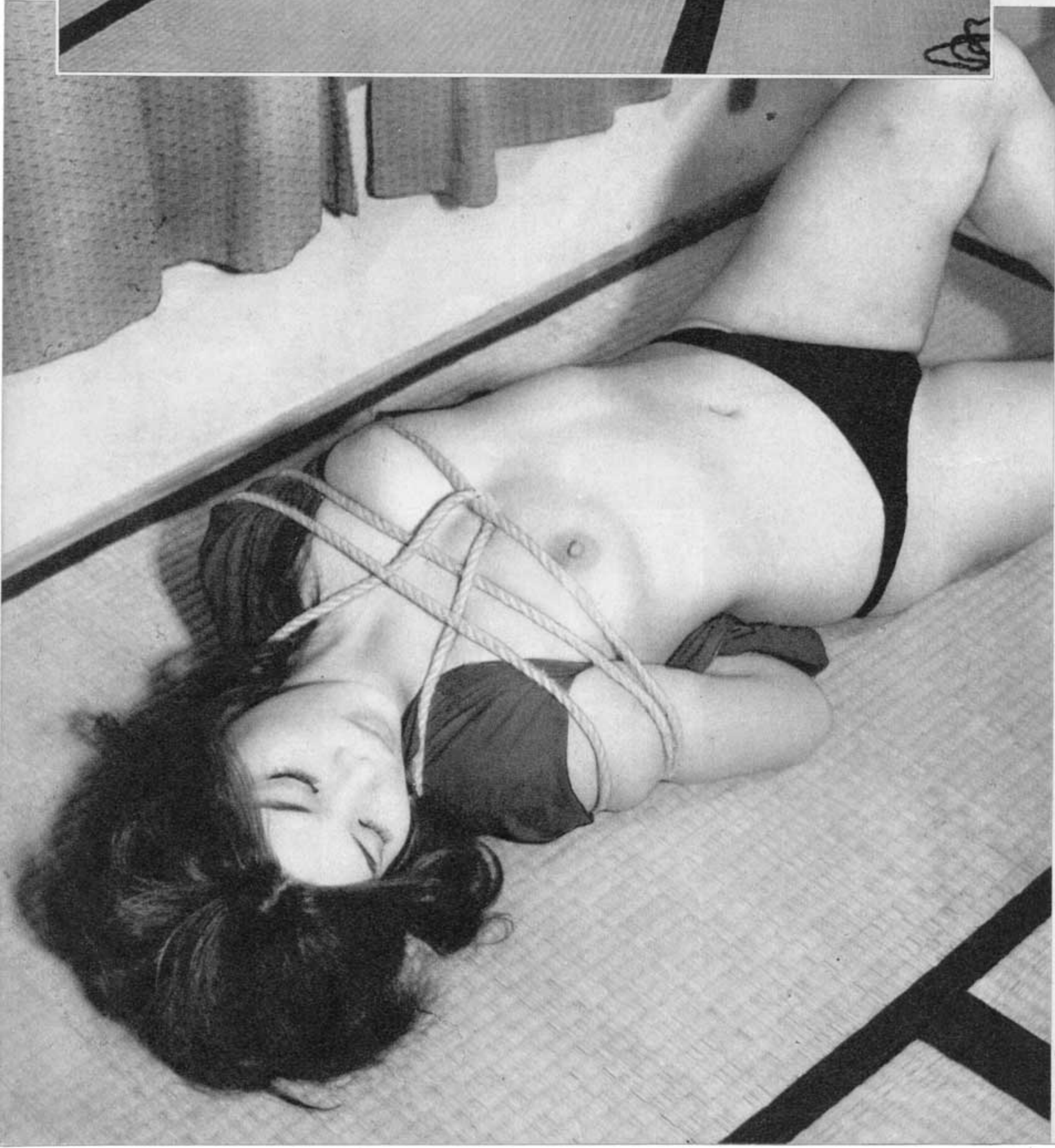
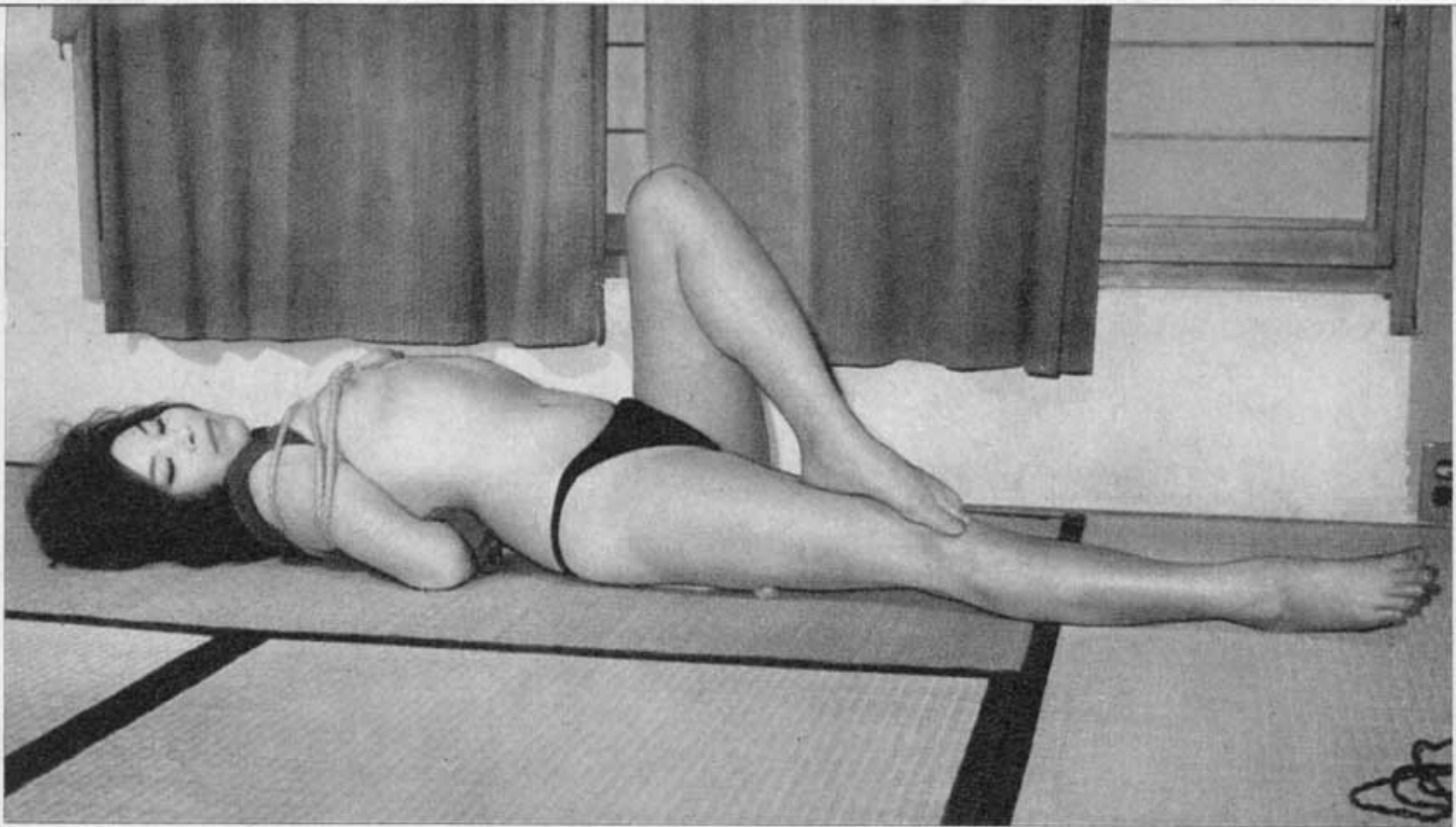
メカニズムとウェットな姿の組み合わせへモデル・島崎ユカへ

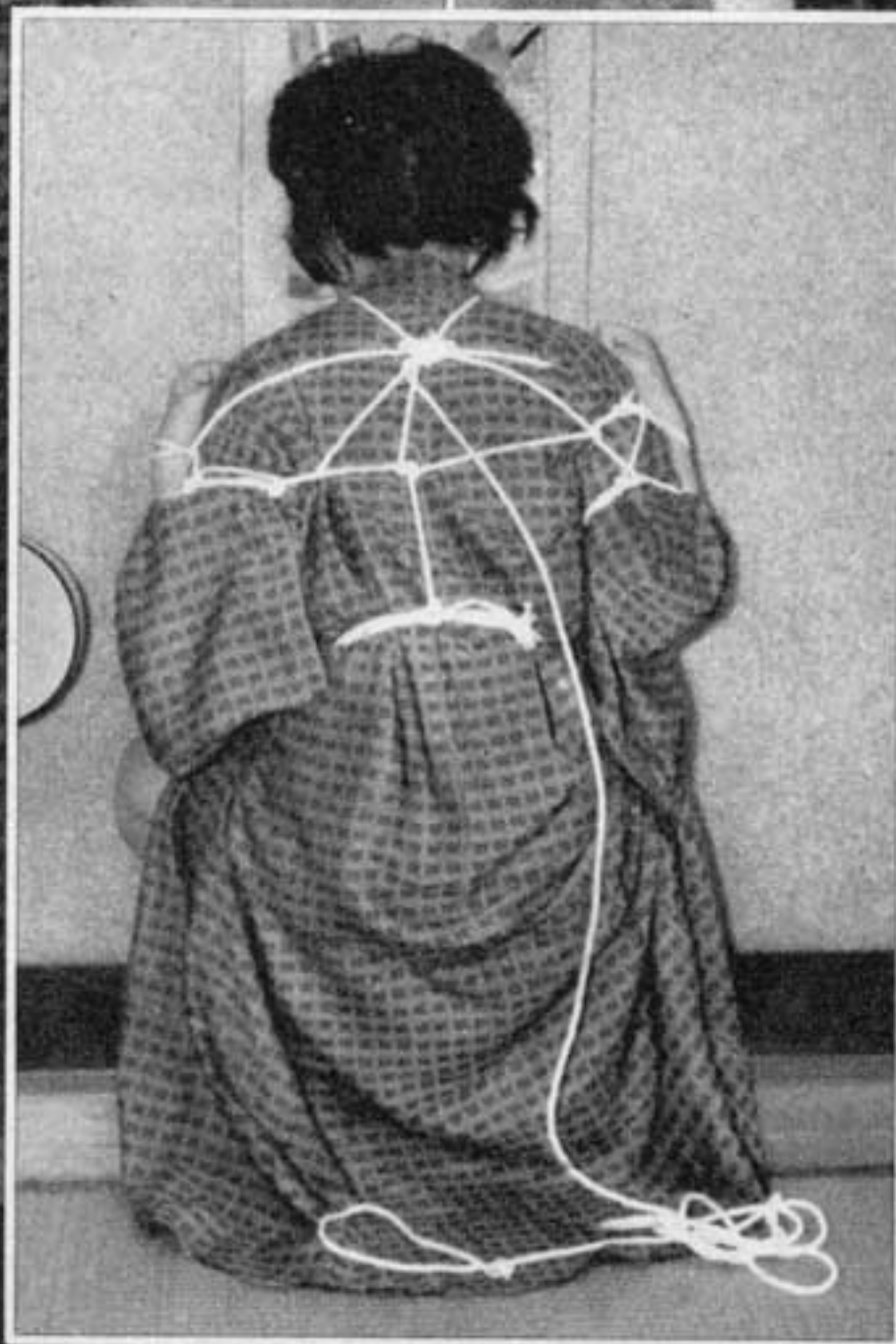


シャツも破れて

着ているシャツも破かれて 全裸に近い姿で 縛られて ころがされてきて この^{しいた}虐げを受けるポーズで 女は 次の仕置きを 待たねばならない たとえそれがどんなに苛酷であろうとも 〈モデル・風早由美子〉







ひじ曲げの拘束

ひじを曲げて両わきにくっつけたポーズで縛られた女は 文字どおりお手あげの姿勢だ しかも うしろで^{みもと}絞取りのように縦横に結かれ そのまま吊られた形では どう身動きもできない スズメのように〈モデル・井神せい子〉



天国打ち尻





マゾヒストの奴隷的奉仕



尼打ちのお仕置き



尻打ちの三昧境



仕置きのムチはきびしい



家庭教師と貴族の少年（1800年銅版画より）



尻打ち具——尻打ちのためにはいろいろな道具が考案されている。その一つ。



夫の尻打ち権——「お仕置きなんだから、痛いのは当たり前だぞ！」





尻打ち責め——一打ちごとに、尻の皮が破れ、血が噴きにじむく田上恵子・え>

責められる女の姿態



腿を噛む歯——車が回るごとに、小さく鋭い歯が腿の肉を削る<田上恵子・え>



ガケに吊られて——下は千仞の谷，片足首を縛られ，死は寸前にあるく江馬美久・え>



カギに吊るすぞ——美しいエモノは、カギに吊るしたほうがおいしく江馬美久・え>



棒責めの女——いましめの縄目に六尺棒をこじいれてえぐる痛さく古正英生・え>



凄艶吊り女——うしろ手のまま吊られた女の、凄いほどの美しさく古正英生・え>



サクラ木吊リ——サクラの木に、時ならず咲いた、白肌の悦虐の花<小田利美・え>

譚奇俗風

1961年・4月号

特集 東西古今刑罰残酷物語

刑罰にひそむサディズム

刑罰にしろ、拷問にしろ、その基底には、人間のもつ残忍性がひそんでいる。つまり、サディズムが、そこに顔を出しているということなのだ。

しかも、それが、常に、社会道徳に反するからとか、法律にもとるからという「大義名分」に則^{したが}っているところに、それを是認しなければならぬ。

だが、できうべくんば、人間によって同胞を責めさいなみ、人間の手によって同類を殺傷することは、避けたいものである。「宗教裁判」の名のもとに、いくたの残酷きわまる行為がなされたことは、歴史をひもとけば、今なお、目をおおわしめるものがあるではないか。

人間が集団生活をする場合、もちろん、そこには秩序が必要である。その秩序を乱すものに科せられる刑罰の存在するのも、必然の所産であろう。だからといって、それが苛酷残酷にわたっているという論法は、当をえていない。

しかし、刑罰以外にも、われわれの周囲には、サディズムが存在している。人間の本性として、やむをえないところであろう。ただ、それが、あくまでも、他人に迷惑を及ぼしたり、社会秩序を乱したりすることは、許さるべきではない。

性向としてサディズムを好むならば、それだけは心得ていて、おのが世界を、限られた範囲で守り、楽しまなければならぬのではあるまいか。

△奥村世紀男▽

世界残酷刑罰の生態

— その刑具・拷問器が迫るもの —

真野麗



拷問のばし責め—アントワープ1554年

てまかり通っていた時代があったことは、それぞれの国に今に遺されている刑具や拷問器をみれば、一目瞭然とする。

南ドイツはニュルンベルグの中央に建っている城の一角に、そのむかし、長いあいだ牢獄にあてられていた五角形の塔が、たかだかと聳えているが、その頂上の一室に「鉄の処女」(原名Eiserne Jungfrau)とよばれる六尺ゆたかな大きな人形が、デンと安置されている。

文字どおりまっ黒な鉄でつくられており、ふっくらとしたしもぶくれのおだやかな顔形、頸から胸にかけてキクの花びらがたのヨダレカケのようなものをかけ、長いガウンをまとっている姿は、男を知らぬ若い尼僧といった格好であるが、これが十五、六世紀ごろの、この国の恐ろしい死刑の道具だったのだ。

死刑に処せられる者が、この前につれてこられると、ユングフラウのガウンがドアのように左右に開く。

と、そこには、豊かな乳房もふくよかな腹もすんなりした脚もなくガランドウになっていて、内側いちめんに鉄製の鋭い針が突出している。また、そのハトのようなやさしい双眼の裏がわにも、それぞれ二

「処女」という名の人間粉碎具

世界いずれの国をとわず、残酷きわまる刑罰や拷問が、大手を振っ

本の鋭利な針が植えられている。

ユングフラウは、そうしたおのが体内に、死刑犯をむかえ入れると、はなさじとばかりしっかりといただきしめる。

そのとき、死刑犯の目には目を、胸には胸を、腹には腹を、臀には臀を、脚には脚をと、するどい針がのぶかくつきささる。

処女の身内には、白い血ならぬ真紅の血がほとばしり散り、だかれた者はざんにんな悶苦のうちに息がたえる。

すると、処女のガウンの下、床板が開いて、内の死骸が十幾丈の下へ落下するのだが、そのおちていく暗黒の道がせまい鉄管で、内側に刃を上につけた刀身が、無数に突きでている。

死体はこの刃にひっかかりひっかかり、寸断され、骨も肉も皮もバラバラになって、どこのだれというおもかげをもとどめずに、ニュルンベルグの城をめぐるって流れている掘割りの中に、まきちらされるのである。

ころがされる「パン屋の檻」おり

ニュルンベルグの五角塔の内には、このほか、当時用いられたいろいろの拷問の道具が収集されている。

イバラのある首かせや、大きな焼ごてや、首切り包丁などもならんで、Folterstuhl, Forterweige, Streckbank などの名でよばれているところの、鉄のイバラが無数に植えつけてあるイスや寝台や揺りかごなどがある。

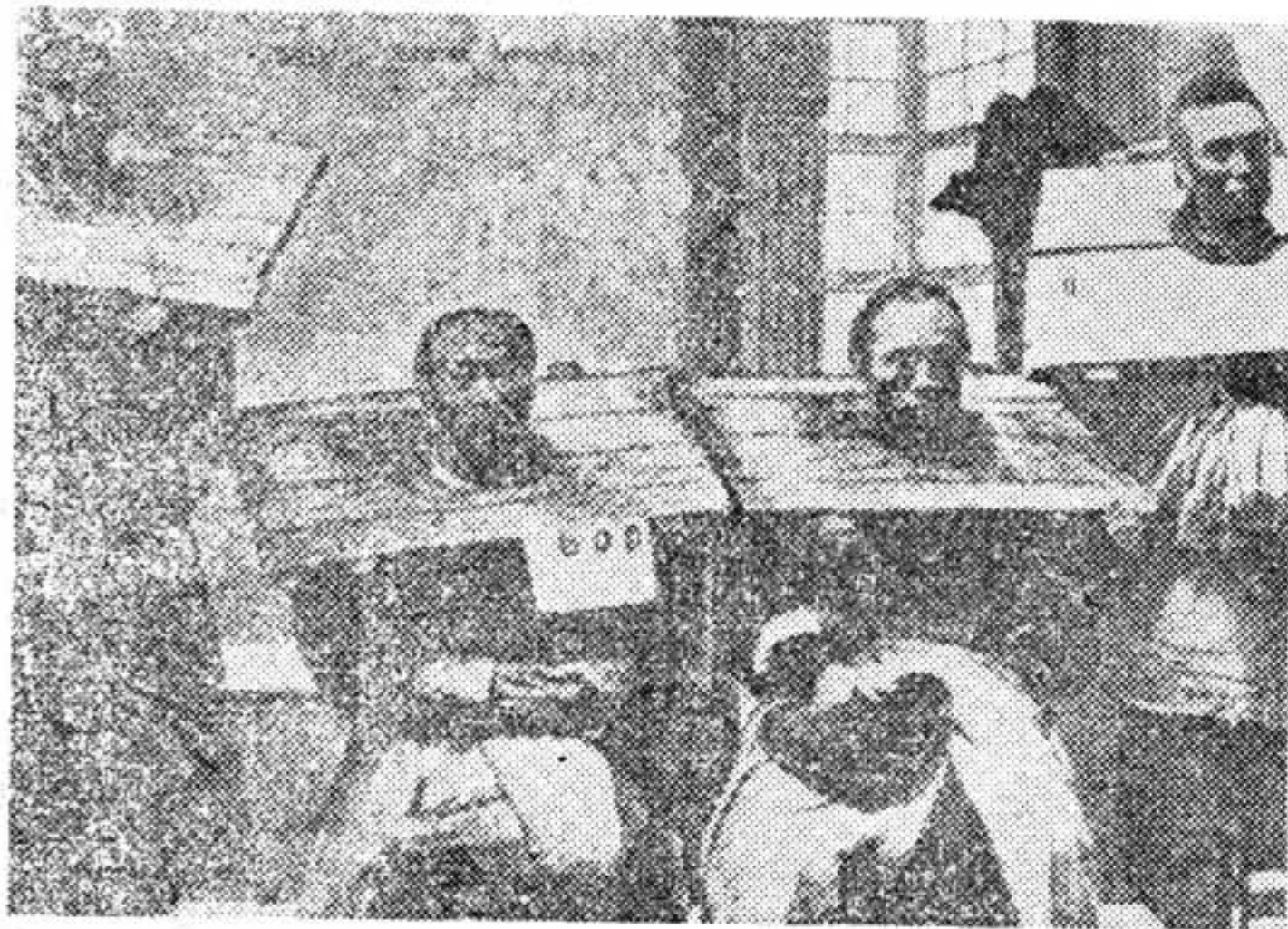
針のムシロのような、それらに腰かけさせたり、ねかしたり、ゆり

ハ特集・東西古今刑罰残酷物語Ⅴ

かごの中に容疑者をいれて、斜面をゴロゴロところがしたり、倒したりして苦しませるのだ。

「パン屋の檻」(Bäckerlaufe) という刑具がある。原名の由来は、生活必需品で暴利をはかる不届きなパン屋の牢屋というわけだ。

移動式の小さな監房のようなもので、この中に不正なパン屋をブチこみ、はねつるべのような仕掛けで水へつけたり出したりしながら、苦しませる。



支那広東の罪人の首かせ

ときには、ベッケル・クウフエに入れたまま、町の辻などにおいて、さらしものにしたうえに、通行人のころがすにまかせた。

さらしものの刑は日本の江戸時代にもおこなわれていたがドイツでも盛んだつたらしく、このほか「家の竜」(Hausdrache) と称するのがある。

青い竜の面で、亭主をバカにして間男

ぐるいをする不貞な女房を懲らすときに、これをその女にかぶらせて十字路にさらしものにした。

また、わいせつ罪を犯したものには、馬の面をかぶらせるなど、その罪によっていろいろの面が用いられた。

ベルリンのメルキッシェ博物館にも、この国の刑具や拷問器が、かなり豊富に集められている。

表面に首だけ出せる穴があり、内側に針の突きでているタル。太い鉄のクサリの一方に重い分銅があり、他方の端には足にはめる輪のついているもの。凸凹のある台の上に人を乗せて、その上に重い鉄の車輪のようなものを回転させる装置等々、かぞえれば限りもないが、そのいずれにも、残酷の二字をりっぱに冠らせることができるものである。

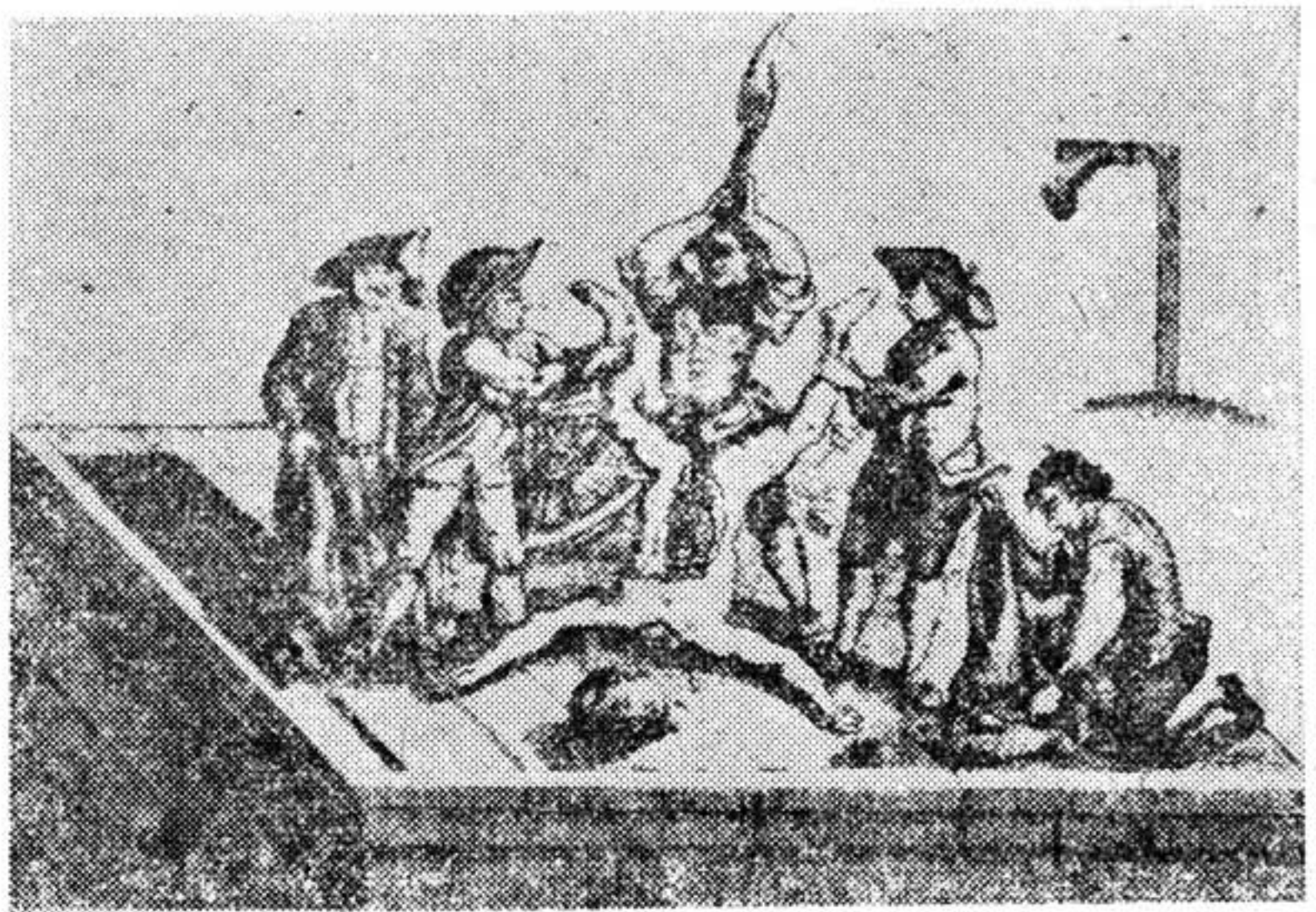
ドイツでは、つい三十年前まで、罪人に木の台の上へ首をのばさして上からドスンとオノをおとして斬首する死刑方法を行っていたが、これはあるいは、往時の残酷思想——宗教裁判の残酷思想——から糸をひいているものでもあろうか。

口いっぱいの針坊主

このような血なまぐさいふうは、ドイツばかりでなく、スペイン、スイス、フランスから、イギリスまでも吹き荒らしていた。

政権が宗教上の権力者の手に帰っていて、異端者にたいする処罰が是非の判断をこえた迷信的態度で行なわれたにもかかわらず、だれひとりこれに疑いをはさむことが許されなかったからであった。

こうした宗教裁判所のむごたらしい酷刑や拷問は、十三、四世紀



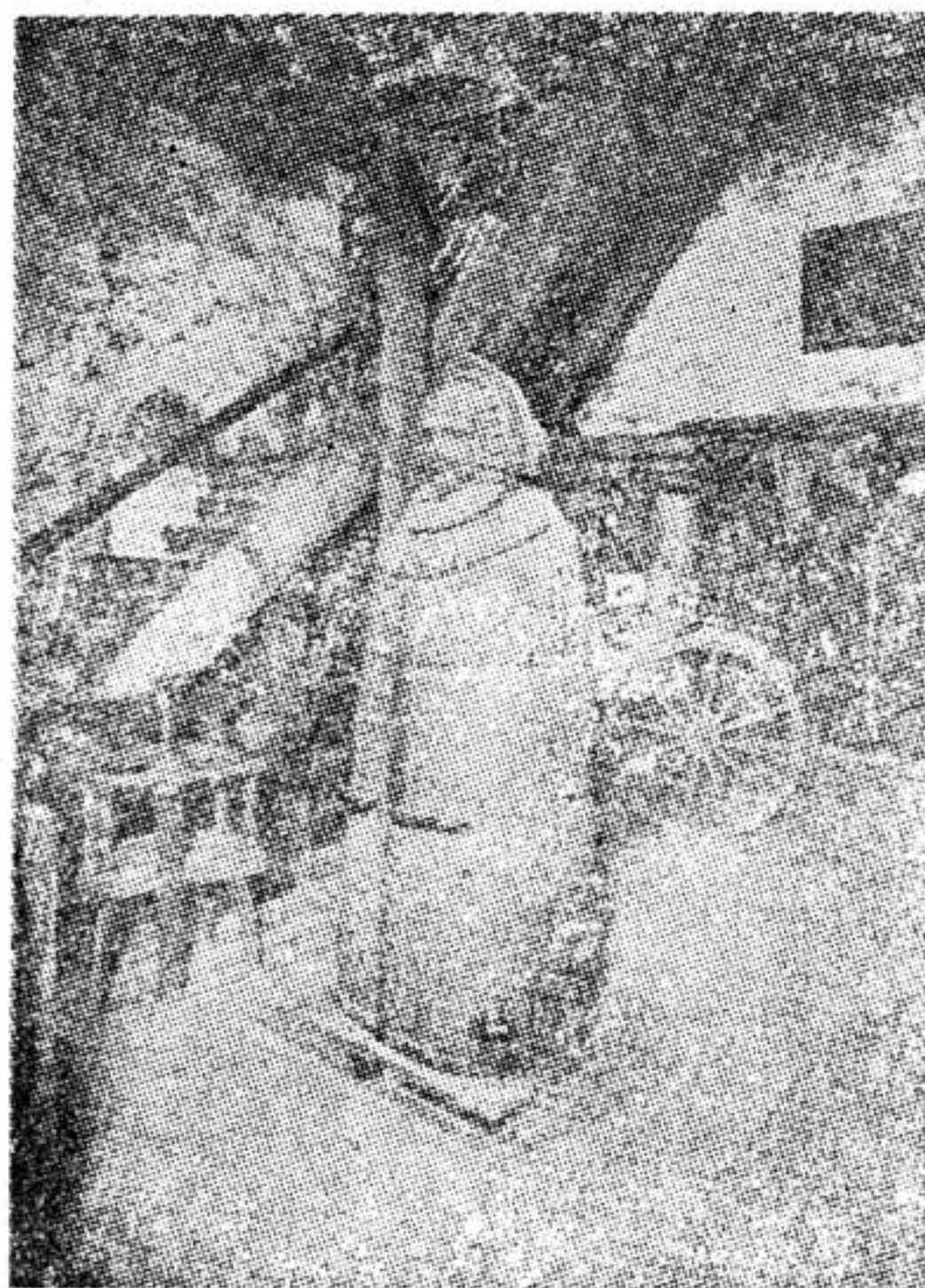
内臓をえぐられ首を落とされて身を四つ裂きにされる

十六、七世紀までも続き、その間、生きながら焼かれたり、圧しつぶされたり、こなごなに碎かれたりした者の数は、どれくらいに上るかわからぬほどだった。その三、四百年ほどの間に、フランス、イギリス、スペインその他の国々で行なわれた残酷な刑罰や拷問の方法を、すこしばかり挙げてみると――

Human turnspit というのがある。

両端に車輪をつけた九メートルほどの長さの鉄棒が、地上一メートルのところにとりつけてある。この棒に、囚人の全身を堅く縛りつけて、車輪をグルグルと回転する。速度をどんどんとはやめるから、犠牲者はみるみる目がくらみ、その苦痛はひととおりでない。

しかも、その下では火を焚いて、魚でも焼くようにいぶし焼きにするのである。



ニュルンベルグの死刑台に鉄の処女

また、Lapidation とよぶ拷問法は、犠牲者を全裸にして、その片足にクサリをつけて馬の背に結びつけ、馬に鞭をくれて疾走させる。犠牲者は、頭を下にして目がまわるほど速くひきずられながら、路傍の石塊や木ぎれにぶつかって、皮肉は破れ、骨が出て、からだじゅう血まみれになってしまう。

そのうえ、役人たちは、見物人に命じて、犠牲者に投石させるのだ。獄につないでおくにしても、ただブチこんでおくのではない。フランスの有名なバスチーユ牢獄の絵をみると、囚人が監房の壁にとりつけた石の台の上に立て膝でよりかからされているが、その足には足枷あしかぎ手には手枷てかぎがはめられているうえに、手枷にも足枷にも、大きな鉄のオモリが太い鉄クサリでつけてあって、それが宙づりになっている。

オモリは囚人の手足に、骨も砕けよとばかりミリミリとくいいていくわけだ。

これと似たものに、Strapado という拷問がある。容疑者を片手吊りあるいは両手吊りに、天井からつりさげ、その足の先に鉄塊のオモリをだんだんと増しながら、鞭打を加えて自白をしいる。

オモリが増すにつれて、犠牲者の頸くびの関節、腰の関節、膝の関節、足の関節等々、すべての関節ははずれ、内臓もちぎれて、無残のさいごをとげることは必定ひつじょうである。

Abarbarous contrivans と名づけられる処刑法もまたひどい。魚の釣り針のような鋭くとがったイバラがいちめんについた、鉄製の針坊主のようなものを、囚人の口内におしこんだのち、首枷くびかぎにとりつけた金具で上下の唇をおさえつけ、カギをかけてしまう。

唇がとざされているため、口内のイバラは、囚人の上あご、下あご、頬、舌、あらゆるところに深く突き刺さり、ついには肉を破って皮膚のおもてにまで突きでる。

あとから針坊主をとりだしてもらっても、食べ物にくうことはおろか、口もきけなかったということである。

焚かれる「アンドリューの十字架」

イギリスの刑罰史をみると、St. Andrew's cross ということばがさかんに現われる。

字面じづだけではなにやらありがたそうに見えるけれども、じつはこれは拷問用の十字架なのだ。時の宗教上の異端者すなわち異教徒は、か

たはしから捕えられて、この赤く塗られた十字架に縛りつけられ、骨が砕かれ、臓腑が破れて、死ぬまでコン棒で打ちのめされたのである。

また、Battering ram というのは、むかし敵の城壁をつきこわすためにつくられた攻城用の大きな撞木しゅもくのことで、この先端に犠牲者を縛りつけて、城の壁に打ちつけて殺したのである。

スペインには、Sanbenito という拷問がある。赤塗りのセント・アンドリューの十字架と、火炎と悪魔のすがたを描いた黄色い囚衣の名で、異教徒にはこれを着せて、町の辻に長いあいださらしものにしておく。

もちろんその間、一片の食べ物をもあたえないから、犠牲者は空腹と疲労と苦痛とに衰弱しきってしまう。

これにたえかねて改宗すれば許されるが、信仰を改めないときは、その姿のまま、うずたかく積みあげられた薪まきのてっぺんに縛りつけられて、生きながらに焚殺された。

ナポレオン一世が遠征してスペインにはいったとき、この酷刑を厳禁した（一八〇八年）が、サド性の強いスペイン人にはこれがやめられぬのか、一八三四年ごろまでは依然として Sanbenito が行なわれていたということだ。

Sweep-gallows という拷器がある。はねつるべのような仕掛けで、十フィート以上も高く吊りあげられる棒の先端に、うしろ手に縛った犠牲者をくくりつけて、急速に上げたり下げたりして苦しめる責め道具だ。

ふつうの者はたいいていこれでまいてしまいが、それでも自白しない場合には、火刑にした。

上げ下ろし責めに、Strappado というのもある。天井に滑車を取り

つけて、万力のようなもので、人間をつりあげ、上りきったときに急にドスンと地上に落下させるのだが、いっそう苦痛をまさせるためにその者の足くびに足枷を、手には手枷をはめ、それぞれに鉄クサリをつけ、鉄のオモリを結びつける。

このため犠牲者は、失神する前に、かならず手足の関節がはずれてうすきみわるい姿と化してしまう。

その始終のありさまを、黒いガウンを身にまとった、ニエルンベルグの鉄アイゼン・ハング・フラウの処女マリアのような装いのカソリックの尼僧が、平然とした表情でこれに立ち会って見ていたというのだから、当時の宗教徒が、いかに嗜虐の徒であったか、うかがい知れよう。

投石の拷問に、ジューデア人のあいだに行なわれた Jewish Lapidation というのがある。

犠牲者を一定の場所に縛りつけて立たしておき、その犯罪の目撃者であり証人である者に、まず第一石を投げさせる。投げつける部位もかならず犠牲者の下半身と定められていた。

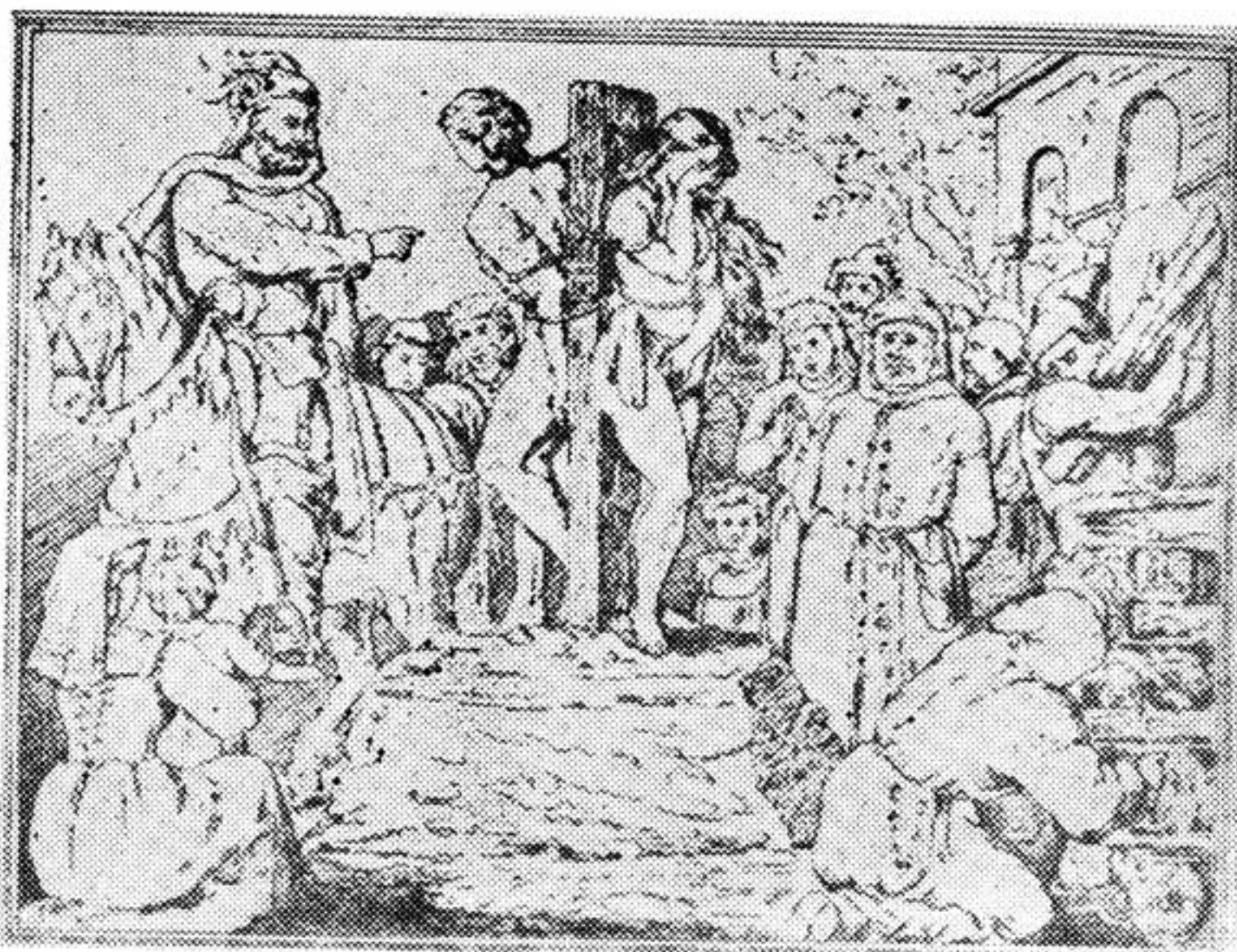
投擲用の石は鋭い突起のある石塊で、これが強力に投げられるのだから、柔らかな股間部などに当たるときは、めっちゃめっちゃになってしまう。

また、これが命中しなければ、ほかの証人が第二石を犠牲者の上半身に投げつけることにきまっていた。

それからのちは、立ち会いのものの多数が、いっせいに、場所をさだめず投石して、あいてが死ぬまでこれをつづけることになっていた。

水責めの拷問も、ヨーロッパの諸国にさかんに行なわれた。

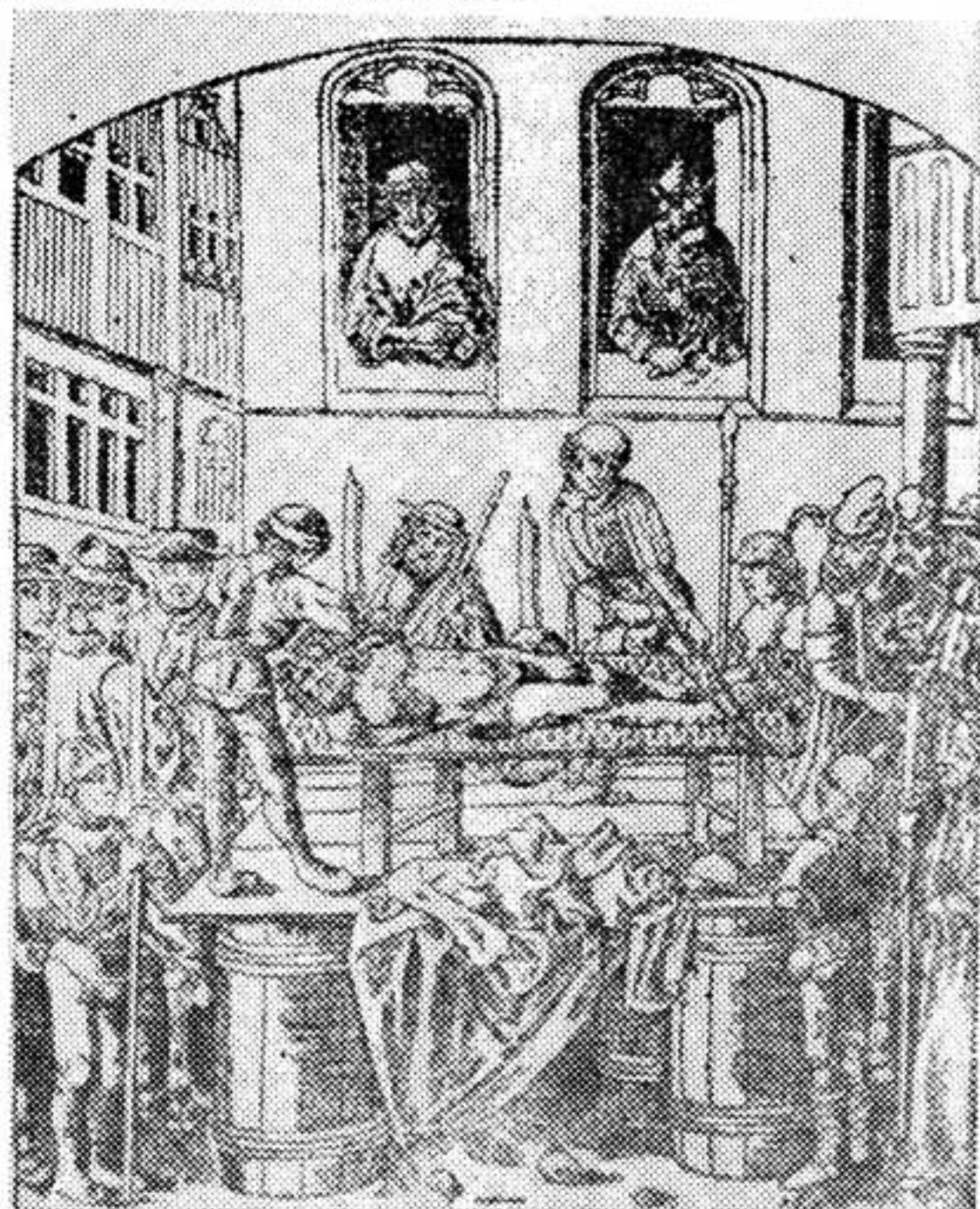
そのもっとも普遍的な方法は、犠牲者の顔を上向かせて、その口の中へおしこんだジョウゴに、たてつづけに水を流しこむやつだ。



犠牲者は息をつけぬことはもちろん、腹がみるみるふくれあがって水ぶくれのまま悶死するよりほかに道がなかった。水のかわりにナマリの溶液を、口内に流しこむ酷刑もあった。被刑者のからだはたちまちにして焼けただれ、七転八倒しながら狂死したことはない。

上・姦通者の焚刑
(イタリヤで、十五世紀)
右、釘板の寝台に縛られて所刑せんとすハイネマンの(戴く者より)

Thumb-screwと名づけられる拷問方法も、よく行なわれた。容疑者の手の親指をしめつ



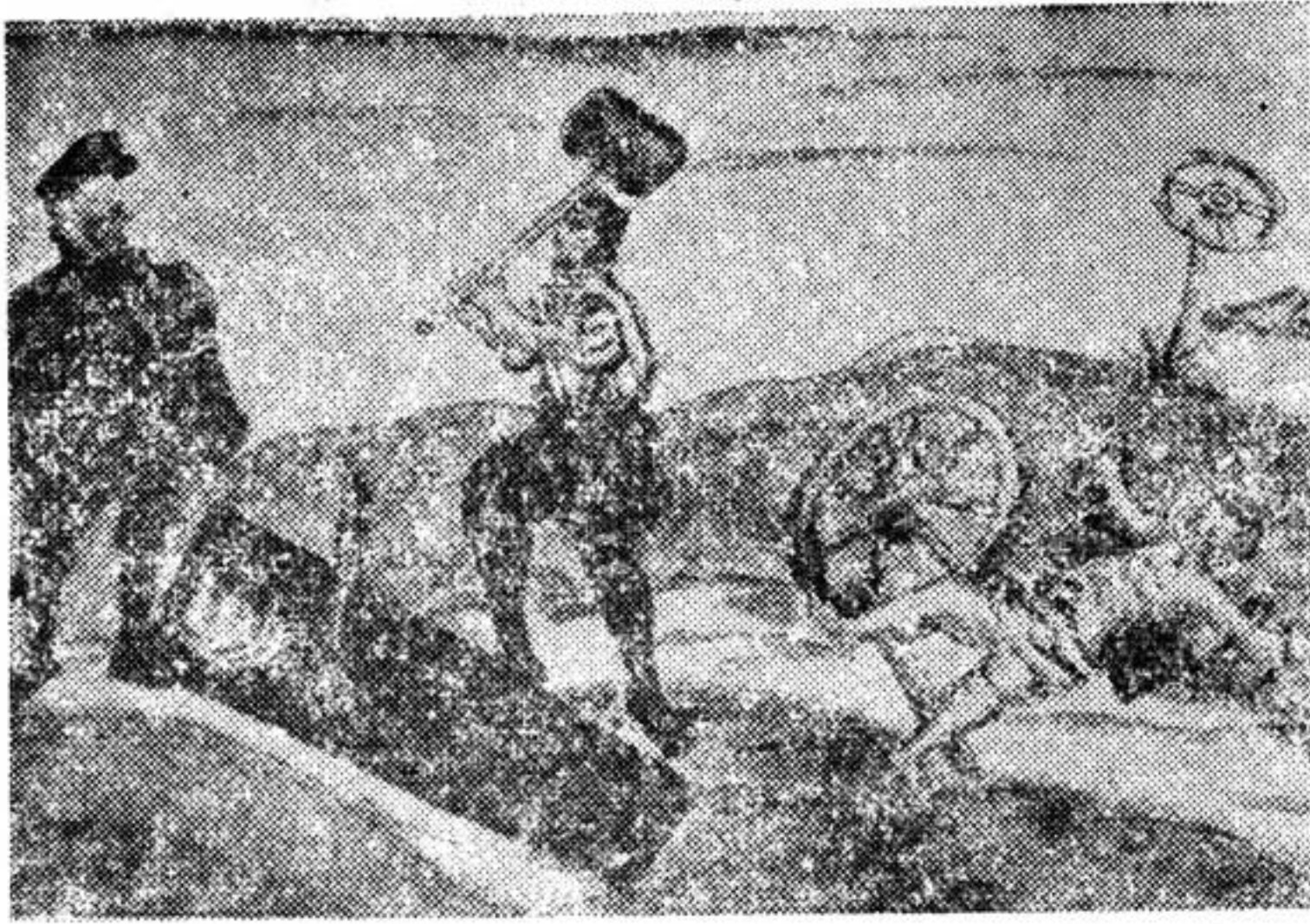
ける責めで、小型であり、簡便であり、よそ目にも大げさではないが、じつはこれが、すこぶるに残酷な、犠牲者にとってはきわめて苦痛の多い刑罰なのである。

親指の第一関節を直角に曲げて、この上を強い力で押しつけていく。また逆に、親指の腹をそらして、その先端に圧力を加える。あるいはまた、以上のやりかたのまま、親指を右と左にねじり回す、等々の方法が用いられた。

イギリスのある帝王が、この拷問がいかに苦痛のものか、つまり被刑者を苦しめるといかに効果的なものか、それをためすために、みずからの親指にタムブ・スクリューをやってみて、「なるほど、これはすごい」と感嘆したという伝説がある。

水責めのいろいろ

アメリカはリンチの本場といわれている。西部劇などをみても、かなり残酷と思われるいろいろの私刑が現われるところ、それが単なる噂のみでないことを証拠だてている。



婦人は生きながら埋められて杭を打たれ、夫は車輪の刑にされる

そのリンチの一つは、答刑、すなわち Flagellation だ。これには古実があり、むかしのユダヤの習慣では、ムチは三本を要し、そのうちの一本は長く、ほかの二本は短い。そして、長いほうはロバの皮で作り、短いほうは仔牛の皮で作るということから、長いムチはからだの前面、つまり胸や腹のほうを打つときに用い、短いムチは、背のほうを打つのに使うことまで、りっぱに規定されていた。

また、鞭打の数は三つが一単位となっていて、たとえば「十三打て」というときには、

長短合わせて三十九回鞭打つ。答刑はこの法則を厳守しなければならなかった。

その極限は四十単位、そして打った数が正確かどうかを立証するため、答刑のあいだに、ヘブリュ語十三で組み立てられた聖詩を誦しながら、その一語ごとに一単位の鞭打を加えることになっていた。

この形式が採用されて、長い年月の間、これに準じてやっていたのだが、近年ではだんだんとそれがみだれて、かえって昔よりも残酷みをおびてきたのである。

たとえば、アメリカの商船や捕鯨船のなかで、被刑者を数の制限をこえてなぐった。また反則者の両手を縛って、船のマストの上へひきずりあげ、死ぬまで答刑を加えた。また、被刑者の女の臀だけを、長いムチでむやみと打撃した、等々の話がたくさんある。

答刑のみではない、黒人を生きながら焙り殺したのもすくなくないし、公の刑罰では、百年ほど前までは、ニューヨーク州の Auburn 監獄で何百年前のヨーロッパのそれそのままの拷問が行なわれていた。

その一つは White wash とよばれる方法で、ちょうど人ひとりはいれるくらいの大きさの木製の箱の中に容疑者を入れ、身動きできぬように縛りつけたのち、箱の上部にとりつけたジョウゴから、夏でも身ぶるいするような冷水を滝のように落として頭と肩の上へ注ぐのだ。

その水は、箱の外側で水槽のひもを引けば、たちまち流出するように仕掛けてあって、容疑者が自白するまで、この水責めは、つづけられたのだが、その前に窒息したり、凍死したりしたものが多かった。

また、両手を高く上にあげ、片方の脚は腰よりも高くつり、ほかの片足の爪先だけを地につけさせた苦しい位置に、容疑者を宙づりにしたまま、長いあいだ放っておく拷問も行なわれていた。

比較的新しい酷刑の例では、米西戦争のとき、アメリカがスペインの捕虜に加えた拷問の一つに、捕虜の両手をクサリで天井に吊り、両足は縛って壁につなぎ、つまり、そのからだを斜めに宙吊りの形にしたまま、口の中へ冷水をつづけざまに流しこんだことは、有名な話である。

また、一九二六年の六月、朝鮮平安南道平原郡順安面に住んでいた金明勝という十二歳の少年が、付近のキリスト教会の牧師でC・A・ヘスモーという者の庭へはいつて、リンゴを一つ取ったということにヘスモーは、少年を庭木に縛りつけ、

「こらしめのために、神さまにかわって刑罰を加える」

とばかり少年の両頬に「盗賊」の文字を烙印したという話がある。

アメリカ人はリンチがお好き——そういつてもいいのかもしれない。

さらに土人になると、北アメリカの土人の間には、厳寒中に猟のエモノが少ないときは、親がみずからの手でわが子を殺すことが行なわれており、中央アメリカの土人の中には、親が老齢または病気のために労働ができなくなると、子供が親を地上にねかせて、棒の先端でその咽喉をおしたまま息のとまるまで馬乗りになっている風習がある。

一般に、役たらずになった両親を雪中に捨ててすることは、アメリカの土人に共通の風習であるが、捨てられ殺される親の側も、捨てたり殺したりする子の側も、どちらもこれを自営上当然の美風と認めているということだ。

広島や長崎で大量の日本人を一挙に虐殺した現在のアメリカ人の残酷さも、もし自国防衛上当然と考えているとするならば、この風習に感化されたものでもあろうか。

女子を幽閉する宮刑

中国のむかしに行なわれていた残酷な刑罰といえば、まず第一に、

ハ特集・東西古今刑罰残酷物語Ⅴ



三人の巫女を束ねて火刑に処す 1574年)

宮刑（一名淫刑とも腐刑ともいわれるに）に指を屈することになるう。

もっとも学者によれば、宮刑は支那独特のものではなく、古代の文明国にはあったもので、おそらく、エジプト辺にはじまったものが、アッシリアやバビロン、インドの北方などを通して、支那にはいったものらしいということだが、宮刑がもっとも発達し、もっとも盛んに行なわれた国が支那である、ということとはできる。

中国歴史を学ぶと、宦官ということばにぶつかるが、どこの教師もこれのくわしい説明をしてくれないのがふつうのようだ。つまりは、この宦官こそが、宮刑すなわち淫刑をうけた男女であるというためであらうが、じっさいにもこの刑の正確な実態について、いまだに不明なのである。

中国のある古書には、
宮刑を説明して、「淫刑也。男子則割勢、女子則幽閉」とあり、また別のある古書には、「宮刑者、割勢去。勢者睪丸也」とあるところからみて、男子の宮刑は睪丸を抜去する刑罰ということのはわかるが、女子のそれ

は、幽閉とだけでは明らかでない。

それだけに、幽閉の解釈には、いろいろの説があつて、ある者は、文字どおり穴倉のようなところに幽閉しておいたのだらうといい、ある者は、男子の場合のように、被刑者の女陰にたいして直接に手術を加えたものといっているが、この手術論にもV縫合説あり、子宮切除説あり、V割去説あり、諸説ふんぶん。

が、いずれにしても、宮刑が、死刑に次ぐ重い刑とされてあつたところからみて、女子のそれも、相当の酷刑であつたことはまちがいない。

この処刑にあつた者は、性的変化のみでなく、性格も一変して、そのいづれも、嫉妬深く、陰險で、欲の深い下劣の人間になつて、悪事をはたらくので、宦官の弊害にてこずつた清の宣統帝が、紫禁城の炎上を機会に、満朝三千人の宦官を全廃したのが、一九二三年のことだつた。

乳房はぎのむずかしい剥皮の刑

むかしの支那には、剥皮の刑という残酷な刑罰があつた。

漢、魏、晋、梁などの時代に行なわれていたもので、その方法は、後周の張猷忠の伝をみると、

「張猷忠、アルトキ人皮ヲ剥グ。剥人ハ項ヨリ尻ニ至リ、刻スコト一縷。コレヲ裂クニ前ニ張り、鳥ノ翔ヲ展ゲタルガ如ク、率イテ日ヲ踰エテ始メテ絶フ。即チ斃レル者アレバ、行刑ノ人死ニ坐ス」

とあるから、被刑者を俯向きに寝かせておいて、その頸部から臀部まで、まんなかの皮膚を一直線に切り裂いたのを、だんだんに両側へ

皮を剥いでいき、ちょうど鳥が羽をひろげたような形にして、苦しめながら幾日も生かしておく。もし皮の剥ぎ方がまずくて、被刑者が即死するときは、刑の執行者までが、その過失の責めを負うて、死刑に処せられる、というわけだ。

この人間の皮はぎは、被刑者の体質によって、はなはだしい難易があるもので、六千余人の皮をはいだという者の経験によると、痩せた男がいちばんたやすく、肥った女がもっともむずかしいという。

それは、痩せている者は、皮と肉とのあいだに脂肪がないから、スルスルとはげるが、脂肪層の厚い肥満者、ことに女となると、はぐと力をいれるわけにはいかない。注意しながらすこしずつ小刻みに上手にやらないと、皮に肉がくっついてきて困るからである。

そして、中でも知力を要するのは、女の双の乳房の皮をむくときだ云々のことが、当時の古文に記されている。

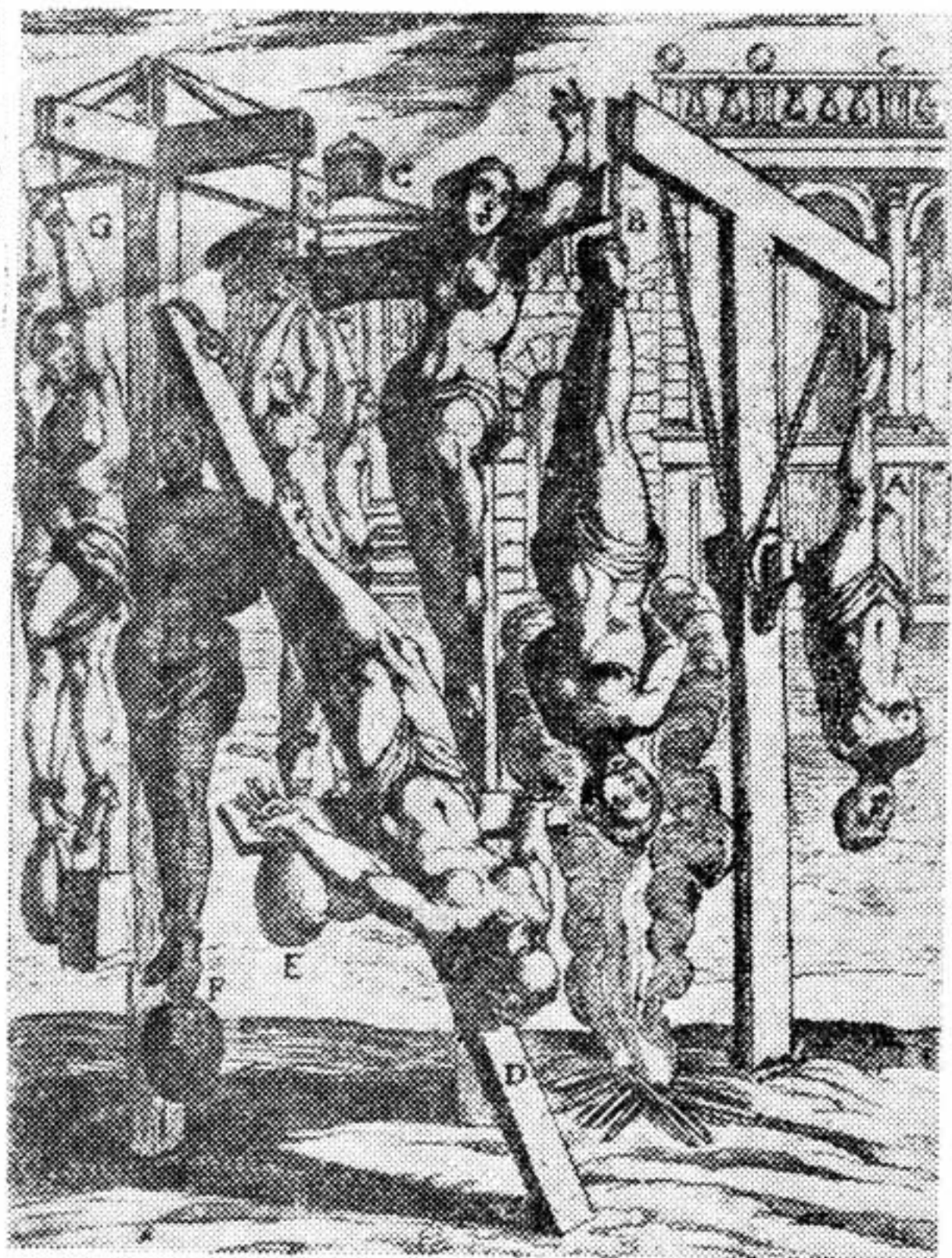
これで思いだすのは、支那の話ではないが、有名なゴンクール兄弟の日記に、次のようなことが書いてある。

「さきごろ、クラマル解剖学教室の医員が数名免職になったが、その理由は、かれら医員が、春本の装丁を専門にしている製本師に、女の死体の乳房の皮をはいで売った事実が発覚したからである」

このように、女の乳房の皮を用いて装丁した珍本が、ごく少数ではあるが、世にあることは事実なので、メルシエ・ド・コムビエーニエ著わすところの「乳房の讃」などは、その一つだ。

変化自在のインスタント刑具

支那には、拷問もいろいろ行なわれた。



残酷極まりない吊るし、さかさ磔の刑

煮えたった油を、容疑者の指の爪のあいだへ流しこんだり、胸へそそぎかけたり、あるいは胸板を刀で切り開いたり、などの、むごたらしい拷問が、堂々とまかり通っていた。

ある人が三、四十年前に、満州の本溪湖で目撃したところによると、ふたりの巡警が、夫を毒殺した容疑の女とその情夫を、白状しないからというので、腹、胸、顔と、ところかまわず土足の靴で踏み碎いていたということだ。

姦婦姦夫にたいする拷問法としては、また、その両者の頭髪をそれぞれ左右に分け、その一つと一つとを堅く結び、ほかの一つと一つに

ナワを結えつけたのち、ふたりを水の中に投げこみ、左右から交互にそのナワを引いて、自白するまでこれをなんども繰りかえした。

焚殺の刑には、こんなものがある。

一九二七年の一月末のこと、奉直戦の脱走者が土匪に化することの取り締まりに困りはてた当局者が、なんでも残酷な刑に処して、あとのやつらのこらしめにしてやろうと考え、北京の南にあたる直隸省固安というところで、土匪の頭目三名を焼き殺すという宣伝をして、公開の処刑が行なわれた。

そのとき、頭目たちに厚い綿衣を暖かそうに着こませたので、かれらは優遇と思って気をよくしていたが、さて、三人をアジロ製のカゴに入れて空中につりあげると、それぞれの全身に石油を浴びせかけて火をつけたからたまらない。

はじめのほどは、ブスブスといぶっていたが、厚いきものだけに、だんだんと火勢が激しく長く燃えあがり、ついには三人ともことごとく、石灰のようなザクザクした骨の破片となって、焼けおちてきたのである。また、さらし首と絞首台とを兼ねたものがあった。ニュルンベルグの「鉄の処女」と同型で、カギがかかって出られない檻だが、これは檻の上へ首だけ出るようになっていた。

このまま被刑者を一定期間、大道に生きながらさらしものにして置き、いよいよ処刑の日となると、足台をとりはずして、絞首にかけることができる。そして死後にも、そのまま、さらし首にしておけるという、変化自在のインスタント刑具であった。

おわりに、ソビエト・ロシアにおける酷刑については、資料がなかったため、記述できなかったことをお詫びしておく。

刑罰と拷問のいろいろ

場 夫
計 多 番



カット写真はギロチン

飢えたシシに食わせる

どこの国でも、刑罰のはじまりは簡単で、種類も少なかったが、だんだん苛酷な刑罰が発明され、種類も多くなった。これは、刑罰の起こる一般的な原則であるが、その間に戦争が始まったり、暴君が立ったりすると、にわかには刑罰の比重も重くなり、種類も増大し

てくるのである。

それは、どんな理由であるかというところ、戦争で敵をとりこにしたり、スパイを捕えたりすると、ただちにこれを殺してしま

う。しかも、その場合、なるべく残酷なやり方を選ぶのである。

また、暴君や悪王が私利私欲を満足させるために、その手段として、税をさかんにさせ、それに応じない者には、極刑に処するというように、暴虐をふるまい、おそろしいことには、それが何年もつづくと、習慣になって、あたりまえに処刑することが続けられていってしまうのである。

もとより、このように、臨時に刑罰していくことは、正刑ではないのだが、長い間には、いつとなく正刑となって、新しい惨刑が多くなっていくのである。

これを歴史の上から見てみると、刑罰の起源と発達とは、まったく、いま述べたような経路をへてきていることが、よくわかる。い

いかえれば、残酷な処刑は、多くの場合、戦争と暴君との産物ともいえよう。

戦争の場合は、古くは、古代紀元前480

年、ペルシャ王クセルクセスが、ギリシャの

スパルタ軍を破ったときに、アテネ市を占領し、火を放って略奪をほしきままにし、大ぜいの捕虜を残酷な刑に処したことは、そのよい例ともいえよう。

そして、このような例は、ほかの国にも多くあったことである。

日本においても、織田信長が敵を戮することとを好み、反将に対しては、復讐的にそれらの人質を火あぶりにしたり、焼き殺したりして、おおいに惨刑を發揮したことは、よく知られている。

暴君の例には、ローマのネロがある。

ネロは生来、残虐性に富んでいて、人を殺すことを好んだ。

しかも刑のやり方も重くし、いろいろな惨刑を設けた。

その中には、人間をシシに食わせる刑があった。

犠牲の男女をいく人も、広場の刑場に取りこめておいて、そこへ数頭の飢えたシシを放すのである。

飢えたシシは、雷光のごとく目をひらめかし、ものすごいなり声をあげて、疾風のようにならぬ人々の中へ飛んで行き、相手選ば

ず食い殺すのである。

人々は全身をわなわなふるわせ、その場にすくんだまま、にげることもできず、ただ悲鳴をあげて泣きさけび、やがて声の静まった

ころには、死骸と、ちぎれた衣服とが点々と散らばり、刑場は血の池となり、そのみじめなさまは、目も当てられぬほどであった。

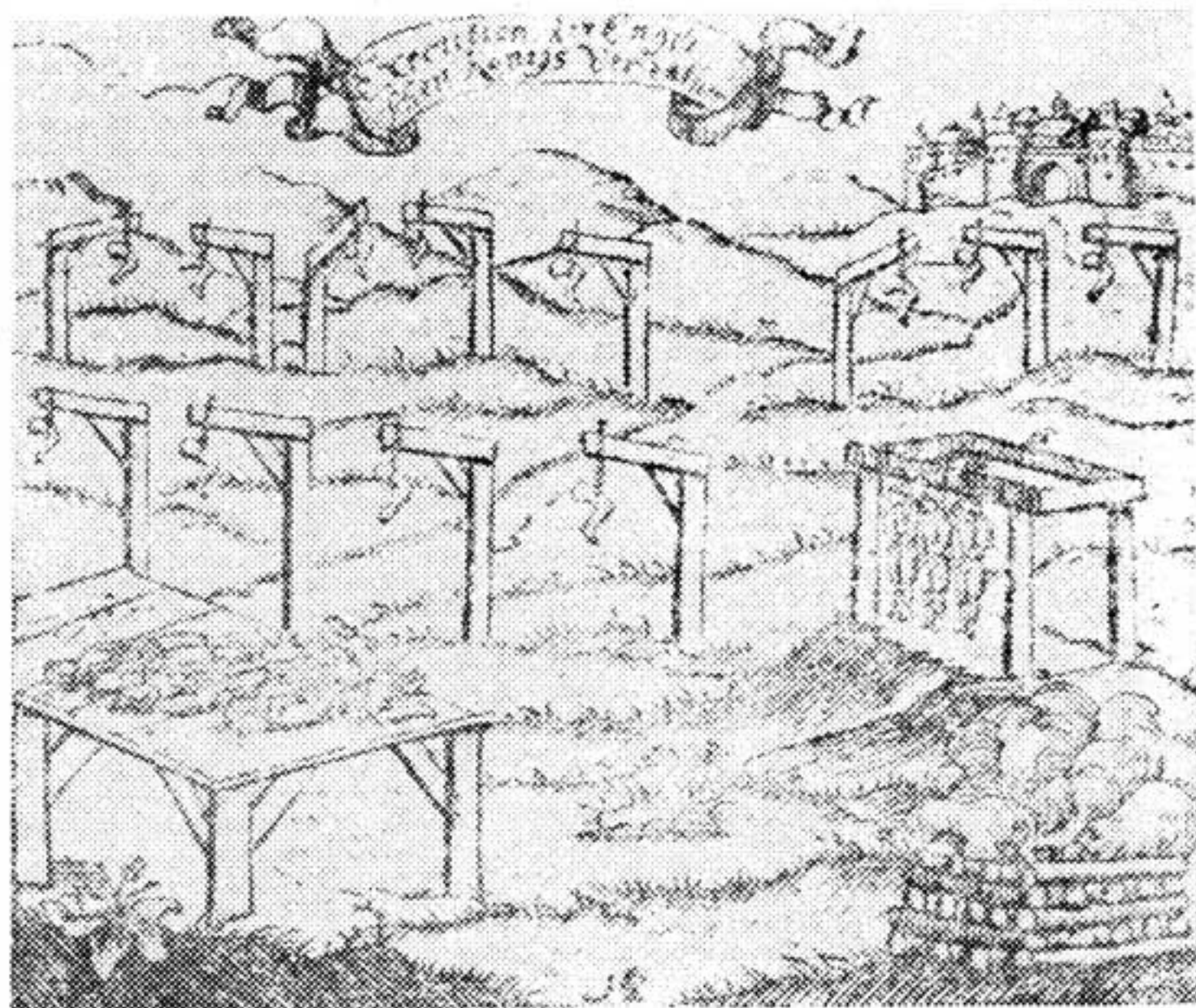
また、老若男女を問わず、かたはしから柱にしばりつけ、これをシシに食わせた。

恐怖におののき身をすくませたまま、シシの生き餌となっていていくさまは、考えただけでもこの世の生き地獄といえる。

それから、ネロの常に行なった惨刑は、ハリツケと火あぶりなど、残酷きわまりない酷

刑を用いた。

両方とも、ネロのはじめたものではないが、彼は好んでこれを行ない、幾多の犠牲者を出した。



英国王室に叛逆した者は内臓をえぐられたり、銃殺された(1660年)

その方法は昔からの習慣どおり、裸体を十字架に張りつけ、火あぶりも裸体であるが、ネロは、そのうえに、油をしめした着物をつけさせて、火をつけたということである。

そのうえ、おどろくべきことは、その刑場を公開場

とし、観覧料をとって、市民に見物させたのである。これは、史家の記述や、それを描い

た当時の絵画によって見ると、この死刑観覧場は、円天井の広大な建物で、観覧席は、三層、四層の階段にわかれており、そこには見物人が詰め込んで、酒を飲みながら見物するのである。

ネロの残虐性もさりながら、この多くの見物人には、まったくおどろくばかりである。人の苦痛苦悩を楽しげに見物するということは、サディストでなければ、できないことであらう。

ネロのサド性をはじめ、いかに多くの人々の体内には、サド性がかくれているかがよくわかる。

東洋のネロ“紂王”

支那でも、上代に、暴虐の主君によって、刑罰の新しくはじめられた例がある。

紂王がそれである。彼の性癖はネロに似ている。

紂王のはじめたといわれる刑罰に、炮烙ほうらくの刑と台盆たいぼんの刑とがある。

炮烙の刑とは、鋼柱にあぶらを塗り、火をさかんにして、裸のままこの柱を抱かせたのである。

台盆の刑とは、数丈の穴を掘り、その中に

ヘビやマムシを入れて、人をその中に投げ入れるのである。

妊婦の腹を裂いたのも、紂王がはじめであるといわれている。

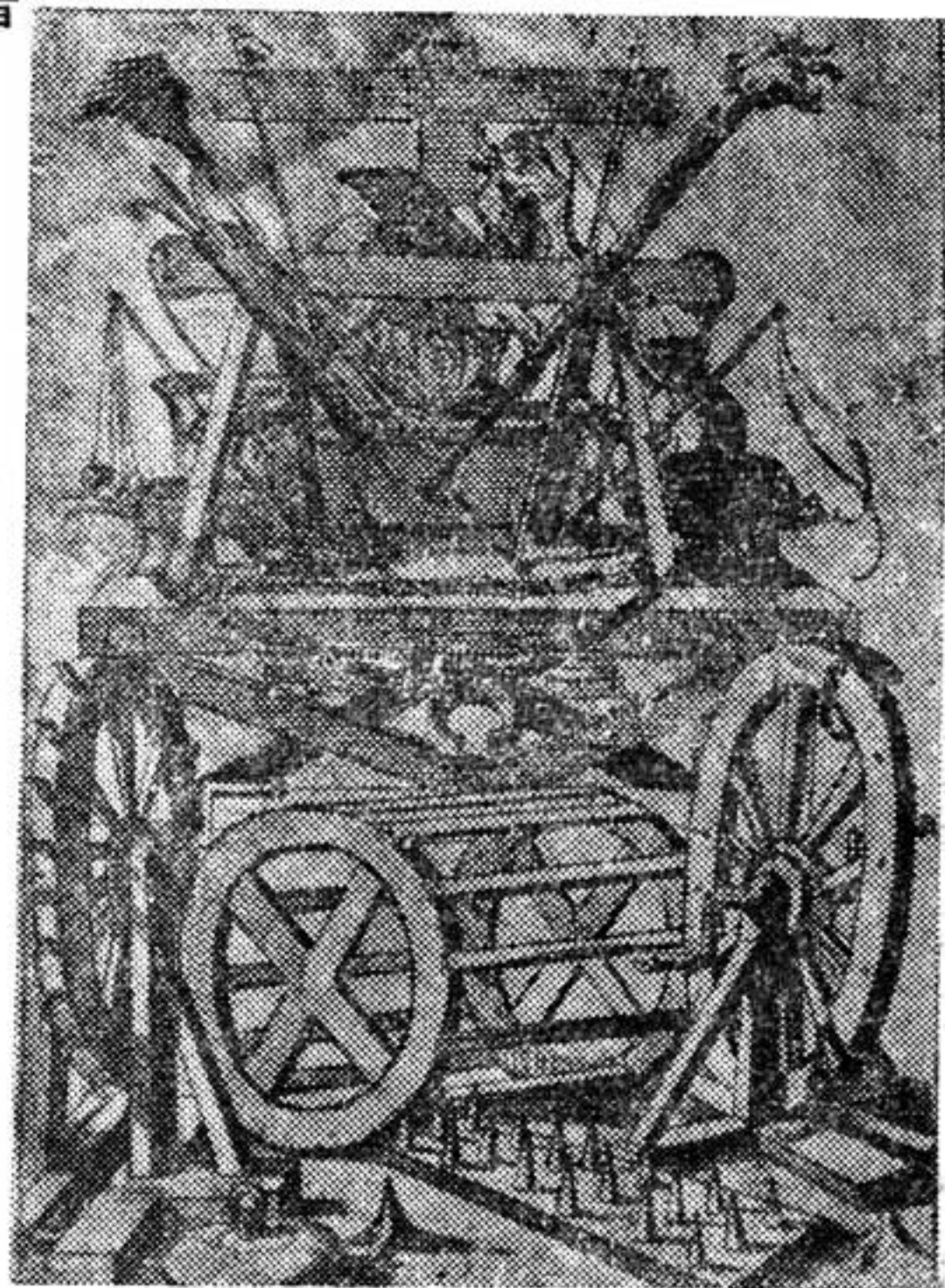
事実はどこまで本当であるか正確にはわからないが支那の古代には、これらの惨刑があったことは、いろいろの記述によってもたしかなことである。

宗教裁判の犠牲者

ローマ滅亡ののち、ネロの残した刑罰が模範となって、ヨーロッパ各国では、これをまねし、あるいはそれにしたがって、もっともっと残酷な刑罰を考え出した。

それは、イギリスにしろ、フランスにしろ、ドイツにしろ、またスペインにしろ、みな同じで、この時代の刑罰が類系していることからも、はっきりわかるのである。

ところが、このような惨刑の行なわれるようになった原因については、もう一つ大きな社会問題があった。



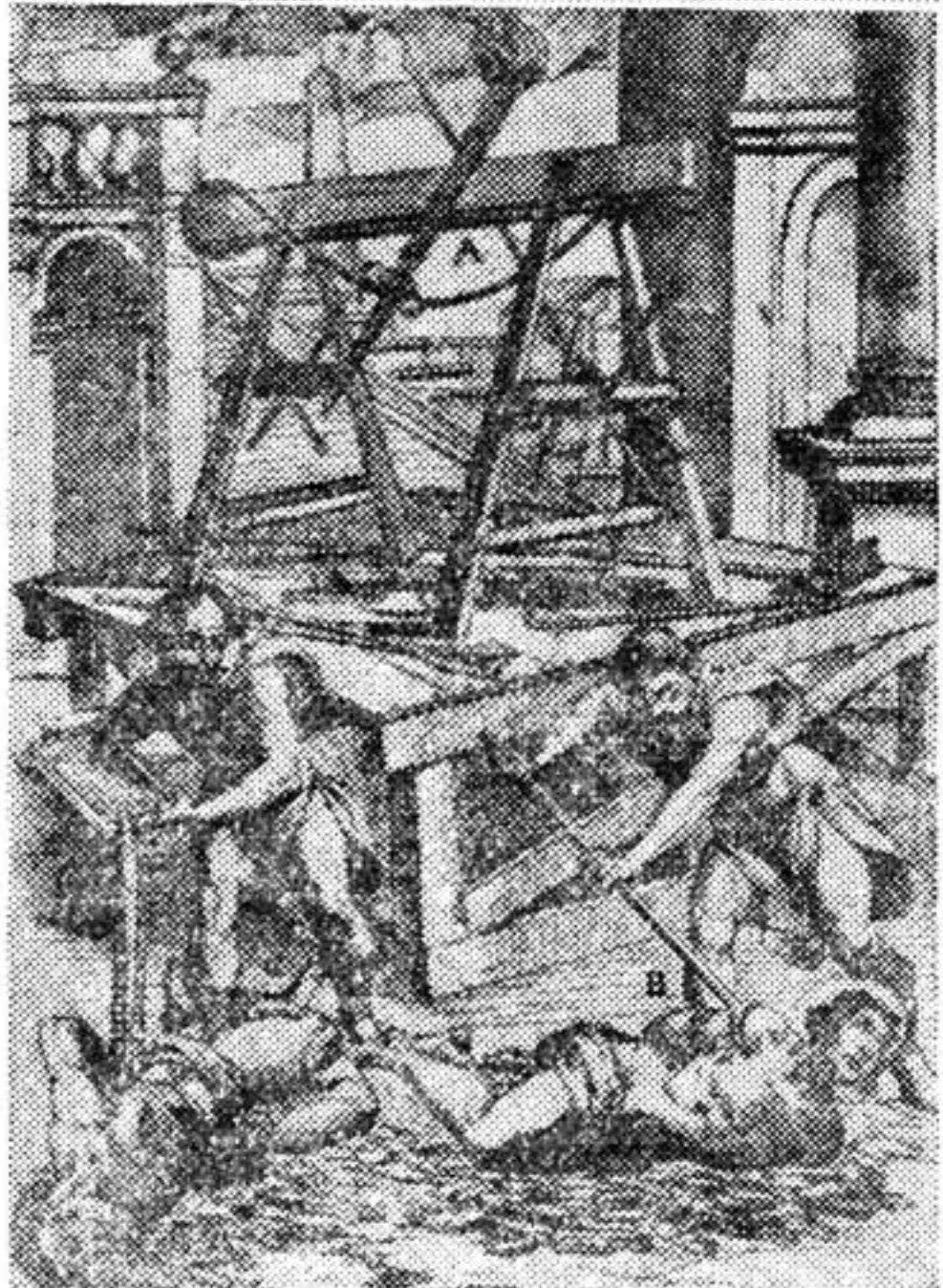
宗教刑罰用の諸道具

それは、宗教の改革とともに出現した宗教刑罰で、新教徒に対する旧教徒の圧迫から起こったものであった。歴史上、欠くべからざる問題「宗教裁判」がそれであった。

それは、新教徒を圧迫するために、ローマ法王の隆盛時代に行なわれたもので、グレゴール第九世の1232年に発布した教書がはじまりである。

教書というよりもむしろ、拷問および刑罰に関する純然たる法令であった。

その宗教裁判所として、いかめしい政庁兼監獄の設けられたのは1542年で、ローマ



上・下 熱湯のごとくに溶かされた鉛を
そそがれて虐殺される四人たち

このほか、貝がらで肉を削り取るのや、四肢および胴をだんだん切りけずっていったものや、両足をウシに引き裂かせたものなど、ありとあらゆる酷烈をきわめたのであった。

に本庁（高等宗教裁判所）を置き、各地に支部を設けて、異教徒といえ、うむを言わず処刑したのであった。

異教徒といっても、新教徒ばかりでなく、ユダヤ教をはじめ、種々さまざまな教徒がいたので、この裁判にかけられたものの数は、膨大な数にのぼっている。

なかでも、ユダヤ人に対しては、とくにひどい刑を与えた。

それは、その昔、教主キリストを迫害してついにこれを十字架に磔殺した人種であるというために、その復讐を、ユダヤの子孫に

までしたのであった。

また、異教徒を絶滅するために、苛酷な刑を行なった。

そのころ、スペインの宗教裁判は、全ヨーロッパで、もっとも勢力のあるものとなり、したがって、スペインの刑は、もっとも残忍性に富んだものであった。これも、ユダヤ人の多くがスペインに住んでいたからである。

この時代における殉教者は、ドイツだけでも数知れず、いずれもみな残忍な方法で殺されている。

そのなかの有名なものをいくつかあげてみ

よう。

まず、セント・エラスムスは、ロクロで腹を引き裂かれた。セント・ヴィッスは、にえたつ油おけの中へひたされた。セント・アラフは火あぶりで焼かれ、セント・ローレンチウスは、鉄条で殺された。

セント・カタリナは女で、車裂きの刑に処せられることになったのだが、執行のとき車輪がこわれたので、首を切られた。

セント・アンドムスはハリツケに処せられ、セント・セドスチアンは矢で射られ、セント・ウインセンチウスは灼熱した鉄床の上で焼

き殺され、セント・マチアスはオノで切り殺された。

このほか、貝がらで肉を削り取るのや、四肢および胴をだんだん切りけずっていったものや、両足をウシに引き裂かせたものなど、ありとあらゆる酷烈をきわめたのであった。

そのように、大陸において、宗教裁判がさかに行なわれていたころ、すなわち1600年代には、イギリスでは、巫女に対する刑罰が科せられていたのであった。

なぜ、こんなことをしたかというと、巫女は魔神と通じて悪いことをする、という恐れからこれを絶滅しようとしたのである。

なんというはつきりした根拠もなく、その嫌疑で殺されたものは二万以上にのぼっていると伝えられている。

現代では考えられもしないことであるが、しかもその死刑は、斬、磔、火など種々であったが、罪のない人をとらえて、白状させるために行なった拷問のほうか、はるかにはげしいものであったようだ。



Haoingen において38人の農民を殺す (1633年)

大量斬首のギロチン

また、フランス革命時代に行なわれた死刑は、主として斬首でひと思いに殺すのであるが、この刑に処する者は、毎日、なん十人、なん百人という多数であったから、ひとりひとりで、首を斬ってはられないというので、そのころギロチンという匠者が、外科用に発明した器械を拡大して、これを切頭機として採用したのであった。

この機械を使えば一時に数人や数十人の首を切断することができるので、この断頭機は、フランス一般に使用することになってしまったのである。これが有名なギロチンであった。

当時フランスでは、貴族、政治家、高僧、

門閥家、名望家など、名のある人々は、大部分このギロチンにかけられて死んでいった。

ルイ十六世をはじめとして、その王后、志士として有名なローラン夫人、マラーを暗殺したコルデーなども、みなギロチンで切られている。

このギロチン死刑には方法があつて、被刑者をうしろ手に縛り、おおむかせておいて、台の上に首を乗せると、執行者が号令をかける。すると、大刀が上から降下する。首がころりと落ちる。

その首を拾い上げて、刑吏が高くかかげ、検視に見せるのである。

首は捨ててしまうのだが、刑吏はこれを足でけったり、打ったりするのである。また、ときには、胴といっしょにさらしものにするのであった。

フランスの王朝時代に有名なバスチールの監獄で執行した死刑は、おもに刀剣であつて、ひとりひとり斬首したのであるが、ある文献によると、それは残虐をきわめたもので、囚人の舌をぬき、手足を先のほうからだんだんに切り落とし、背を割り、腹を袋き、首を切り、面皮をはぎとるなど、ことばにいいあらわせないほどの方法で、なぶり殺しにしたの

であった。

また、そればかりでなく、女も男と同様に刑せられたのであった。

王朝時代におけるこのような苛虐が、革命時代におよんで、むくいられたのは当然のことであつたろう。

日本の惨刑

日本においても、刑罰のはじまりは、斬と絞との二つであつたが、凶悪な反逆者が出るたびに、臨時に苛酷な刑罰が行なわれた。正刑以外の焚刑や、首ひき、またはハリツケの類が加わった。

焚刑は、雄略天皇が百麗の池津媛と、石河楯とのふたりを焚殺されたことから初められたものである。

首ひきは後三年の役に、義家が敵の降將の舌をぬき、最後にその首をひき切ったとの伝説があり、ハリツケは頼朝が、父のかたきとして、長田忠宗父子をハリツケにしたことがそれぞれの酷刑のはじまりであつた。

しかし、正刑は斬絞だけで、鎌倉時代には斬のみ行なわれ、絞はなかった。したがって火刑やハリツケもほとんどなかったが、戦国

時代にはいって、急にそれらの刑罰が加わりさらに吊り斬り、さかさはりつけ、牛裂き、鉄串、ノコギリびき、釜煮などのような酷刑がつぎつぎに加えられていったのである。

釜煮は、石川五右衛門が、日本ではじめてのように伝えられているが、実際は、その前に、会津の蒲生家で行ない、五右衛門のあとにも、秀吉の侍女の子とその乳母とが、釜で煮殺されており、徳川幕府になってからも釜煮にされた女がある。

また、ノコギリびきは、家康の三河時代に敵に内通した部將をノコギリびきの刑に処した例があるし、なお、秀吉時代から徳川時代にかけては、いろいろな苛酷な刑が行なわれていることは、さまざまに本によっても、うかがわれる。

徳川時代に行なわれた死刑の正刑は、



め 責 ち ん

死罪、斬罪、獄門、ハリツケ、ノコギリびき、火罪などがふつうに行なわれていて、そのほか、釜煮もまれにあったことは、前述したとおりである。

死罪も、斬罪も、首を斬るのであるが、區別は、死罪は庶民に与えられ、斬罪は士分以上であることと、死罪の死骸は、ためし斬りにつかわれるが、斬罪の死骸は、ためし斬りにはつかわれないという差があつた。これが一番多く行なわれ、次いでノコギリびき、お

よび火罪で、藩によっては、吊るし斬りなども行なわれていたようである。

キリシタン惨刑

日本の刑罰史上欠くことのできないのが、キリシタン宗教に対して行なわれた残酷な刑罰であった。

キリシタンを禁じはじめたのが秀吉で、徳川三代にわたって、これはつづけられていったのであった。

とくに三代目家光は、天草一揆ののち、絶対的な禁止の政策をとった。この間、わずか六、七〇年であったが、虐殺された信徒の数は、非常な数にのぼったといわれている。

それは当時、信徒の数が、六、七〇万人にもほり、そのほか洗礼を受けていない信者を合わせると、二〇〇万人はあったといわれており、それが最後には、ひとりの信者も残らなかったということからも、いかに多くの人たちが殺されていたかわかるであろう。

キリシタンの迫害について書かれた「切支丹宗門来朝実記」には、

「関東より大久保相模守切支丹吟味役と

して上洛あり。彼の宗門の者どもをことごとく捕え、俵に入れ、縄にて結び、首ばかり出し、

一人は碎、二人は牛さき」

このほか、寛永年間中に、キリシタンの宗



鉄グシ、肉刺し棒による拷問

門男女を、国々からからめとって、江戸へ連れてきては、これらの人々を品川の波打ちぎわにつれていって、さかさまに吊るしておいた（水ハリツケ）こともあれば、ノコギリびきにするなど酷刑を科したこともあった。

また、肥前では、改宗しなかった宗徒を、温泉獄の熱湯に沈めて煮殺しにしたなど、まさに地獄の刑といわれるべき刑に処せられたのであった。

姦婦に対する刑罰

それから、特色のあったのが、姦罪に対する刑であった。

古代にあっては、モーゼの法律に、姦婦は石で撲殺されることに規定されている。

これは、姦婦を、群衆が、めいめい石をもって、なげつけて打ち殺す刑である。自分に

四条、五条の河原に引き出し、改宗するものは助くるなりと、役人ども申し聞かせよと申し付けらる。その後、改宗のものはお助けなられ、かようにしても転ばぬ（改宗せぬ）もの三人あり。うち一人は富田とて、飾屋七兵衛さかさハリツケ、八右衛門同罰、京都には転ばぬもの四人、うち二人ハリツケ、二人は火あぶり、泉州堺にて転ばぬもの三人、うち



拷問の仕度、ハンブ、ハルスグ(1508年)

は、なんのねたみもうらみもない女であるが、同じ村に住んでいる関係で、他人の姦婦を成敗させなければならぬ規定であった。

ローマでは、レックス・ユリアという法律から、姦罪がはじまり、ドイツでは、中世紀の前年ころから姦罪の範囲が拡張され、その刑罰も残忍を極めたもので、火刑、または、ハリツケ刑が、普通であった。

古代のエヴェートでは、とくに姦罪を重くして、酷烈を極め、火刑、磔殺はもとより、

腹を袋き、手肢をたち、牛で裂き、車輪の下じきにするなど、残忍に残忍を加えたものようであった。

回教国では、姦婦を柱に縛って、左右の乳房を切りとり、あるいは、裸体のまま、さらし台につるして、さらすこともあった。プロッスのダス・ワイブルが、これを絵に描いたものもあるが、非常に残酷なものであった。

支那では、姦夫姦婦を柱に縛って、七カ所の肉を切りとって殺すことが、清朝時代の末ごろまで行なわれていた。『支那の七カ所斬り』というのがこれでもちろん公開の場で行なわれたのである。

日本でも姦罪は重く、徳川時代には死刑、獄門、ハリツケなどで腹を裂いたり手足を裁ったりした。アイヌでは、姦夫姦婦の頭髪をそって、丸坊主にするか、あるいは、鼻をそぐかされていた。

拷問のきびしさ

以上の刑罰に付随してきりはなすことができないのが拷問である

拷問の中には、刑罰と区別のできないようなものもある。それは、拷問そのものを刑罰として、殺すのである。

しかし、拷問というのは、あくまで責め道具である。だが、その多くは必ず死ぬにきまっていた。そして罪科によっては、拷問的刑罰を行なうこともあった。拷問は、刑罰よりもいっそう残忍性を極めていた。

このおそろしい拷問は、いつから起こったかといえば、やはり、刑罰といっしょに起こっており、その方法と刑罰といっしょに残忍性を増している。太古においてフェジニアやアッシリアでは、すでに拷問を行なっていたし、ギリシャに至っては、組織的に拡張されてきていた。当時のギリシャ人は、女までも拷問にかけ肉をけずったり、車輪にかけたりして虐殺することもあった。

ローマに至っては、拷問が、いっそうさかに行なわれ、種類も多くなってきた。

中世時代に行なわれた拷問の道具には、鉄グシ、肉刺し棒、火あぶりおけ、ウマ、その他種類のものがあつた。日本でも、水責め、そろばん責め、ハシゴ責め、簀巻き責め、木馬責め、へび責めなど数かきりがないほどであった。

花井お梅の獄中日記

雨妙院 一太



病囚を吊るしあげる

箱丁の峰吉を殺した罪で、お梅が東京市ガ
谷監獄に投監されたのは、明治二十一年四月
十八日だった。

お梅は、いままでの鬘をこわされ、兵庫と
いう、こよりで前をしぼっておく、島の女の
ような髪に結び、筒袖の囚衣をきせられて、
二番監とよばれる雑居監房に入れられた。

そこには、五十人余りの女囚がはいって
いた。牢名主は、女警部とアダ名の、強盗の支
倉カツという女で、新入りのお梅にジロリと
目をすえると、

「おい、おまえさん、ここへきてなとか挨拶
したらどうだい。そうして、あいさつがす
ンだら、なんか歌をうたうンだよ」

と、どなった。

が、お梅は歌わなかった。と、カツがいき
なりとびかかってきて、お梅ののをしめあ
げた。お梅が苦しさに抵抗すると、女囚たち
がよってたかって、ハンケチで包んだ石で、
お梅を撲ち、頭を作業用のハサミで突いた。

このように、お梅の獄中の獄は、支倉カツ

〈特集・東西古今刑罰残酷物語〉

らのリンチにはじまったのである。

さいしょ洗濯工を命じられ、ついで練り玉
工に転じたお梅は、このときからだを悪くし
て、病監にいられた。

はいってみて、お梅は驚いた。病人とい
うのに、ふつうの者よりもかえってとりあつか
いがひどいのだ。食事は、きたない竹筒の中
に、飯が少量と、二切れ三切れの香の物、夜
具はというと、看護婦の手かげんで、気にい
らない者には一枚しかあてがわれない。

「おまえたちは、どうせ獄中で死ぬんだから、
これでたくさんだ」

というわけなのだ。

「あんまりじゃありませんか」

とお梅は、看護婦につっかかった。

看護婦がこのことを看守に告げた。「なま
いきナ！」と看守は、お梅をうしろでッこに
縛りあげた。縛ったお梅のからだを鴨居に吊
るし、その足先が爪だててようやく板の間に
つくつかぬくらいにした。

その苦しさに身をもがくと、縄がメリメリ
と柔肌にくいこむ。目がくらむ。からだじゅ
うがしびれる。いつかお梅は氣を失っていた。

お梅が病監にいるころ、窃盗罪の荒川きみ

江という十八歳の女がはいってきた。病氣と
いうよりも入獄後発狂して色情狂になったも
ので、むやみと前をまくったり、へんな腰つ
きをしたりする。

それをおもしろがって、ほかの病囚たちは、
さいしょは手をたいて喜んでいたが、やが
てきみ江の病状が昂じてきて、暴れたすよう
になると、皆できみ江を縛りあげて、庭の松
の木へつるし、棒きれでうちたたいた。

きみ江は、ヒイヒイと泣き声をあげる。が、
だれも叩く手をゆるめない。かえって、いっ
そう強く打擲する。女囚たちはそれぞれの
欲求不満をこんなところで晴らす——そんな
表情だった。

お梅は、たまりかねてとびだすと、きみ江
を松の木からおろした。

彼女は、看守に願いでて、きみ江の介抱を
ひとりてひきうけることになった。六カ月ほ
どたって、きみ江の狂気は治った。が、その
ころには、ふたりは、トイチハイチ（ひとり
がうしろ手に手のひらをあわせたトの字とな
って男の役をし、ほかのひとりがハ形となっ
て女役を演じる、女同士の性行為）の關係だ
という噂が、女囚たちの間にたてられていた。

暗黒の罰室



そのころ「本所に蚊^かがなくなれば大晦日^{おおみそか}」
 ということがいわれていたが、市ガ谷も、本
 所に負けない蚊のひどいところだった。が、
 規則で、八月まではカヤをつらせないので、

女囚たちは蚊にせめられて、夜もおちおち眠
 ることができず、だれもかれも手くび足くび
 などは、蚊のくい跡で瘡^{かさ}のようになっていた。
 その蚊のいちばんひどいさなかの八月中ご
 ろ、お梅は、看守をにらんだということとで、
 その懲罰^{ちやうばつ}に、五日間を暗室にほおりこまれた。
 暗室というのは、広さ一間四方くらい、ま

わりを板壁でかこった、明かりとり一つない
 まっくらな部屋^{へや}——というよりも、穴ぐらで
 あった。

わずかに出入り口の戸に、看守が内へ声を
 かけるための小さな穴と、食器の差し入れ口
 とがあって、そこでようやく呼吸^{いき}が通える仕
 組みである。

お梅は、鼻をつままれてもわからぬような
 暗黒の部屋の、板の間にしゃがみこんだ。は
 やくも人のおいをかぎつけた蚊が、あとか
 らあとからと扉の小穴からはいつてきて、い
 っせいにお梅のからだじゅうに襲いかかる。
 追っても追ってもきりがなかった。

長い長い時がたって、やがて屋根の上にカ
 ラスの鳴き声がきこえ、ああ夜が明けたと知
 った。

「七号、飯だ」と、看守の声が戸口の外にき
 こえた。七号とはお梅の懲役番号だ。

食事をうけるといっても、まっくらだか
 ら、さぐり手でブリキ製の食器をわしづかみ、
 飯も菜^{さい}もゴツたに手づかみにして口へいれ
 る。口へいれてはじめて、きょうの菜はヒジ
 キだ、コンニャクだとわかる。

一日目、二日目はまだよかった。三日目
 になると、お梅は気が狂いそうになった。

夜も昼もわからぬような、まっくらな密室に、ひとりきりでとじこめられていることが、どんなに重い罰かということを知った。いや、そんなことはあとでわかったことで、そのときは狂おしさに無我夢中で、「助けてエ……」とさけびつづけた。

が、いかに叫び、わめいても、答える者はなく、ただ自分の狂乱の音が、ぶきみに部屋じゅうに反響するのみだ。

お梅は、バリバリと髪の毛をかきむしり、からだを羽目板にたたきつけ、ころげまわり、おろおろと泣きわめいた。それは、人間の声というよりも、けものの咆吼であつた。もちろん、飯などは手をつけず、ほおりっぱなし、看守の呼ぶ声もきこえなかった。

懲罰期限の六日目に暗室を出されたとき、お梅は死んだようになっていた。

雪責めの罰

明治二十六年の嚴寒二月、お梅は、同房の者とケンカをしたということで、雪責めの罰を課せられることになった。

お梅とケンカ相手の女のふたりは、看守の

監視のもとに、房を出された。

大雪のあとで、監獄の庭はいちめん、ひざが埋まるくらい積雪だった。その中を、からだがり凍りつくような冷気に震えながら、看守につれてこられたのは、高いレンガ堀のきわであつた。

堀の下は溝になつていて、そのなかへ一時、雪を放りこんであるのだが、長くそうしておくと、レンガが割れるというので、お梅たちはその雪掃除を命じられた。

ふたりの女は、チリトリの柄を長くしたようなもので、溝の雪をとりはじめた。上のほ



うからそくそくととっていたが、だんだん手がとどかなくなった。と、そのとき、

「バカ！　こうしてとるんだ」

看守の一喝とともに、お梅たちは溝の中へつきとばされた。

ふたりはモロに雪の中に埋まった。ようやくお梅がたちあがってみると、溝の深さは彼女の乳首のあたりまでであった。

柔肌の中に、じかに雪がおちこんでいた。その冷たさ痛さに、お梅の皮膚は鳥肌だったが、それを取りだしてなどいるひまはなかった。看守に叱咤されながら、溝の雪をかいては、上へほうりなげる。

みるみるお梅たちのからだじゅうは、ぐしよぐしよに濡れ、腕は棒のようになった。が、すこしでも手を休めれば、看守の警棒がとんでくる。

ふたりは、へとへとになりながら、機械のようにからだを動かしつづけた。

監獄をグルリとかこんだ長い塀なので、とても一日ではおわらなかった。

あくる日も、そのあくる日も、お梅たちふたりは、早朝から日没まで、雪掃除に出され、ようやくそれがおわると、つぎは、あとのレンガ磨きだ。ぞうきんで塀のすその雪泥



をおとす作業——いや罰だった。

この懲罰がすんだあと、お梅は病気となり、相棒の女は目が半つぶれとなった。

下肥汲み三十日間

牢名主の支倉カツは、なぜか、ことごとくに

お梅を目のカタキにしていじめた。女だてらに強盗をやるだけに、そのいじめかたも荒っぽかった。が、お梅もきかぬ気だから、そうされると、三度に一度はカツにつっかかっていく。

彼女が下肥汲みの罰をくったのも、カツとの争いを看守にみつかったためであった。



それは、三十一年の、やはり真冬、五日目に一度の入浴時間のことで、――

「三番監一房!」という看守の号令一下、一房の女囚の古顔の者がまず一団となって、風呂場へかけだした。

さて裸になって、浴槽へとびこもうとした

とき、風呂場の看守が、「ひとり多い!」とどなった。十五人一組となって入浴する規則なのが、そのとき十六人いたのだ。

と、支倉カツが、そばのお梅の肩をドンとおして、

「おまえさん、戻りナ」

と、いった。お梅もだまっではいず、「あたしは三番目にかけてきたンだよ。だれが戻るもンか」

「なんだって!」

ふたりはつかみあいとなった。

牢名主ということで、看守もカツのすることとは大目にみているのだが、ケンカの現場をみては、ゆるすことはできなかった。

当事者ふたりとも、減食のうえ、肥汲み(こまぐみ)を命じられた。一日だけではなく、三十日間つづけるのである。囚人便所の掃除口から、たまった糞尿(くそ)を、肥たごにくみとっては、それをてんびんで担いで、一町ほどもへだたった畑の中の肥だめにあけてくる。

その畑は監獄の外にあるので、せめてすこしでもシャバの景色をみられるのがめっけものだとお梅は思っていたのだが、やってみると、そんな考えはふきとんでしまった。

カツのほうは、いままでなんとかやりつけているせいか、なれた調子で担いでいくが、お梅は生まれてはじめてのことなので、腰がフラフラして、思うように足がすすまない。しかも、雪のふったあとなので、足はつるつるすべる、てんびん棒は肩へめりこむ、減

食をされたあとなので、力がなく、とうていシャバの風景をたのしむどころではなかった。お梅は途中で、なんどへたばろうとしたかわからなかった。

畑への道にガラガラ上りの坂があり、ここを上るときが、いちばん難関であった。上ることが辛いだけでなく、坂のところどころに雪かきの男が二、三十人いて、肥桶を担いでいくお梅たちに、

「ヨウ！ いい腰つきだぞオ」などとかからかい、雪つぶてを浴びせたりした。

下肥汲みもようやくおわりにちかづいた日のこと、お梅は、カツと並んで、便所の掃除口から肥をくんでいた。と、カツがいっぱい汲んだビシャクの汚物を、桶へ移すふりをして、いきなりお梅の頭へぶちまけた。

かッとなったお梅は、自分もビシャクをふりあげようとした。が、ここでケンカをすれば、また罰のうえに罰をかさねることになると気がつき、ぐっとこらえて、泣く泣く同房の者によごれたからだを洗ってもらった。

重罰窄衣

お梅は、よくシャバの夢をみた。うれしい

夢もあり、苦しかったことの夢もあった。

後者の夢では、六歳で他家へやられたころ、寒稽古といって、あけっぱなしの縁側で、ひざ小僧をむきだしに、筑波おろしの寒風がピューピュー吹きつけてくるほうに向かい、鼓や太鼓や三味線のケイコをさせられたときのことを、ときどきみた。

指の先がヒビで割れ、その手を水の中へさしこんでやらされるのだが、そのうえ、ケイコの調子をまちがえてもすると、お師匠さんの三味線のパチが、容赦なく、ヒビだらけの手の先にとんでくる。

そのときはずいぶんひどいと思ったが、この監獄での懲罰とくらべれば、比較にならぬほどなまやさしく、いっそなつかしくさえ、お梅は感じる。

ことに窄衣の重罰とくらべれば、月とスッポンほどのちがいであった。さいわいに、お梅は、十五年の刑期中、いちどもこの窄衣の罰をうけなかったが、同房の山口ツネという女囚が、六、七度も窄衣をかけられたのを、まのあたりにみた。

山口ツネは、元酌婦で、前借金を踏み倒したとかの罪で刑をうけていたのだが、ひじょうに強情な女で、なにかという看守に反抗

しては、この罰をくっていた。

窄衣というのは、皮でできた、剣道の胴のようなもので、これを被罰者の胸のはだへじかにきせて、息もとまるくらいにぎゅッと締めあげる。そして、その上から囚衣をきせて、そのままで何日間も立たせておくのだ。

ツネがさいしょこれをかけられたとき、窄衣のために血のめぐりがとまるのか、みるみる顔色が紙のように蒼白となり、下肢がむくむくとむくみ腫れてきた。三日目には、その腫れのためにタビも股引も破れた。

もちろん、大小便はたれながした。

監獄医がそばについていて、五日目にツネのようすがかわったのをみて、はじめて窄衣を解いた。

この罰の六度目ごろには、ツネは窄衣になれてしまい、かけられたまま平気で歩いた。すると、その上からまた一つかけられた。それでもまだきかないと、もう一つ、もう一つと、窄衣を重ねていって、ぐいぐいと締める。こうなると、さすがに強情のツネも、からだ動かなくなった。が、ツネは、医者が解いてくれるまで、ネをあげなかった。牢名主の支倉カツが、ツネに一目おくようになったのは、そのときからだだった。

江戸封建社会の 刑罰

——公刑と私刑など——

芦 立 鋭 吉

苛烈な戦国時代を経て、ようやく国是の安定を得て樹立した江戸幕府の組織は、外に諸藩に対する抑圧と牽制、内に儒教一辺倒の政教の強化に、極端に封建化し、残酷化した。その一端が、諸大名に課した参勤交代、人質、隠密などの陰険政策であった。また、さらに、その極端なものが法制としてあらわれた。

専門家でない筆者は、江戸時代の刑罰がいっから行なわれたかつまびらかにしないが、凡例による法組織ができたのは、三代将軍家光の時代ごろからであろう。家光は、有名な島原のキリシタン迫害を行なった将軍であるから、その法制についても、苛酷であったに違いない。

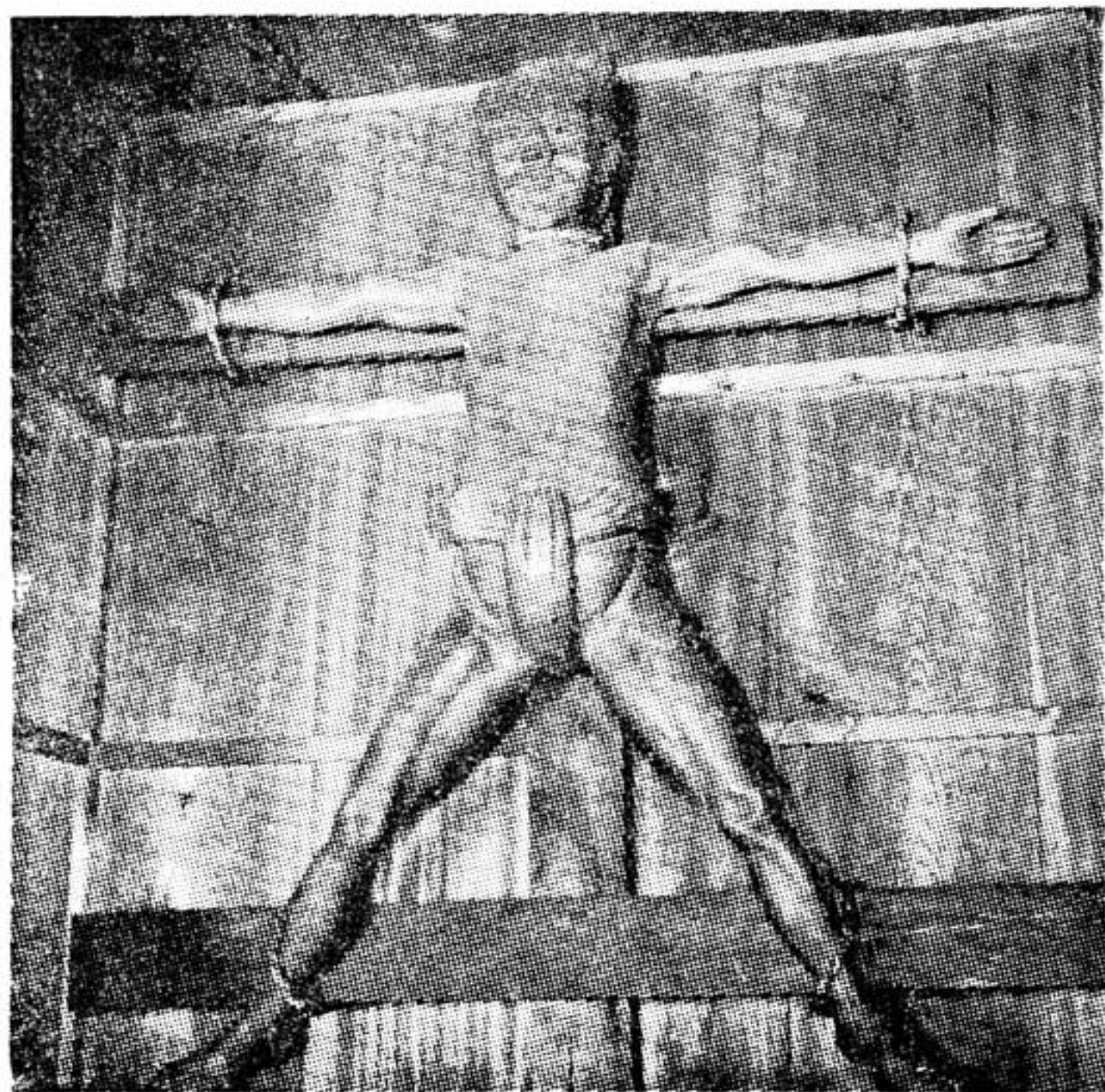
三つの死罪

このころ公刑として、死罪には、ハリツケ、火あぶり、斬首の三種があった。ハリツケは、戦国時代ですでに行なわれ、とらえられた敗軍の将などを、みせしめにするために行なった。特殊のものでは、

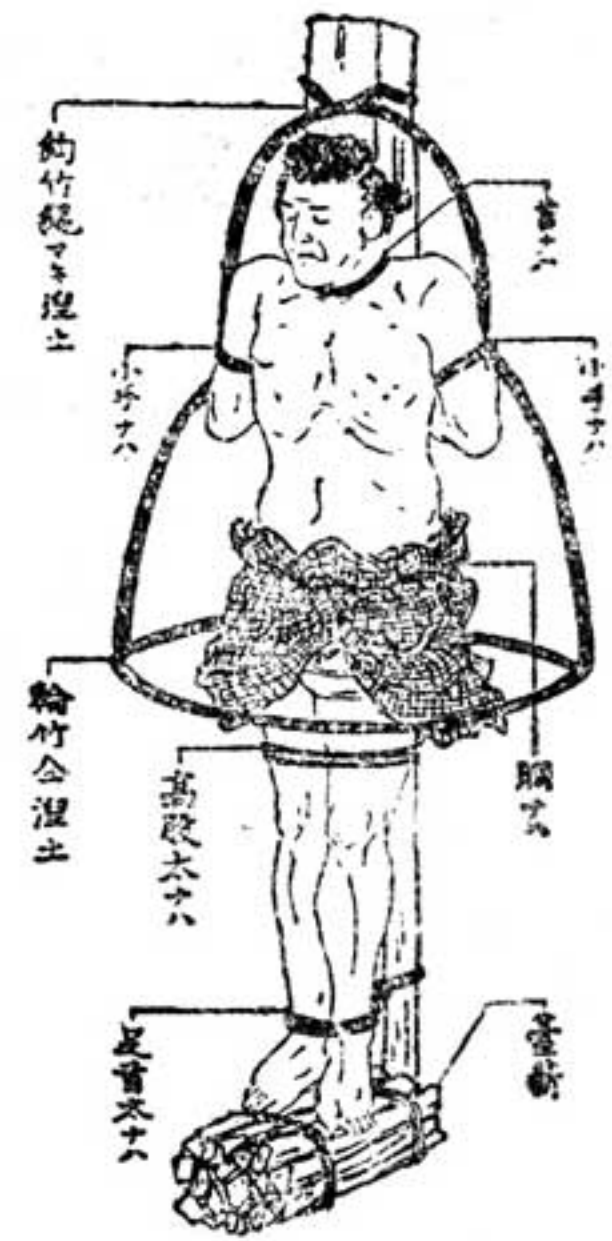
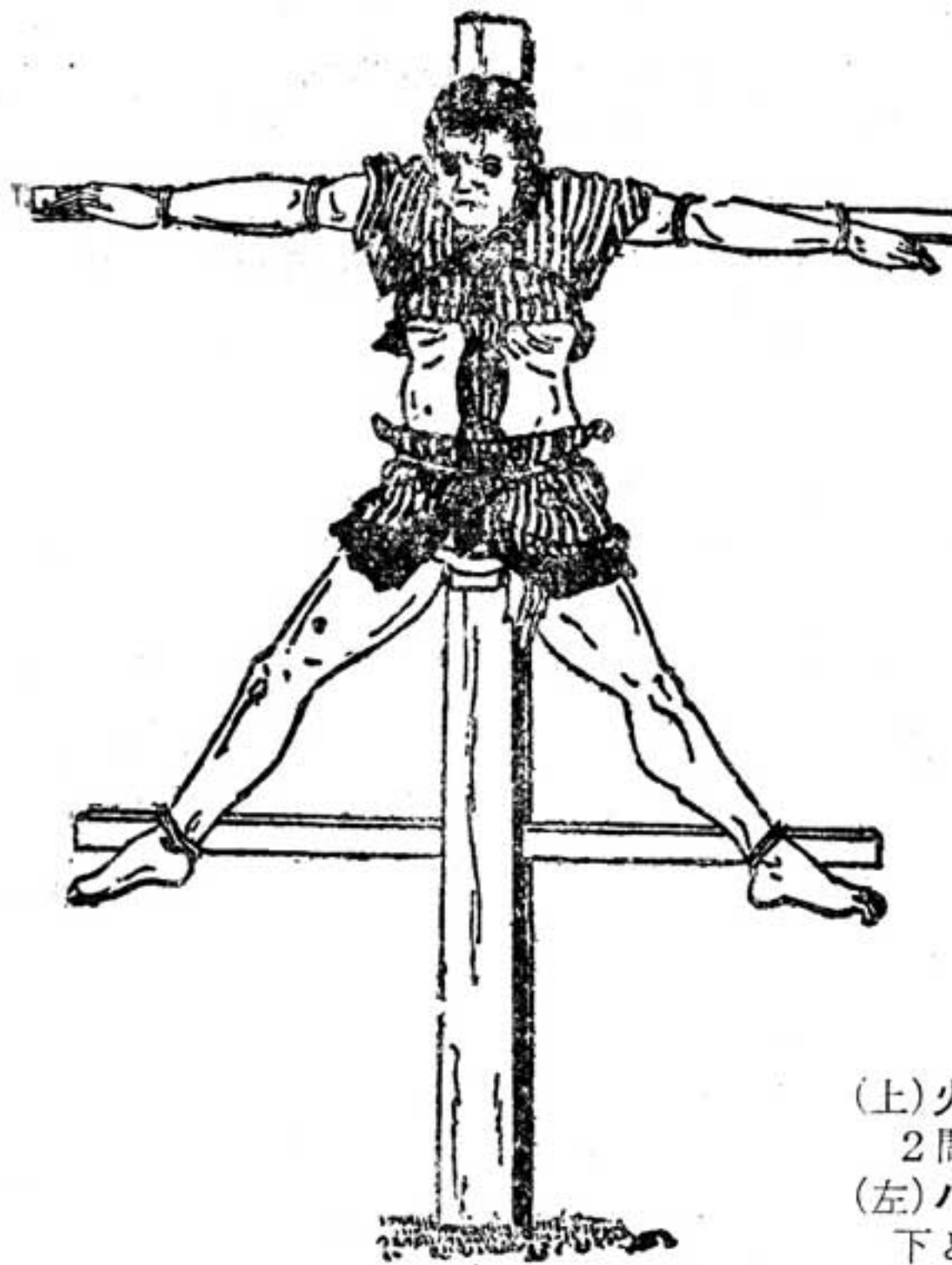
長篠の戦いで、奥平の家臣鳥居強右衛門勝商が、味方の危急を報じる密使として潜行するところを、武田勝頼の手の者に捕えられて、さかさハリツケの刑をうけた。これは、錦絵その他になり、有名なものであるが、六尺襷一本のさかさ大の字ハリツケであるから、男

性的な豪快な刑である。江戸時代の公刑としてのハリツケには、男女の別があり、女子は十字ハリツケで、両脚は一緒にくくられたが、男子は、股を左右に開いた大の字形のもので、きびしい法の中にも、女には手加減があったらしい。

この大の字ハリツケであるが、外国の例で



豊川市松永寺にある鳥居強右衛門の像



(上)火あぶり——柱はツガの5寸角、長さ2間、土中3尺で縄の部分粘土で塗る。
(左)ハリツケ——柱の長さ2間、横貫は上下とも4寸角、土中3尺でケヤキを使う。

は、キリストのハリツケをはじめとして、ローマのキリスト教徒迫害などにも、すべて十字磔で、銅版画でみる聖パウロのさかさ大の字ハリツケ以外は、ほとんど十字ハリツケである。それに対して、日本のものは、公刑として大の字型を用いたのは、男子に苛酷である一例であった。

罪人は、ハリツケ柱にのせられる前に、囚衣の裾を大腿部までめくり上げ、両脇を切って、竹槍

で突く部分を露出させ、胸の中央で、切った布をよじり合わせるので、受刑者の肉体は露出的になる。女性の場合は、乳房が露出するの言うまでもない。

男子用のハリツケ柱の中央には、囚徒の股間の

あたりに小さな台がつくられている。これは、囚徒の尻をのせる台とも言い、中心部をきめる目標だともいうが、女性用の十字ハリツケにはないから、俗称「ふぐり台」とよばれている。囚徒の睨丸をのせる形になるからである。

「ありやありやありや」というかけ声とともに、非人は見せ槍ということをする。「おまえを突くのはこの槍先だぞ」という残酷なものである。

西洋のハリツケ刑は、キリストの刑のように、手足を釘づけにしたが、日本のものは「はりつける」という呼称のように、囚徒の手足をじゅうぶんに開いて張り付け、衆人の見物としたから、若干さらし刑をかねたものだといえることができる。

火あぶりは、放火者に主として行なった刑であるが、そのほかでは、重罪のものにも課した。

まず、受刑者を裸体にして柱に縛し、その周囲に鉄製の枠をはめ、さらにそのまわりに乾燥したカヤの束を立てかけるから、受刑者の姿は見えなくなる。カヤをつみ終わったら点火する。

数時間後、カヤが完全に焼け落ち、黒ん坊

のようになった受刑者の姿があらわれると、非人は最後のとどめ火を、男には罌丸、女には乳房と、急所を焼く。じゅうぶんに焼けない受刑者は、ここで最後のとどめのくるしみを味わわれるのである。

斬首は、最も簡単な死刑で、穴を掘った前に受刑者をすわらせ、一刀で首を落とすと、足で受刑者の腰を蹴上げて穴の中に落とす。

無残なる拷問

次は、奉行所に定められた牢問（拷問）

であるが、公式に定められたものに「海老責め」「吊り責め」「石抱き」「たたき」の四種がある。しかし、そのほかに、「木馬責め」も準公刑として使用されたいらしい。

「たたき」は一番軽い刑で、「十叩き」「二十叩き」から「百叩き」まである。罪人を裸にして、四人がかりで手足を押え、主として臀部、背部を鞭うった。鞭は麻縄でつくった鞭で、こまかくからけてあるから、弓より柔軟で、苦痛ははげしい。

叩きで白状しない罪人は「石抱き」にかかる。これも、日本特有の責めで、罪人をソロバン板という、板面が三角錐（かくすい）になっている板

の上に正座させて、その膝の上に厚い伊豆石をのせる。白状しなければ、枚数は幾枚もふえる。向こうずねがソロバン板に食い込んで行く苦痛は、相当なものであろう。

それでも白状しないものには、刑吏が左右から石をゆすって「どうだ、どうだ」と責めつける。罪人は汗を流して苦悶することは言うまでもない。

次は「吊り責め」であるが、これは、白洲（しらす）に吊り鉤（かぎ）がないので、拷問蔵で行なう。うしろ手に縛ってつるし上げる。長時間になると脱臼する危険がある。

「さかさ吊り」は、これを応用したもので、正式の刑ではない。

「駿河責め」というのは、この吊り責めの一種で、手足を背の上でいっしょにくくり、縛った縄をくるくるとよじり、手を放すと人体がくるくると回る。その背の上に石をのせたものがあるが、これは「石抱き」の応用である。駿河国の奉行所で行なわれたので、「駿河問い」という特殊なものとされている。

また、この吊り責めの足に分銅をつるしたものもある。

最後の責めは「海老責め」である。これ

は、享保のころ、盗賊火付改め役中山勘解由（かかげゆ）が創案したものだと言われている。罪人にあぐらをかかせ、足と首とが密接するまで締め上げるもので、罪人は、ひたいにあぶら汗を流して苦しむ。その姿は見苦しいぶざまのもので、股は開き切り、背は海老のように曲がる。海老の呼称は、からだのまがることから、からだがかエビのように赤くなるから起こったものか、よく判明しない。

とにかく、拷問の中でも屈辱的なもので、



海老責め——青細引きで図のように縛っておく

女子にはめったにかけなかったそうである。

志賀直哉の『暗夜行路』の後編に、伯耆大山の峠で、野盗が村人からこの責めにあう話が出てくるが、明治のころでも、地方ではこうした責めが行なわれていたらしい。

そのほか、公刑でないが、「水責め」と「木馬責め」がある。ともに、地方の代官所で、年貢のとどこおった百姓などに課したものらしい。

『南総里見八犬伝』に、八犬士のひとり、犬川壮助が代官所に捕えられて水責めにあう話が出てくる。青竹の九つ梯子に罪人の四肢をくくりつけて、手桶の水を何杯となく口の中にそそぎ入れ、腹が満腹すると、梯子をさかさにして水を吐かせた。このさし絵はなかなか傑作である。

「木馬責め」は、木で作った木馬の上にまたがせて、左右の足におもりをくくりつける。馬の背の三角錐が股間に食い込んで、その苦痛ははなはだしい。拷問中では最もアブノーマルな責め苦である。

ドイツの宗教拷問に、鉄牛というのがあるが、これは、熱した鉄牛の形の中に罪人を入れて焼く形で、木馬とはちょっと趣がちがう。今次太平洋戦争で、南方で原地民に捕えら

れた日本兵は、山林の荒木

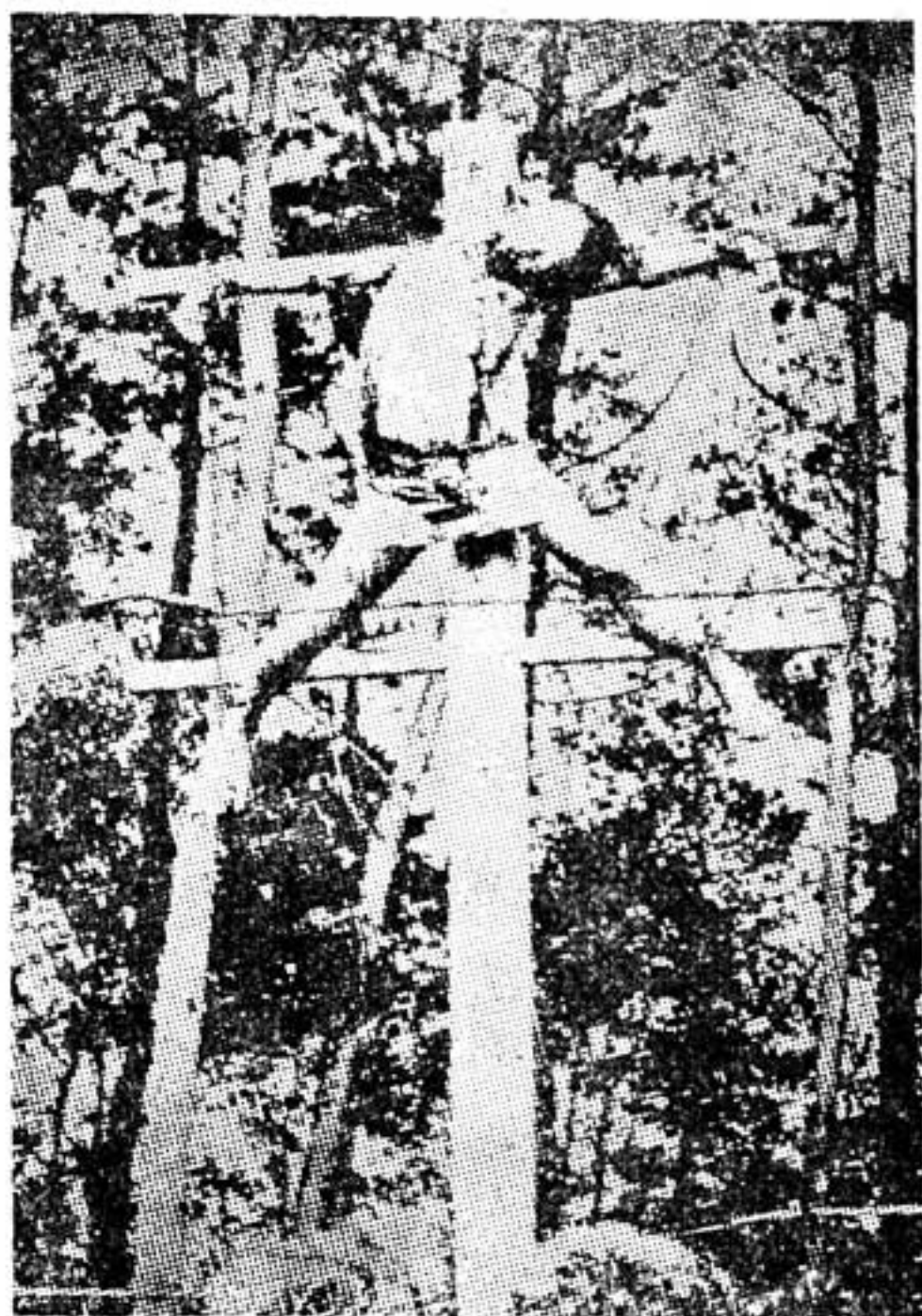
で作った木馬に、全裸のまま載せられたという話をきいたことがある。木に生えている針葉樹が罫丸を刺して、その苦痛は耐えられなかったそうである。

この木馬は、女性に適用された場合が多く、遊女屋で遊女へのしつけとして木馬にのせた話が、『読本草雙紙』に出ている。

釜うでと鉛責め

そのほかにも公刑でないものを挙げれば、きりがなが、石川五右衛門が四条碁でなつた釜煎りの刑は、あまりに有名である。これは、油を煮たものか、熱湯であったかは判明しない。いずれにしても、徐々に熱くして苦痛を長びかせたに違いない。全裸で行なわれたらしく、西鶴の『本朝二十不孝』のさし絵には、五右衛門も倅の五郎市も素ッ裸のまま刑されている。

中国では、これは「鼎鑊の刑」とよんでいるが、日本の軍事探偵鐘崎三郎が捕えられて



ハリツケの实景

油煎りの刑にされる話は、少年のころ講釈で聞いたが、勇壮であり、凄惨なものである。

大鍋（大きなフライパン状のもの）に油を引き、その上に、全裸の鐘崎三郎を鉄鎖で縛してころがし、右左から刑具で押えつけた。苦痛のため七転八倒するので、かえってからだの前後が余すところなく焼けたのだと語られている。男子の責めとして壮烈この上もない。最後に、とどめとして、灼熱した鋒で罫丸を刺されて悶絶したといわれている。

「鉛熱湯責め」は、黒田騒動の発端になる光陽上人の話に出てくる。中年の美男僧である光陽上人は、全裸で、四本の杭に四つん這い



蛇責め (小林清親画)

の型に緊縛され、背を刀で斬られ、血の噴き出るところを、鉛をとかした熱湯をそそぎ入れたと言われている。拷問というよりも凄惨な死刑である。

「加賀騒動」の浅尾局の蛇責めは、有名である。やはり女性独特で、男子を「蛇責め」にしても恐怖感がないから、効果はうすい。「蟹責め」「さそり責め」など、やはり女性のものだと思う。

その「加賀騒動」の終末として、首魁の大槻伝蔵が越中五箇山の番屋で凄惨な責めにあう場面が、泉鏡花の『由縁の女』という小説に出てくる。

伝蔵は、織田大炊守の命令によって、一糸まとわぬ赤裸に剥かれ、上下の齒を抜かれ、カシの荒木で造った、丈の低いオリの中に犬つくばいの姿で入れられる。オリには上下左右に五寸釘がすき間なくうちつけられている

ので、伝蔵は身の屈伸がきかず、もだえ苦しむのを、大炊守は笑いながら槍の石突きで、伝蔵のからだのあちらこちらを突く……という描写がある。浅尾の蛇責めと好対照の責めである。

さらしの苦痛

最後に、肉体に

は苦痛を与えないが、心理的苦痛をあたえるものに、さらし刑がある。

日本橋の橋詰めに、心中未遂の男女や、女犯の僧などがさらされていた。

道行く人はこれを見て、嘲笑し、また、恥辱を加えたりした。有名な延命院事件があり、多くの寺僧が女犯の刑をうけたのち、江戸町奉行所では寺院の肅正を期するため、それ以後の僧侶のさらし刑には着衣を剥ぎ、禪一貫にした、と当時の随筆『江戸綺言』に載っている。

「野荒し」の私刑には、全裸のさらしが多かったようである。タケノコを盗んだ僧が、越中禪一つで棒縛りになっている絵は、有名である。

そのほか、姦通成敗には、裸さらしが多いようである。

これは、心理的な苦痛をあたえるものというよりも、性的な復讐と、言ったほうがよからう。

とにかく、鎖国制をとり、内に厳であった江戸封建社会の刑法は、外国の宗教裁判にくらべても劣らない、残酷酸鼻をきわめたものである。

申

城

残

酷

記

菅

沢

朗

姿なき作戦

「ベンヤオ地区の共産軍をたたく作戦をやります。いっしょに行ってみませんか」

私は陳將軍から誘われた。漢口市街の六也邨という弄の中にある、將軍の司令部にあそ

びにいったときのこと。

司令部とはいっても、弄の中に何軒もならんでいる洋風の規格住宅の一つである。だが一歩中にはいると、軍服や、あるいは便衣の裏い面魂をしたのがウロウロしている。机のひきだしをあげると、無造作に拳銃が放りこ

んであったりした。

陳將軍は、そのころは日本側に帰順して謀略部隊を組織、漢口周辺の警備にあ

たっていた。

しかし、もとをただせば、江南地区遊撃司令といって、蔣介石直属の抗日テロ

団のリーダーで、上海をはじめ日本軍の占領地域で大いにあばれた人だ。

ところが、日本の憲兵隊につかまって洗脳されたあげく、対日協力に転向、特別釈放されたあと、昔の部下をあつめて新軍を組織したのである。

私は、そのころ、ある新聞の武漢支局詰めでゴロゴロしていた。陳將軍のドラマチックな経歴を取材したのがキッカケで親しくなり、ときたま、その司令部に顔を出していたのだった。

司令部といったところで、素姓はあらそえないもので、やはり地下組織のテロ団のアジトといった感じがつよい。陰性なテロリストたちの体臭がひんやりこもっていたし、陳將軍その人にしたところで、笑っていても、血





のにおいがプンとする
ような人だ。

私は、そんな連中
といっしょに、いわ
ば、中国人ばかりの
中にぼつんとひとり
まじって（もっとも
秋山という、参謀部
から来た若い将校が
日本側との連絡係と
して配属されていた
が）前線に出ること
にスリルを感じた。
「つれてってください
いよ」

「いいですとも」
そして、その作戦
に同行したおかげで
私は、彼らの戦闘ぶ
りや捜索方法、通敵
者のかぎだし、責め
口、その断罪の仕方
などを、目のあたり
みることができた。

池畔の惨劇

帰順部隊の効用の一つは、蛇の道はへび、
の鋭い嗅覚だった。日本軍では決して嗅ぎつ
けられないようなことを、ちゃんと嗅ぎつけ
てくる。

敵の通過したあとには、へびの通ったあと
のように、なまぐさいにおいがただよってい
る。中国人だけにしかわからない生理のよう
なものがあつた。

部隊は、漢口を出発、揚子江の支流である
漢水を船でさかのぼっていったが、ペンヤオ
地区にはいったときは、敵はすでに、どこか
へ退避したあとだった。

しかし、兵士たちは、どこからか、七、八
人の通敵容疑者をひっぱってきた。老人や若
い姑娘もまじっている。

尋問がはじまったが、なかなか口をわらな
い。

「好（よろしい）」
尋問にあたっていた士官が言った。水責め
を決意したらしい。ちょうど広い池のそばだ
った。

一人ずつ水ぎわへつれてゆく。

一般に中国人は水に弱く、水におびえる。水を見て悲鳴をあげ、本能的にあとずさりをするのを、兵士二、三人でおさえつける。その頭をザブリと水の中へおさえこむ。あばれて水をはねかえすが、三人の力にはかなわない。しまいには、観念したように、じいっとしてしまうが、それもちょっとのあいだのことだ。

苦しくなってくると、また猛然とあばれだす。それを、

「こいつ、こいつ」

さらにおさえこむ。

しかし、水を飲ませて殺してしまうのが目的ではないから、時間をはかってヒョイと手をゆるめてやる。

「あっふあっ、ふああ」

水を噴水のように吐き、天までハネ上がりそうないきおいで、あわれな男は水から頭を出す。全身で、狂ったように大きく呼吸するが、そう急には呼吸はととのわない。

そいつを、ひと息つくところまではいかない半息くらい吐いたところで、いとも無造作に水の中へ逆もどりさせるのだ。

ひきつったようなさけび声が水面にコダマする。いっぺん水を味わわされたあとだけに

恐怖と絶望感はいっそうだ。

しかし、その叫び声も途中でゴボゴボと水中に没する。無気味な気泡が、ボコボコと浮いてくる。

そしてまた、ノビかけたところで、水から頭があげられる。

そんなことを四、五回もくりかえすうちに抵抗力はすっかりぶくなってくる。むろんそのあいだには、したたかに水ものむ。視力がモーローとおとろえてくる。すると、腹の上に圧力をかけて、胃袋にはいった水を吐きださせるのだ。口からも鼻からもゲブゲブと水があふれてくる。

そんなときの、受刑者のみじめな顔といったらない。水と鼻汁と、そのほかなんだかわけのわからない粘液のようなもので、顔はクシャクシャ、目は半眼にみひらかれ、どろりと焦点をうしなっている。

「暖呀（ああ）」

という悲鳴も、

「アーイヤ——」

力なく長く尾を引く。

それにむかって、

「什麼地方去？（どこへ行った）」

「什麼時候兒？（いつだ）」

たたみかける。

「不知道（知らない）」

などとやろうものなら、

「暖！！ 吃湖水還要一抔磨！！ 吃的到底了！！」

（おい。もういっぱいご所望かね。のんで池がカラカラになるまでのむかね）」

そんなセリフとともに、またしても首を水の中へ。

責められる者が若い女だったりすると、さらにいたいたしい。髪の毛が長いので、いっぺん水につかると、たちまち変貌する。踏んばった兵士の脚絆を巻いた足のあいだからのぞく、褲子（ズボン）の娘らしい赤い色が、目にしみるようだ。

池畔の惨劇が開始されたのは、まだあけきらぬうす暗さの中だったが、その順番が姑娘にまわってきたときには、あたりはすっかり明るくなっていた。

それまではよくわからなかった姑娘の顔がハッキリ見わけられるようになっていた。

強いショックのため、その顔は、ほとんど無表情なものになっていたが、そのときの、凄艶（せいえん）というか、この世のものとも思われぬ美しさは、そのあといつまでもありありと私の眼底にやきついていていた。

はだしの大学教授

その従軍で私は、捕虜になった敵の便衣がひとり処刑されるのを見た。

その男は、教養もありそうで、四十五、六になる年輩からいっても、ただの兵士とは思われなかったが、取り調べた結果、このベンヤオのソビエト地区で行政面を担当していた政治部員であることがわかった。もと大学教授ということだった。

この男は、縛られまま、部隊といっしょに移動した。

宿営地につくと、尋問がはじまる。しかしラチがあかない。出発。また次の宿営地につく。尋問。といったぐあいである。

いつか彼は、はだしになっていった。足の皮膚がやぶれ、黒く乾いた血が、コビリついている。

しまいには、陳將軍が直接に尋問したり、洗脳をこころみるが、いっこうに、ききめがない。

あすは敵と遭遇、一戦闘するかも知れないということになったとき、男は処刑されることになった。戦闘開始の場合、足手まといに

ハ特集・東西古今刑罰残酷物語

なるおそれがある。

男は凹凸のはげしい、赤土の丘陵の上に、目隠しをして向こうむきに立たされた。すでに処刑を感じているらしい。胸が、肩が、波うっているのがわかる。

「走了!! (あるけ)」

兵士のひとりが命令する。

はだしの大学教授はあるき出す。一步、二歩、三歩。

突然背後の殺意につきとばされたように、便衣の裾をひるがえして走りだした。

「にげられる?」

哀れにも錯乱した意識で、そう思ったのかもしれない。

が、それは、銃殺者には、すでに計算ずみのことだった。走ってゆく大学教授の背中をねらって機銃が火を噴く。一連射のあと、男はつきとばされたようにころがり、そのまま丘陵のくぼみにころがりおちて、見えなくなった。

そこまで歩いていった兵士が、下をのぞきこんで表情も変えずに言った。

「死了 (死んだ)」

大学教授は、斜面の下で、エビのように背

中を曲げて動かなくなっていた。

通敵者の捜査、尋問、さらに拷問、処刑などは、兵士たちにとっては、脱糞と同じように、とぼしい生理的な慰安の一つらしかった。

おどろいたことには、作戦がおわって、二手にわかれていた部隊が集結、漢口に向かって船で下ることになったとき、池のほとりで水責めにあっていた例の姑娘が、ちゃんと先まわりしてつれて来られていることだった。ほかの男たちは見えない。

「どうして、この姑娘だけ、つれてきたのかね」

護衛の兵士のひとりにたずねると、
「あとの者はみんな老百姓 (善良な一般市民の意) であることがわかったが、この女だけはどうしても身分がわからないから」ということだ。

漢口につれて行って、より上級の検問にかけるらしい。あるいは、殺伐なガイセン道中にいろどりをそえようという司令の思いやりかもしれない。漢口につれて行って、さんざ痛めつけられたあげく、しまいには、日本憲兵隊にひき渡されることになる。

私は、漢口に帰ってから、それとなく、その姑娘の消息を調べたが、とうとうわからなかった。

偽装入監

私はその後、新聞記者をやめて、軍の特務機関の仕事をするようになった。いろいろ謀略の裏側などに首をつっこんでみると、キレイごとばかり書いていい気になっている新聞記者の仕事が、甘いものにみえてきた。

「文学青年の甘っちょろい感傷では、戦争の実態はつかめないのだ!!」

そんな気持ちだった。

その結果、ちょっとした伝手をたどって、上海の特別機関の仕事をするようになった。M機関に配属された。任務は情報、宣伝、それに謀略関係。もっとも、身分は正規なものではなかった。K少佐の個人的な機密費の中から生活費を出してもらう不安定な嘱託だった。

もっとも、いい仕事をすれば、それだけ金はひっぱり出せる。あまれば酒色にいやした。その意味では私は戦争末期のダラク混乱した上海にふさわしい、無頼な渡世人ともいえた。

そんなころ、上海総領事館警察のブタ箱に偽装入監した。すこし前からはいつているHという若い朝鮮人の、通敵容疑をさぐるためだった。口のかたい者でも、ブタ箱の仲間同士には、一種の親近感から、打ちあけた話をすることがある。それがネライだった。

しかし、私のそうした目的は、どうも達しられそうもなかった。そのHというのが、まったくの無口。

房内のいちばん前で、一日中、端座メイ目したまま、とりつく島がない。

夜は、さだめられた時間に、さっさと毛布をかぶって就寝してしまふ。その房内のいちばん前の、廊下にちかい席は、だいたい古参者がしめるならわしだった。

通気がよく、あかるい。廊下の様子が、あるていどわかる。つまり、シャバにいちばん近い場所なのだ。

しかし、Hがそこに頑張っているのは、また、ちがった意味からだった。

つまり彼は、看守の目のいちばん届きやすい場所に自分を置くことによって、みずからの房内の起居を、きびしく律するというふうだった。

私はそこに一週間ばかりいるうちに、

「こりやダメだな」

サジを投げてしまった。そのかわり、仕事とはべつに関係ないが、いろいろ珍しい見聞をすることができたのである。

上海の留置場は国際色があった。

中国人でも、日本人関係の事件のものは、ここにやってくるし、白系ロシア人や、フィリピンやポルトガルなど三国人関係も、たまには姿を見せた。朝鮮人にいたっては、リツからいうといちばん多いくらいである。

そんな連中が、夜は肩をくっつけあうようにして寝る。犯罪的な傾向をもっているだけに、官能的にも敏感だった。

夜、蘇州河をわたってくる江海関の大時計の点鐘をききながら、隅っこのほうで毛布にくるまったまま男色にふける者もある。そんな中に、ある日、大男でアル中のポルトガル人の浮浪者が、窃盗容疑でほうりこまれたのだった。

はいってきたのは深夜だが、わけのわからないダミ声をあげて、まずみんなの目をさまさせた。一晚中うめいていた。それだけでも第一印象は悪いのに、ことばのわからないせいもあるが、房内の申しおくりになっているシキタリにいつこう従おうとしなかった。お



まけに、便所の手洗い用に汲んであるバケツの水を、ウォツカで胸がやけるのか、一晩中にみんな飲みほしてしまったのである。

次の日が、またひどかった。

房の隅に、四角く腰くらいの高さの仕切り板があり、その内側が便所になっていた。ひるちかいころ、大男は、その便所にしゃがみこんだ。みんなの背中を見ながら用を足すわけである。

ところが、ウォツカで焼けただれた胃袋から出てきたハイセツ物は、モウレツな臭気^{くさけ}を発し、そのにおいは、たちまち、房内に充満した。

それからすぐ食事になったが、食事になっても、そのにおいは消えるどころか、ますます猛威をきわめた。

それが決定打だった。たちまち、この頭のすこしオカシな大男のポルトガル人は、房内の憎悪を一身にあつめた。彼に対する懲罰が決定した。まず大便禁止。

彼が、その四角い囲いの中へはいると、だれかが立ってのぞいてみる。小便ならよし、もし大便の気配があると、

「あっ、こいつ、クソしやがるぞう」

★定期ご購読についてのお願い★

最近、本社あての定期購読のお申し込みがふえてきました。たいへんありがたいことですが、郵便物の遅延の現況からして、とかく読者の皆さまにご迷惑をおかけする結果を、ままた招来してまいります。つきましては、「定期で取ってほしい」とお近くの書店へお申し込みください。その旨、発行と同時に、確実にお手もとへ届きますので、その旨、予約お申し込みしていただきます。遅配などのご迷惑をおかけせず、すむと思いますので、ぜひご協力ください。なお、書店へ予約なさる場合でも、予約金など一切必要なく、口頭だけでできますゆえ、ご便宜と存じます。

と、クソ力を出してハネのけにかかった。それにゲンコをつきつけ、「声を出すとこれだぞ」というように威嚇（いかく）しておいて、はじめて解放してやる。すると、やっと大男はしずかになって、あたりまえの寝息をたてはじめのだった。

大男いじめは、毎日の

ようにつづいた。それが、みんなのたのしみだった。クソを出せなくてヘコたれる大男を見たり、おさえつけて雑巾で呼吸をとめたりするのが、ゾクゾクするほど痛快だった。

しかし、そのうち、ちょっとした事件が起こり、大男をいじめるそのタノシミがなくなってしまった。

領事館の構内にテニス・コートが作られることになり、毎日午後になると、各房からふたりくらいずつ、使役（しやく）がつのられることになった。

作業は約一時間。大きなニギリ飯一個の特別支給がある。

それに、戸外の空気と日光。ちよっぴりシ

ヤバの日光も味わえる。その使役の何日目かに、ことはもわからないはずの大男が志願して出た。

作業中、彼はヒョコヒョコと塀（へい）のそばに歩いてゆくと、監視の警官があっけにとられているあいだに、ズボンを下り下げ、こちちを向いて大きなやつをブラ下げたまま、うんうんリキミはじめたのである。しかし、排泄の欲求（よくそう）があまり強烈だったため、実物が出ないうちに、

「ウーン」

とうなって悶絶（もんぜつ）してしまった。十日ちかくも用便を禁じられたうえの椿（ちん）事（じ）である。そのことがあってから彼は、工部局あたりのブタ箱に移送されたのかどうか、房内から姿を消してしまった。

私もまもなく「釈放（しゃくほう）」された。

女密偵を消せ

私は、特務の仕事をしているあいだ、有名な重慶（ちゅうけい）の女スパイで、閬北（かんぱく）で処刑された鄭（てい）頼（らい）茹（じょ）のような大物を扱ったことはない。

しかし、雑魚（ざこ）のようなのは、ずいぶん手がけたし、泥（どろ）を吐（は）かせる現場にも、何度も立ち会った。

みんなによってたかって、ひっぱり出してしまふ。ひっぱり出された大男は、ノソノソと壁ぎわにいつてすわると、壁に背をもたせ、膝を抱えたまま、なにやらワケのわからない呪咀（じゆそ）のことはをつぶやいている。

懲罰（じやうばつ）はそれだけではなかった。

夜、大男がイビキをかくというので、非常処置（じやうし）がとられた。みんなで手足をおさえつけ、便所のバケツの水を雑巾（ぞうきん）にひたし、やつの鼻と口の上から、びったり押えつけてしまふのだった。

この頭のおかしい大男は、そうされてもお三十秒ばかりは夢のつづきを追っていた。

しかし、さすがに苦しくなつて目をさます

狭窄衣とか、例の棺桶を立てたような暗箱の中に、一昼夜も閉じこめておく陰性な刑罰や拷問方法は、自分がそれをやられた場合のことを考えると、ゾッとする。そんな細長い箱の中に、身動きもできず一昼夜も直立不動でいたら、心理的にも肉体的にも、どんな変化がおきるか。

おそらく、それをやられた人間は、一生までもな人間には復帰できないイビツな感性の持ち主になってしまふのだ。

竹刀でなぐったりするのなんか、陽性でまだいいほうだ。なぐられる苦痛の感覚はすぐマヒするし、スキ間というものがある。が、一連の心理的拷問や水責めには、スキ間というものが無い。スキ間なき恐怖というものだろう。

私はひとりだけ、女密偵をこの手で消したことがある。したたか者で、日本側でとらえていろいろ責めてみるが、どうも背後関係が出てこない。

それなら、というので、いったん釈放し、ある期間自由に泳がせて、その足どりをさぐるようになった。

一月ばかりやってみたが、やっぱり尻尾

を出さない。利用価値はなくなり、マイナスの面ばかり出てきた。

ある程度こっち側のことも知っているから、生かしておいては邪魔になることになってきた。

私は、黄という、広東うまれの、こういうことのうまい男とふたりで、上のほうの命令で、女を消しにいった。愛多路の裏の、野鶏（街娼）なんか住んでいる安アパートに女は住んでいる。

夏の、まっぴるまのことだった。女に午睡の習慣があることは、黄が調べてわかっている。午さりのアパートは、しんとしていた。

どこかの部屋で、ラジオが、まのびのした胡弓の音をひびかせていた。ガタピシの廊下を踏んで二階にあがる。

女の部屋の前にきた。

部屋の中では、風を入れるため、ドアを半びらきにしたまま、女は、洋式のまるい蚊帳を吊り、ベッドの上でスヤスヤと寝息を立てていた。

形のいい足が、蚊帳の紗の布地を通して、バカに青白い美しさだ。

私は、黄と顔を見合わせ、

「よし」

というように、うなずき合った。

一瞬の呼吸をはかり、ベッドにおそいかかると、蚊帳ぐるみおさえつけた。

一瞬の出来事であった。つきあがるような抵抗はあったが、声は立てさせなかった。

三十秒ぐらい、満身の力でしめていた。手がブルブルふるえた。

ぐったりになった。

紗のアミ目を通して見た女の顔は、目をあいてこっちの顔をみてわらっているようにみえた。

蘇生しないよう、ていねいにあと始末をつけ、部屋を片づけて、だれにも会わず、アパートの外へ出たとき、七分しか、たっていないかった。

戦争の名による公認の殺人。しかし、ふたりとも、べっとりとヒタイにあぶら汗をかいていた。

すぐ近くの大世界にゆくと、私と黄は、冷たい飲料水を三杯、ものもいわずたてつけにおかわりした。

△古正英生・え

マダレナ殉教秘史

神の御名をとねえつつ、たぐいまれな美貌の聖女は、残酷きわまる責め苦に耐え、醜い獣欲にも魂を汚されることなく、昇天した！

あべ・さだよし

不幸をよぶ美貌

女は、聖ドミニコ会の童貞でその教名をマダレナ、男は、長崎奉行所の若い獄吏で菰田源之進。ともに、奇怪なありさまで、雑木林の小屋の中で相果てていたのでございます。そのありさまを詳述することは、あまりにもむごたらしいことでもありますから、よくしません。なんといいですか、マダレナは、息を引きとる

その瞬間まで、ゼウスの御名をとねえ、さながら召されて天にのぼろうとするがごとく、手をさしのべて祈るような姿勢でコト切れておりました。その下半身に、男がまつわりついたまま、これは臨終のきわまでその身内にもえさかっていた欲念を、そのままでの表情を、その顔にきざんでおりました。マダレナの魂は神に召され、その下半身は欲念のやからにけがされていたのでございます。それは、浄と穢、天国と地獄、神とサタンのそれぞれ双方に、一つ身を引き裂かれたような奇怪なダンガラ模様でございました。逮捕にむかった長崎奉行所の追っ手のものも、そのむごいありさまをみては、

「なむあみだぶつ」

思わず目をそむけたのでございます。

童貞マダレナは、そのもともとの名を忍と申しました。土地の名家のうまれで、何不自由なく成人し、十八歳のみぎりには、その絶世の美貌は、近隣にならぶものがないくらいでございました。「あまりにも美しすぎる」



というのが、人々の評判でございました。

「美しすぎるから不幸を呼ぶ。何かよくないことが起こらなければよいが」

うれわしげにいう古老もありました。これらの人々のおそれは、まったくの杞憂というわけでもなかったのであります。なぜなら、ほどなくして、忍の一家には、彼女以外のほとんどの家族が死に絶えてしまふような、おそろしい凶難が降ってわいたのであります。忍女の天性まれな美貌が、その凶難を招いたことを思えば、まったく人間は何かしあわせになり、何が不幸になるか、つくづくわからないものでございます。

忍女を嫁に乞うて、忍女の両親からいれられなかった、これもある旧家の次男坊が、それを恨みに思い、忍女の家火を放ったのでございます。

火を放ち、やがてその火の手がまわって、パチパチと粉を散らす炎が天を焦がすありさまをながめながら、

「やあ、燃える。燃える!!」

その男は手をうち、おどりあがって喜ぶていでございました。すでに狂っていたのでございます。

忍女とその家族たちが、火炎の中でもだえ、ねじれるさまを想像しながら、痴情のもろもろの恨みが一時に発したものでございましょうか、そして火に驚いてかけつけた近隣の人びとがその男を捕えようといひますと、

「触れるな。触れるな!! わしは、あの女と添いとげて見せようぞ」

そう叫び、ケタケタと笑いながら、人々が、

△特集・東西古今刑罰残酷物語△

「あっ」

とおどろく中を、みずから燃えさかる火炎の中へと身をおどらせたのでございます。そして、あたかもそれを合図のように、家屋の棟はどっとくずれおち、それにあおられた火勢は、ひとときわ赤く夜の空を焦がしたのでございます。

こうした業火の中で、忍女だけが命を全うしたのは、それこそ奇跡というものでございましょうか。もともと神のしもべとなるべきさだめをもって生まれた忍女だったのかも知れません。ただ、なにかのしるしのように、ひだり首筋のあたり、小判ほどもあるうかと思われる一斑の火傷を生じ、それがアザとなったのでありますが、ふしぎなもので、それは醜いというより、むしろ凄惨いような生来の美貌をさらにひきたてる結果となったのでございます。

こうして孤児となった忍女は、さいわい親類筋にひきとられました。が、あれほどの難事のあとではさすがに虚脱のさまを覆うべくもありません。

そこへ、やさしい救いの手をのべてきたのが、宣教に従事していたホルダン師でございました。このホルダン師によって、忍女は教えの道にみちびかれ、やがてマダレナという教名をもつ童貞となったのでございます。

竹串を足指に刺す

このころ、幕府は、キリスト教を邪教と見なし、これに対する迫害

の手を、徐々に強めてきておりました。あまりの迫害に、信徒が団結して反乱を起こした天草一揆の素地は、すでにつくられつつあったのでございます。

寛永十一年の秋ごろ、その迫害の手は、ついにホルダン師にもおよんできたのでございます。

ホルダン師は、忍女のマダレナが心の灯ともあおぐ教えの親であります。

マダレナは獄舎をおとずれて、ホルダン師の釈放を乞うたのでありますが、もとより許されるものではありません。

「それでは、あたくしを身代わりに」

と申し出ましたが、これもしよせんはかなわぬことでございます。

ついにマダレナは、師とともに入獄して苦しみをわかつことを決意、長崎奉行にそのことを申し出たのでございます。

長崎奉行は、幕府の政策のきびしい実践者ではありましたが、うら若きマダレナの美貌をまのあたりにし、さすがに、それを処刑するに忍びず、獄舎につなぎはしたものの、じゅんじゅんとこれをさとして改宗を迫ったのでございます。

あまつさえ、いろいろと土地の名望家の名をあげ、婚姻をすすめさえいたしました。これほどの珠玉のような美貌と資質を、あたら埋もれさせておくのが、よくよく惜しまれたにちがいありません。あるいは、奉行自身、ひそかに彼女に食指を動かしたのかも知れませなんだ。

しかし、なんで、マダレナが、それに耳を傾けるでありましょうか。すでに、主に捧げた身を、現世の色欲にゆだねるなど、思ってもみないことでございます。

ここにおいて、長崎奉行の心境は一転いたしました。

「これほどまでに言うを、そちはきかぬというのじゃな。よし、それでは!!」

今度はうって変わった折檻でございます。

長崎奉行所の、信徒に対するムチのきびしさは有名なもので、三歳の童児すら、それをきいただけでおそれおののくほどでありました。

ことに、直接拷問にあたります下級の獄吏は、いろいろと常日ごろのウサばらしをこれに託する傾きがつよく、その誅求は残忍苛烈をきわめております。

マダレナは、うしろ手に縛しあげられ、宙につりあげられました。が、その爪先が地をはなれますと、腕の関節がグキリと音を立てたのが、すこしはなれたところでもきこえました。

それを見ながら獄吏は、

「はは、あがったぞ。あがったぞ」

「タコタコあがれ。天まであがれ」

と口々にはやしながら、なおも責め手をゆるめません。

マダレナは、齒を食いしばって、その苦悶に耐えながら、主の御名をとねえます。それは、獄吏たちに、ふてぶてしい感じをあたえと見え、

「おのれ、ひかれ者の小唄を……」

とばかり、引き下ろし、今度は、つづけさまの鞭打をくれます。さしものマダレナも、息もたえだえにうずくまりましたが、かほそい声で、

「女なればとて、かくもいやしく扱いたもうか」
その恨みをのべました。



察するに、獄吏たちは、男の信徒に加えるのとはまた異なった趣の責め苦を、マダレナに加えたものと思われまゝ。雪のはだえを獄吏たちの満目にさらし、恥ずかしめをうける彼女の姿は、残酷といえは残酷、凄艶といえは凄艶で、荒涼とした獄舎の中に、おし出され、しばり出された女のはだえのにおいが、のたうちまわるばかりでございま

す。

なかでも残酷をきわめたのは、焼け竹の刑でございました。青竹を串のように細く削り、それを焼いたものを、足指の爪のあいだにさしこむのであります。

マダレナは、うしろ手に縛りあげられたまま、土間にすわらされておりましたが、獄吏は、その彼女に足を投げ出すことを命じました。いや、命ずるといふよりも、そのやわらかい足首をむんずととって、八の字にひらき、見るも恥ずかしいかっこうにします。

それを見ながら、十本の竹串を、おいしいものでも焼くように、表をかえし裏をかえし、ていねいに焙りあげます。もったもポロポロになるまで焼いたのでは、竹の強さも失われますので、そこにはそれ、火加減というものがあつたわけでございます。そして、手ごろに焼けたやつをば、

「それ、ゆっくり味わうとよいだ」などといいながら、一本ずつ足の爪のあいだに刺してゆくのであります。

最初の一本を刺しこまれたとき、マダレナは、声もたてまぜんのだ。声をたてるには、あまりにも苦痛が鋭すぎたのでありましよう。

そのかわり、上半身をはげしくのけぞらせて倒れたので、そのまま後頭部をしたたかに土間にうちつけ、

「ウーン」

と声をたてて失神してしまつたのであります。あたかも、子を産むときのように、膝を立て、大きく股をひらいたままであります。

失神はしても、そのあたりにまだ羞恥の感覚が残っていると見え、股はそろそろとあわされかけますが、力つきてまたガックリひらく。今度は外側に大きく割れかけますが、どっこい、腰の関節がきいてるので、角度いっぱいひらいてしまうと、あとはひらくにひらきようもありません。

こうして、ひらきかけたり、つぼまりかけたり、股がひとりでにゅるく動いているのが、本人が失神しているだけに、あわれでありました。

十本の串がズラリ

一本目の串で失神したマダレナは、二本目の串をさしこまれて、息を吹っかえしました。

昏むのも醒めるのも激しい痛みがなかだちとあっては、むごきことこのうえもありません。そして、十本の竹串が、マダレナの十本の足指に、まるでカンザシのようにキレイにならべてさしこまれた時分には、マダレナは、土間におおむけに倒れたまま、ピクリ、ピクリと股をけいれんさせるばかりでありました。

その全身も、オコリのように小さきさみにふるえておりましたが、その口からは、ひっきりなしに主の御名をあがめ、この苦痛に耐えさせ

たまえと祈る声が、もれております。

獄吏の耳には、なにやらそれが異邦人の名をよぶみだらがましい声とも聞きとれるのでしょう。

「うむ。この期に及んでなお世迷いごとを」

いまいましそうに舌うちをくれます。

刑罰の酸鼻は、そこにきわまったかに見えましたが、そうではありませなんだ。獄吏の頭には、もっとおそろしい考えが隠されていたのでございます。

彼らは、倒れたマダレナをおもむろに抱き起こすと、ふたたび、その全身を宙にまきあげ、

「その竹串でな、地面を搔くのだ。いいかな。しっかり地面を搔くのだぞ！」

なんという残酷でありましょう。足指の爪と肉のあいだにさしこまれた十本の竹串で、ホーキのように地面を搔くというのであります。

マダレナは、あえてそれを拒もうとはしませんでした。拒んだとて拒みきれぬものではないと観念したのであります。そして彼女は爪に刺さったその串の先端を、かるく地面に触れたのであります。その瞬間には、さすがさしつらぬくような痛みが全身を走ると見え、

「あ、う」

と全身を硬直させましたが、やがて狂えるものののように、宙づりにされた全身を奇怪にくねらせながら、足を動かせはじめました。

彼女は、地面に文字を書いたのでございます。しほり出すような苦痛の癡ってかたまつた串文字を！そして、それは、主の御名だったのでございます。書き終わったとき、大きな使命を終わった者のように、ふたたび昏々と氣を失っていたのでございます。

恍惚たるひととき

獄舎見まわりの孤田源之進が、マダレナをともなつて姿をくらましたのは、それから三日目のことでございます。

そのころ、キリスト教徒を閉じこめてゐる各地の獄舎では、信徒のはげしい信仰に心を動かされ、

「改宗して神恩に浴したい」

入信を誓う獄卒がすくなくありませんでした。孤田源之進も、マダレナが入獄してまもないころから、ひそかに彼女に対して特殊な関心を抱いていたのでございます。

しかし、この武士は、信仰よりも、むしろマダレナの神秘的ともいえる美貌に深く心をうたれていたのでございます。そして、「このマダレナを得ることができるならば死んでも悔いはない」

と思つておりました。そして、沛然と豪雨いたる一夜、暗やみにまぎれ、ついにマダレナを擁して獄外に拉致したのであります。

一夜、孤田源之進は、森の中の仮小屋で、氣を失つてゐるマダレナを介抱しました。やがて意識をとり戻したマダレナは、そこにゐる源之進を見て、



「あ」とおどろきました。彼女は、はげしい折檻のあと、半失神状態で呻吟してゐるところを、何者かに担ぎ出され、それが孤田とは知らなかつたのでございます。

しかし、孤田は、信仰によってマダレナを救つたのではなく、みず

今月の特写新作

△サデイスチン・フォト▽

★女王さまとしもべ (略W1)

(三枚一組) 三〇〇円

女王さまのお気持ちのままに奉仕するのが下僕の役目。そこに下僕の生き甲斐もあり、喜びもある！

★ドミナのムチ (略W2)

(三枚一組) 三〇〇円

ピシリッ！ ドミナのムチが、男の肌に容赦なく打ち下ろされる。ムチの魅惑と陶酔の姿態の悦楽図

△新人男性モデルの姿態▽

★純白の禪姿 (略B26)

(三枚一組) 三〇〇円

浅黒い肌に映える純白のさらしが目にしみる。六尺姿の魅力がたによい出てそこに妖美の世界がある

★しいたげられる禪男 (略B27)

(三枚一組) 三〇〇円

禪一本の姿で、いろいろにしいたげられるとき、あやしいムードが湧き出し、嗜虐の花がきそい咲く

△妍を競う三人艶縛姿態▽

★肌くらべ全裸しぼり (略Q1)

(三枚一組) 三〇〇円

お馴染みモデル三人が、艶縛の姿態を競いあう絢爛絵巻！ あやしくもなまめかしい縛悦のポーズ集

★花ひらく受縛天国 (略Q2)

(三枚一組) 三〇〇円

それぞれに受縛の感情をにじみ出させて、肌を輝かせる女たち。そこに法悦が生まれ陶酔が湧き出る

からの野望によってマダレナを救ったのでございます。そして、救ったことをタテに、マダレナに迫りましたが、マダレナがそれに心をかすはすありません。ホルダン師と苦しみをおかつたため、みずから刑についたマダレナだったのでございますもの。

孤田が、マダレナを掻き口説くうち夜があけ、外には、追っ手が迫った気配でございます。孤田は、小屋の外にとって返すと、追っ手の三人を斬りふせ、みずからも傷ついて、ふたたび小屋に戻りました。そのあいだにマダレナは、自決すべきでだてを捜しもとめました。獄中いたためつけられた身の自由もきかず、むなしく時を費しているうち、ふたたび孤田は帰ってきたのであります。

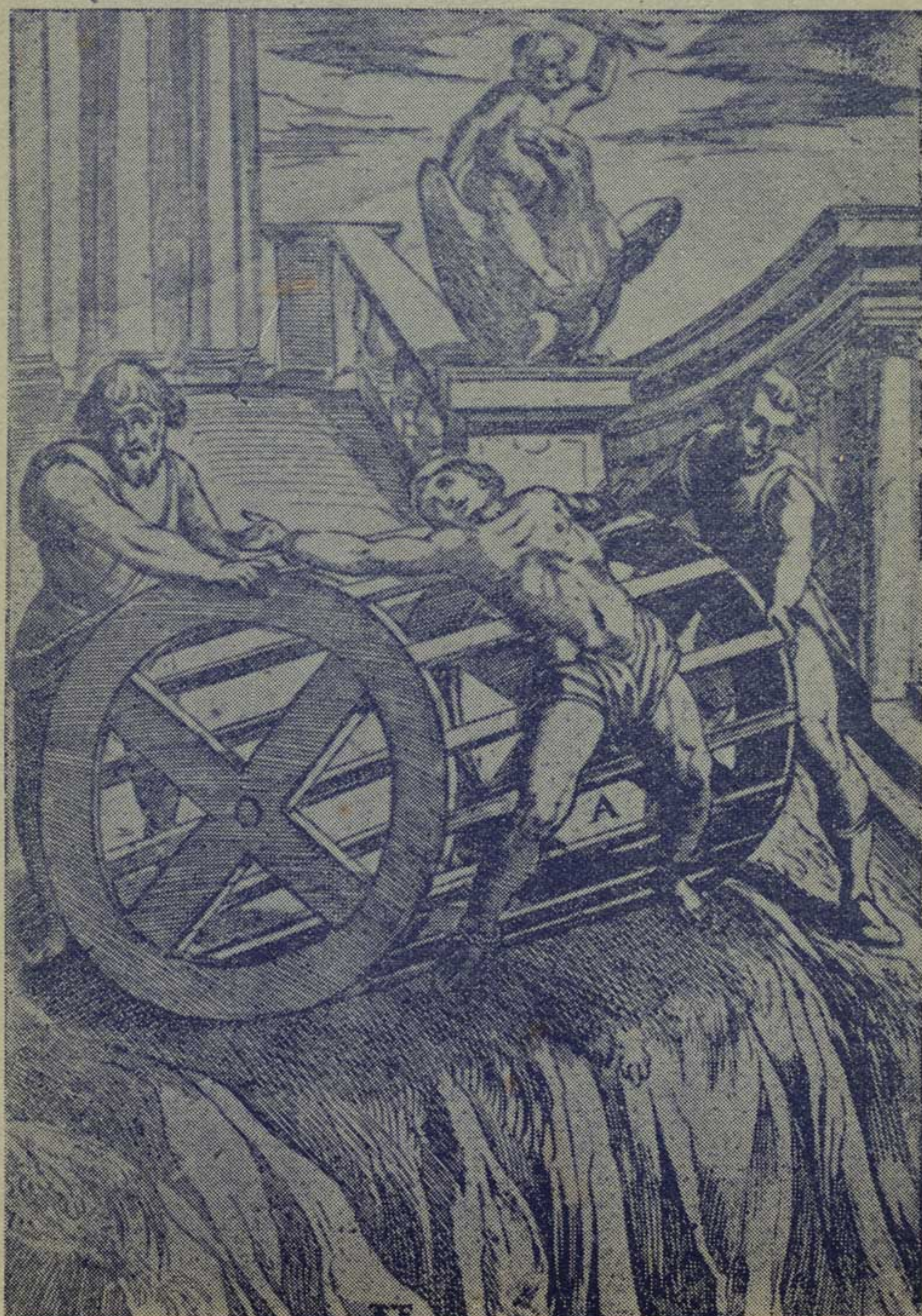
手負いの孤田は、いやまさる情念、そして切迫した身の危険に、ついに追いつめられた気持ちになり、力をもってマダレナをば手ごめにいたしました。主の御名を呼びながら、孤田の欲念で下半身を汚さな

ければならなかったマダレナでございます。

しかし彼女は、このとき、生まれてはじめて味わうはずかしげな肉体のいとなみの中で、あたかも、天なる主と、しもべである自分がむすばれるに似た不思議な恍惚を味わったのでございます。

しかし、しよせん、これは恥すべきことであります。自分が神のみ心をけがしたとした時、彼女は、かたわらに置いてあった孤田の脇差しをとると、彼女にかぶさるような姿勢で情痴の余喘にうごめいている孤田の脾腹深く突きあげ、返す刀でみずからの咽喉をかき切つて、二十歳の花を散らしたのでございます。かけつけた第二陣の追っ手が見たのは、折りかさなつてコト切れたふたりの、神とも悪魔ともさだかならぬその最期の様子だったのでございます。

昔の刑罰は残酷だった



手足をひろげて車に十字にハリツケされた罪人は、車ごと断崖に運ばれた。目のくらむ谷底には牙をむく岩石が……

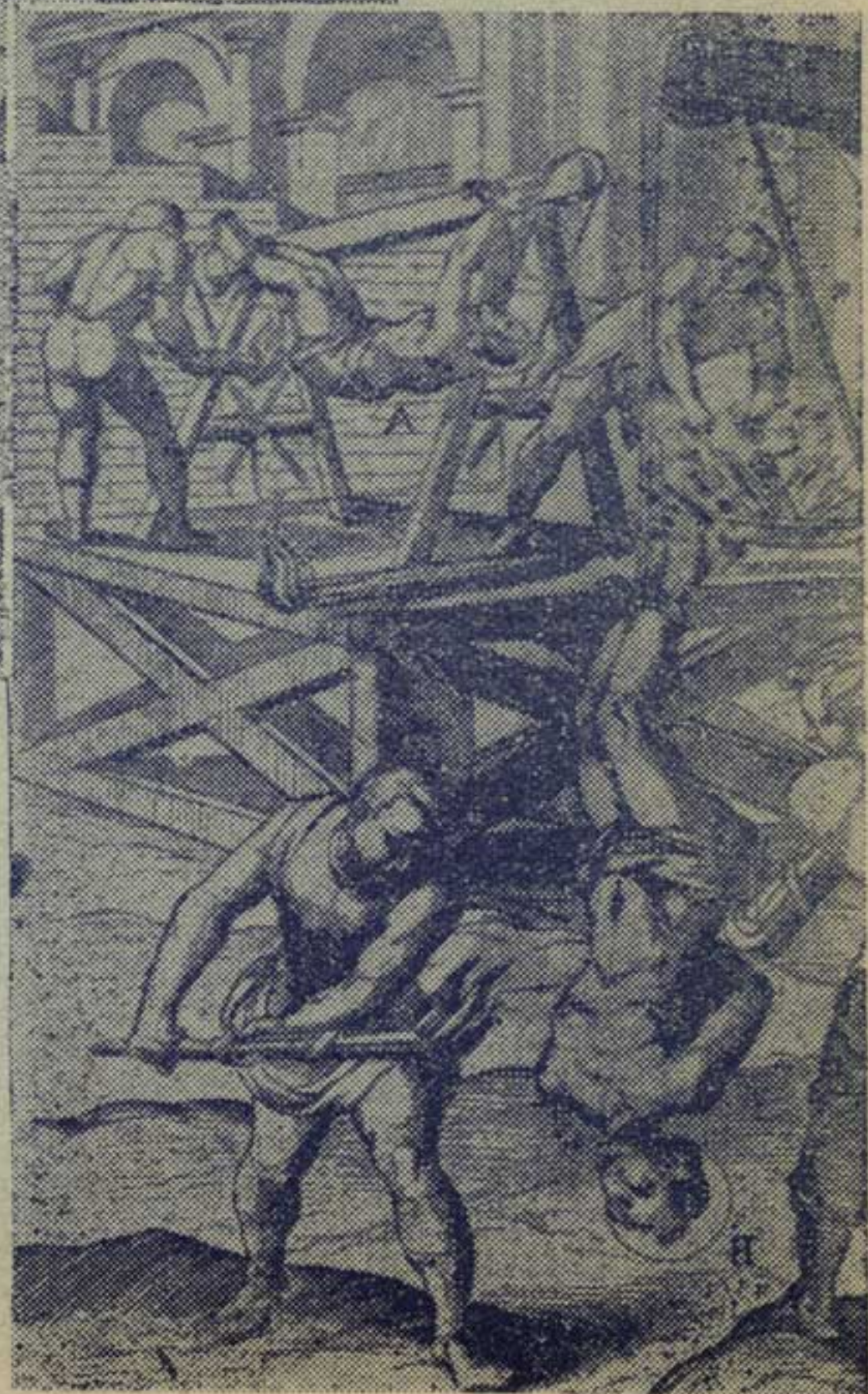
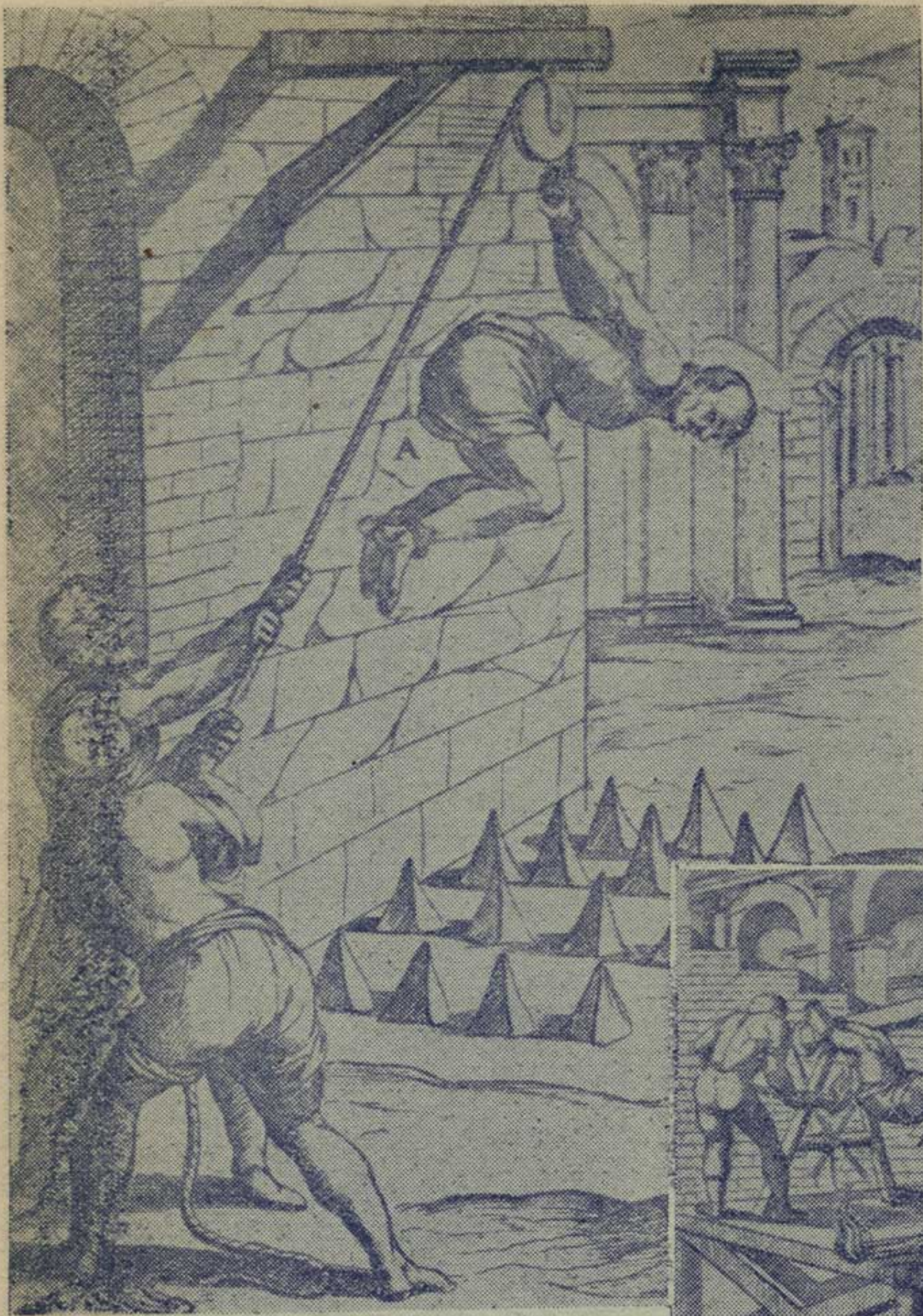


断頭の一瞬——いま、鮮血のしぶきに色どられて首がころがり落ちるのだ。さかさ吊りの斬首、ギロチンと、中世紀の典型的な刑罰図。

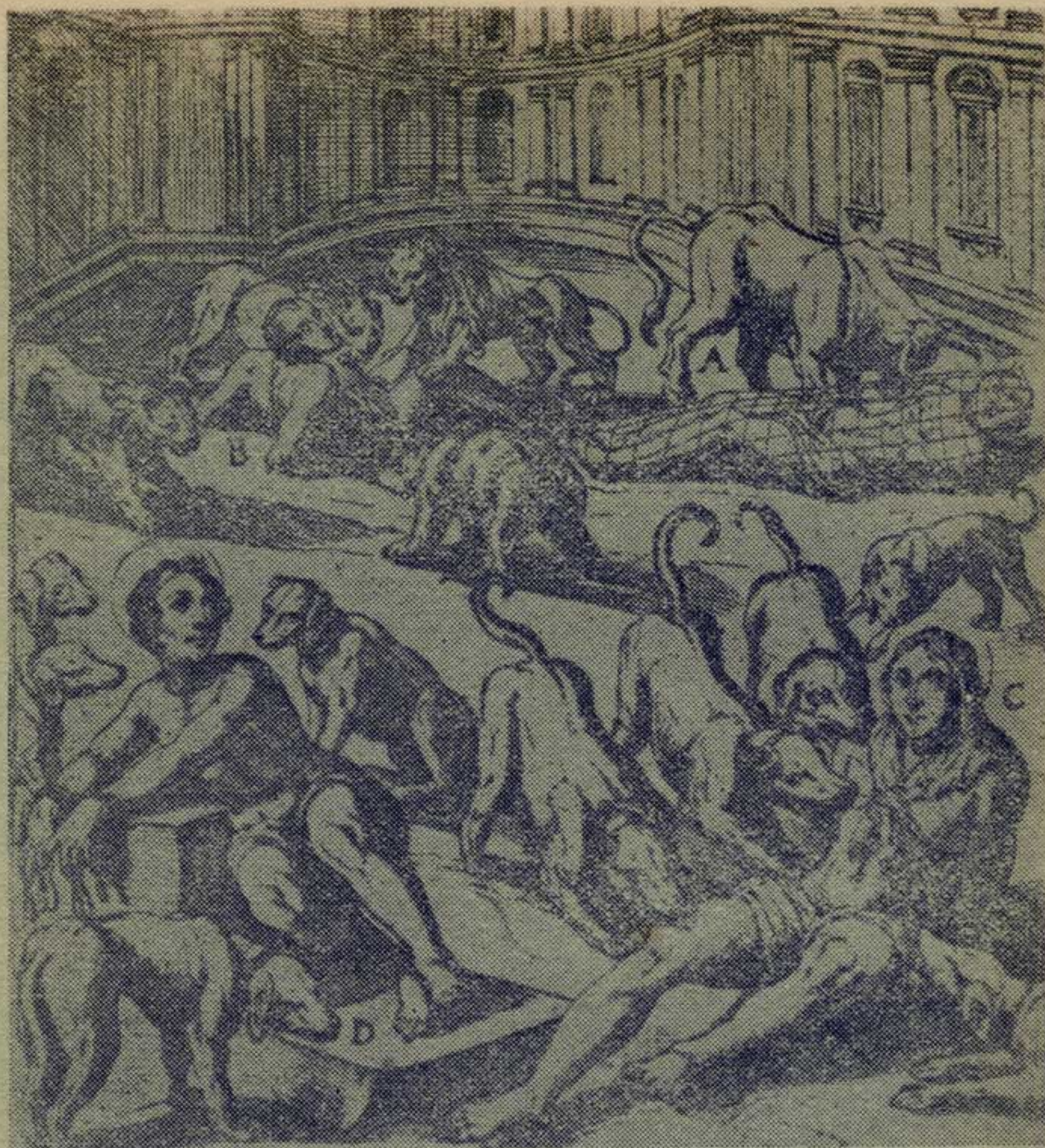






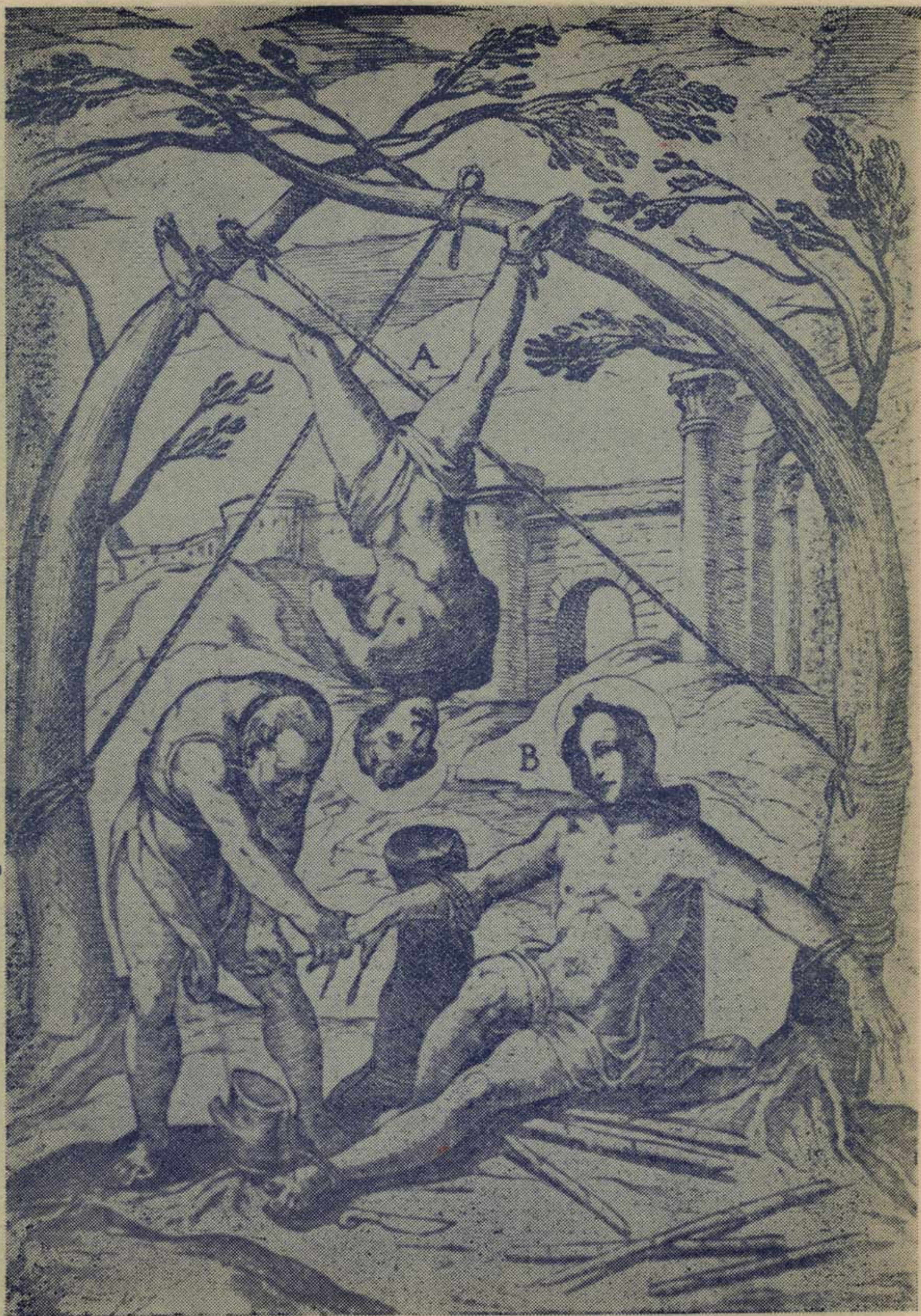


吊るされた全身の重量を一点に支える苦痛に加えて、火と鞭の二重苦、三重苦が、無残に責めさいなむ。刑罰とはいえあまりにも惨。



飢えた猛獣のまえに投げだされた生
き餌、熱火の洗礼にもだえ苦しむ罪
人たち、刑罰とはいえ、生きながら
味わう、残忍無残な地獄の責め苦。





指の爪と肉のあいだに突き刺される、鋭くとがった竹串、股間を裂く立ち木のさかさ吊り、生きながらの地獄がここにある。

晴雨流女のしり方

故 伊 藤 晴 雨

★ ☆ ★

“最後の浮世絵師”であり“責め絵の第一人者”である伊藤晴雨先生がなくなられた。去る一月二十七日午前七時半のことである。

“女の美しさは、もたえ苦しむところにある”という信念を標榜して、責め絵に打ち込まれた先生の業績は、風俗画家として残された数々の仕事とともに、輝かしいものである。本誌はここに、先生を偲んで、女体緊縛に対する一文を掲載、哀悼の意を表わすこととしたい。

☆ ★ ☆

女を縛るということは、単に女の自由を奪うということ以前に、なんらかの目的をもっていなければならない。女のからだに対してある種の目的を有するためには例外として、これに自白をしい、あるいは、そのからだの一部分に危害を加え、または、これを損傷してその苦痛の表情を見て快とするもの、などなど、また、懲戒の目的をもってするものなど、千差万別であろうけれども、その自由を拘束するのが第一の目的であらねばならないということ、は、何人も異論はあるまい。

昔の武術家は、戦場において、敵をいけどりにするため、あるいは降参人を縛るために、各種の縄のかけ方を発明した。

忍術の一部としては、縄のかけ方、人の縛り方にも、その人々の階級、官位、地位などによって、その形式を異にし、その縄の結び方もおのおの異なっている。初めは、単に人の自由を奪うだけの縛り方が、後世には、各種の流派、流儀さえ生ずるようになったが、

それは、男を主としたものであって、女は従で、女の縛り方は、男の何十分の一にしかさだめられてはいない。

これによってこれを見れば、女の悪人は、男に比べて少なかったに違いない。戦後のように殺人や強盗を働くような女性は、維新前は、めったにいなかったに違いない。

それに、女には、乳というやっかいな急所があって、男のように胸の上から縄をかけたり、胸部を緊縛すると、絶息するという危険があるから、普通(?)の罪跡不分明な人間には、これをほどくことができない。女を縛る場合は、乳の部分をよけて縛るので、女に限って特殊な縛り方を案出したのだから、その縛り方もきわめて少ないのである。

近來流行の被縛雑誌(?)に、少女の乳の上に細引きをかけて、梁の上へつるし上げたさし絵が、実験談と称する本文とともに掲載されてあったが、これは、立派なうそッパチで、こんなまねは決して

できるものではない。

私は、今までの体験のうえから得た女の縛り方を、以下、思い出すままに記すことにする。方円流だの、なにになに流だのというような流儀もなにもない、しいて言えば、晴雨流とも言えるものである。

① 早縄のかけ方



両手をうしろに手早く回し、両手の親指と親指を三味線糸のような細いじょうぶなもので、指が食い込むほどに縛る。それから、糸のあまりを、女ののどに引っかけて、また、

女の小指に食い込むほど強く縛る。あるいは、小指にかけずに、手首にかけるのもよい。親指は感覚を失い、指の先は紫色に変色して知覚を失う。

ただし、この方法は、あまり用いないほうが安全で、被縛の遊戯に用いて、長時間かかるときは、手指の肉を腐らせるような負傷をさせることがあるから危険である。一時間以上は用いるべからず。また、緊縛の度も、女が手を自由にできない程度にとめておくことが必要である。この方法を長く行なう時は、糸が肉に食い込んで脱し得ないものであるから、指の負傷はまぬがれないもので、徳川時代、岡っ引きの捕り物に応用された方法である。

② ぐるぐる巻き



これは、手早く行なわなければならぬ。実際問題として、逃げる女を縛る方法としては、彼が腕力の相違が物を言うのであるから、縄を

かける場合には、女に対して絶対に人情味を持つてはならない。それに続いて、相手の苦痛などを考慮に入れないことで、ある女は、男と違って、皮膚の感度がにぶいものであるから、少々手きびしく縛り上げる。

その時は、泣き叫ぶが、しばらくして神経がにぶるものであるから、女の泣き声などを正直に聞いて、手かげんをすることは無用である。

総じて女を縛る場合は、心を鬼にしなければ、力がぬけてしまつて、ほんとうに縛り上げることはできないということ、たえず考へなければならぬ。

ただし、双方が遊戯的にこれを行なう場合は、おのずから別であるが、私のように、女を実験台にのせて、生理的に被縛の研究(?)をする者にとっては、同情は禁物であるから、力をきわめて、縛ろうという以外に方法は、まずないといっている。

ただ、グルグル巻きに手早く縄をかけて、手早く、両手を縛る以外に、秘伝はない。要は、熟練にまつ以外に、手段はないということ

とになる。

縄

③ 早



まず、
両の手首
を縛り上
げること
を、主眼
とする。
この場合
手早く両
腕をねじ
上げる。

この呼吸が非常にむずかしい。

両手首に縄をかけ終わったならば、そのあまりを、二の腕と背中
の間に手早く差し込んで、これを二、三回くり返してのち、力をき
わめてしめ上げる。女の胸は急にしまつて、縄がやや肉に食い込む
であろう。

間髪を入れずに、こんどは、腹部をめがけて縄をかけ、二、三回
手早く回して手首に結ぶので、これは、よほど手早くせねば、女に
逃げられてしまう危険がともなうものである。

被縛遊戯の場合は別として、真剣な場合は、女の抵抗にあうこと
を考えなければならぬから、女賊を捕える場合などは、格別の注意
を要する。

ただし、忘れても、女の乳の上を縛ることは避けねばならぬ。女
の手がうしろであることは、もちろん言うまでもない。

④ 片足かけ (1)



まず、女を押えつけ
て、うつぶしにふさし
め、右の手を（たいて
い右のほうが先になる
ようにする）うしろへ
ねじ上げて、手首に縄
をかけ、次いで左の足
首へきわめて早く縄を
かける。

ただし、この場合は
縄の蛇口（図を見よ）

は、必ず手首のほうへ少し出しておくことが必要である。

足首を縛った縄を蛇口へ通してしめ上げると、女のからだは乙形
になる。縄のあまりをもって足を巻くか、または別の縄をもって左
の足首の脛とまたとの間に縄を通して、力をきわめて、またの上へ
縄を巻く。

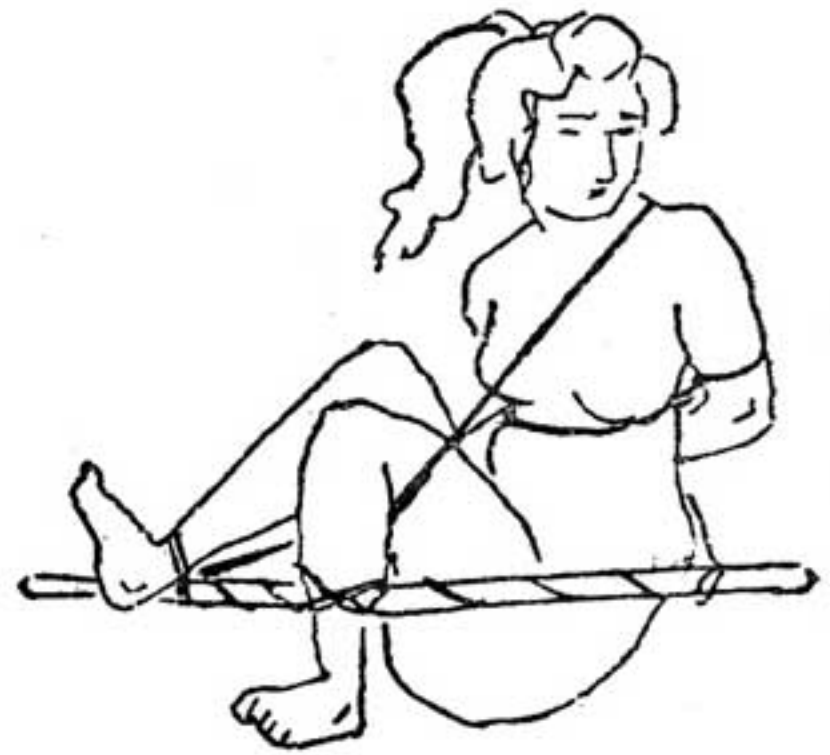
この縄は、なるべく新しい細引きが効果的である。

縄をともしおわたならば、こんどは力いっぱいまたと脛を巻
いて縛るので、その縄の末端は、順次上部へ巻き上げて行って、
人中のところでグツとしめ上げるようにする。

またの巻き方があまり密だと縄が足りなくなるから、なるべく荒
く巻くほうが、あとでこの縄を首にかけた時に、有効である。

さて、この縄を首にかけて、ふたたび左の手を縛って、とめる。
こうしておいて、右の足を持って女のからだを引きずり回して責め
ると、効果満点である。

⑤ 片足かけ (2)



④の方法と全く反対な方法で、女体を縛り、ひととまたとの間に棒を入れて責める方法があるがこれ以外に、女体をそのままかさづりにつるすのもまた、おもしろい。

ただし、これは、現在では行なうことがない。おそらくは、維新前、番屋などで岡っ引きなどの

行なった拷問の一方方法で、白状しない場合は、ホダとは足枷あしかせのことを言う。でもつないでおくのである。

⑥ 入れ首



仮に名づけた名称である。右の手首を左の足のまたの間にに入れて、その手まえへ縄をかけてかたく縛り、その縄のあまりを女の首にかけて巻

き、さらにその縄を背中に回して女の左の手首を背に回して縛り、その縄じりを女の腰に巻いて縛る。

女の首は斜めになったままだになり、手首はまたにはさまれて、縄

⑦ 海老責め的一种



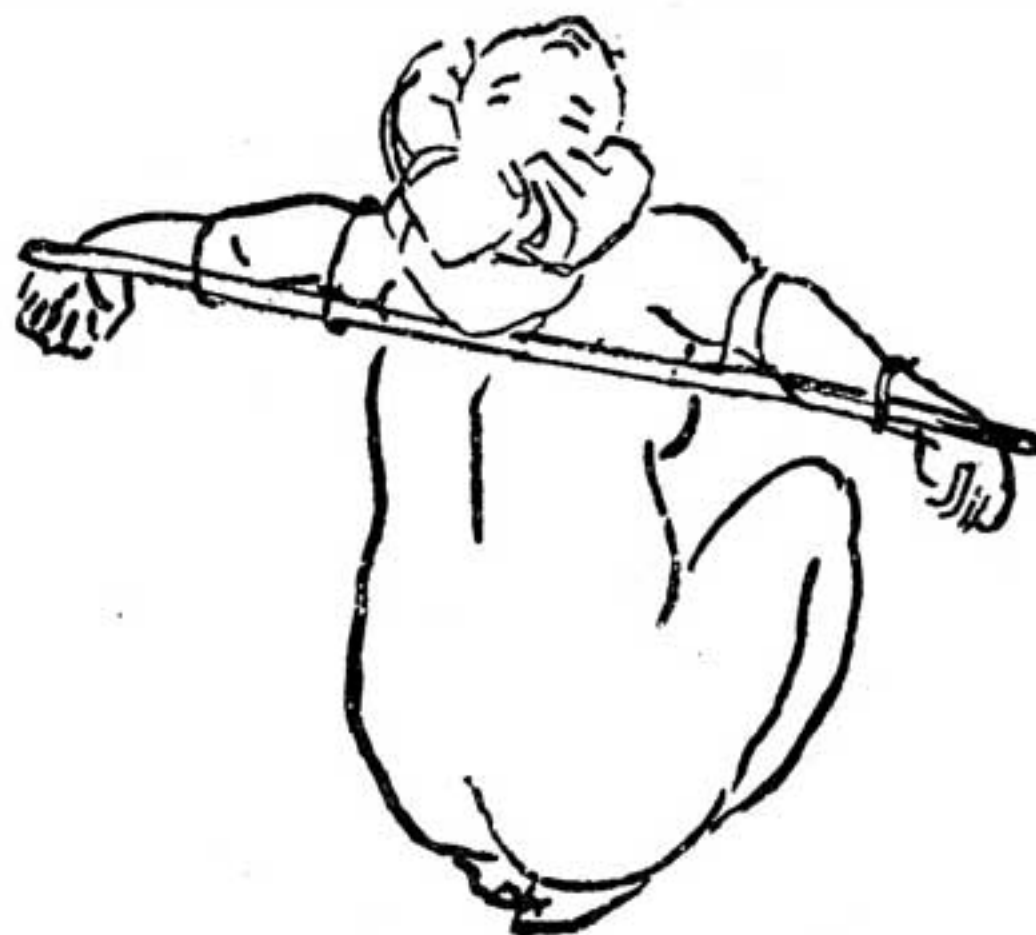
これは、江戸時代の拷問蔵で行なわれた縄のかけ方とほぼ同じである。女にあぐらをかかせて足部を二、三カ所縛って、さらに、女の肩とまたとに縄をかけて、切り縄をしておく。首は、できるだけ足に近づけておく。女の背は丸くなって、エビのように曲がる。

海老責めというのは、からだの色が赤くなったのちに白くなると一命に関するもので、縄をとくことになっているという。筆者はまだ、ここまでの実験はしたことがないから、なんとも申しかねるが、いずれにしても、女のからだを前かがみにして、ある部分を露出する責め方であるから、これを実験するには、よほど親しい女性でなければ行なえないということと、研究的に実験するとすれば、

のために痛みがはげしくなってくる。一時間以上経過すれば、肩が痛くなってくる。このまたの上に重量を加えれば、手首の痛みは、右の二の腕におよび、肩が痛くなってくる。左のひじの間に棒をはさんでくじると、拷問の目的は容易に達せられ、女は悲鳴をあげて苦しむ。なお、これに呵責かしやくを加えるには、増し縄をかけてからだを緊縛すれば、場合によっては、失神することもあるという。

十分以上はたえ得られないであろうと思われる。
筆者の実験によれば、一回の試験で、数日間からだの傷害を来たしたことがあった。

⑧ 棒 し ほ り



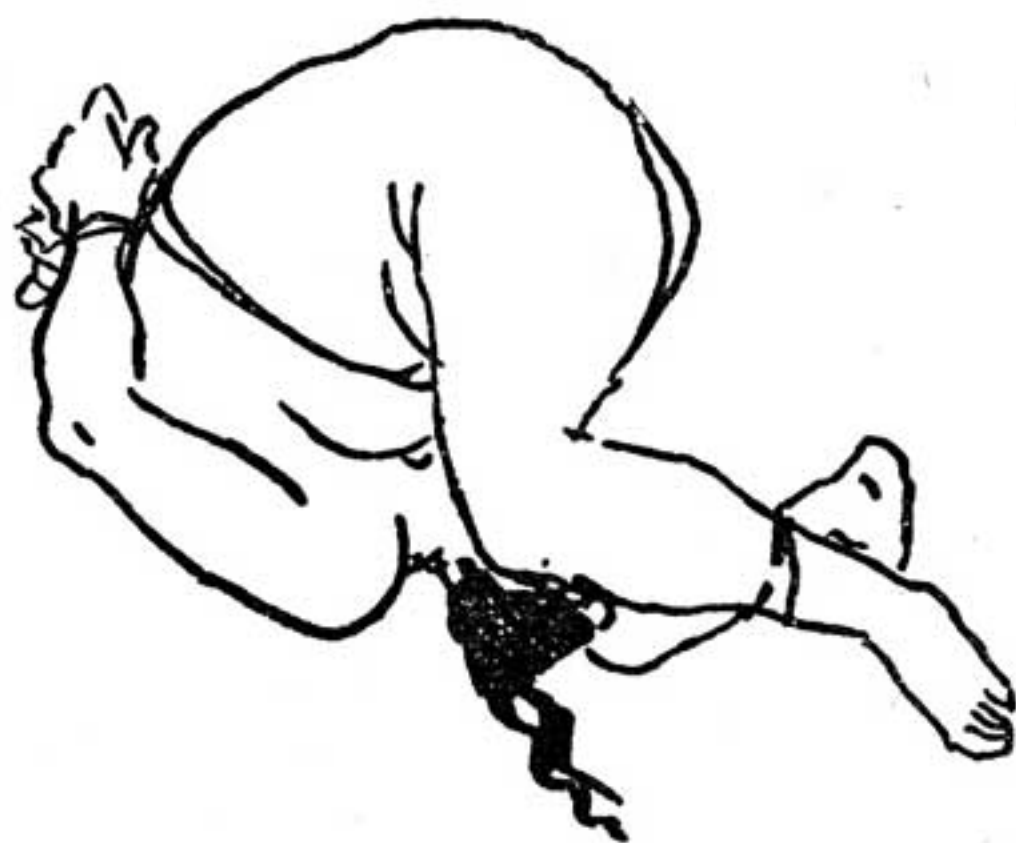
これは、実験しても無害であり、ある程度までは長時間の責めにもたえ得るものであつて、遊戯的に行なう場合は、これを延長して、夏ならば女を蚊責めにするか、または皮膚を傷つけない程度のある種の拷問を加えても、痕跡をとどめないで、婦人同士の同性愛の嫉妬の場合などには、一番無害有効な縛り方である。

よって、この責めの応用の範囲はきわめて広く、また深い。なんとなれば、これを応用して、冬なれば庭に投げ出して寒さにふるえさせるとか、夏なれば前述のごとく蚊責めにするとか、または、いふし責めにするとか、これを応用して、各種の責め方が生まれてくるのである。その応用は無限である。

縛り方は、各人の好みによって異なるが、いままで多く行なわれ

ているのは、両腕を一文字に広げて、背中に棒を背負わせ、棒の数を所を切り縄で縛り、女の足首だけを縛ってころがしておく。または立ち木などにつないでおくかである。
ふつう「野あらし」の私刑として、もちいられたということである。

⑨ 股 の ぞ き



これは昔、佐渡の金山の役所で行なわれたと伝えられる、ヒョウタン責めの一種に近いものである。よほどの忍耐力のある者でなければ、がまんのできない縛り方だ。

両手をまずうしろに回して、背中で縛る。縄じりを肩に当てて、海老責めと同じようにしめ上げ、それから、縄を両またの間に入れる。

女の首が、しりの穴の見えるまで、かたくしめつけて、縄をうしろへ回して手首に縛り、その縄じりを梁につるして引き上げるといふのだから、バカに手がかかることと、危険がともなうので、実験がむずかしい。

⑩ 鷺



仮に名づけた名で、その形がサギに似ているからである。女の手を背に回して縛ることは普通であるが、なるべく手首を高め、縛り上げることが必要である。

この縄じりを延長して女の右または左の足首を前部に向かって折り曲げ、螺旋形にこの足に縄を巻き、別の縄をもって直立する女の足に丸太を縛りつけて、その丸太を両手の間に通して縛ること、図のようにする。その丸太の下端は地に埋めておく。女のからだは、前方に曲がって「字形」になっているので、あたかもサギの形に似ている。

さらに、女に苦痛を与えるには、背中の上に重い石などをのせておく。長時間におよべば、気絶するそうであるが、筆者はまだ、そこまでの実験は行なわなかった。

⑪ 両手上げ



これも、もちろん仮の名称である。左右両方の手首を上へ上げて縛り、この手首の間に棒を通して、手を

下げることのできないようにしておく。

ただそれだけであるが、この女の脇の下を、ほかの人々がかわがわくすぐるのである。女の苦痛が激しくなると、からだをもたえさせるので、足の自由を奪うため両足を丸太に結ぶ場合もある。

これは、女に傷つけず、最大の苦痛を与える場合に用いられるので不眠不休に責められると、精神がもうろうとして、白状をするという。これは、うつつ責めという「責め方」に用いられる。縛り方はいたって簡単であるが、時間を要する気の長い責め方である。

⑫ 股開き



これは、両手をうしろに回して縛り、その縄のあまりで、両足をできるだけ大またに開かせ、足首と足首の間には丸太をもって、開いた両足を縛るのである。

これを、横臥の場合に行なうと、悪質な遊戯となるが、ここで詳述するのはさけよう。

要は、女の肉体の変化を求めるに当たって、奇を好むのあまり、人体の屈折に不自由なポーズを求めることは、被縛芸術を冒瀆するものである。女体の残虐美には限界線があることを知ってから、縛り方の研究を進めるべきであろう。

⑬ くくり猿



これもまた仮称であるが、形状のうえから名づけた。これは、両手と両足を一つにして、くくりザルのように縛るので、首も下向けになっているので、

外見よりも苦しい縛り方である。

これを、つるし責めに応用すれば、表題のごとき形となる。ただし、実際問題として、これをそのままつるし責めに応用する場合は手の関節を損傷することがあるから、無経験の人には、この方法は適用できないということを記しておく。

⑭ 逆さ吊るし



これは、実際には、めったに行なえないものであるし、また、行なえば生命に關するから、特

殊の場合でなければ、まずでき得ない縛り方である。

しかし、しいて写真を写す場合とか、映画のセットなどで行なう場合には、布連雀を用いるのが安全である。

布連雀というのは、布をもって胴をいくえにも巻いて、これに麻縄を通して輪を作り、この輪に本縄を通して人体をつるすのであ

て、これは、地方の芝居などで、臨時に宙乗りなどをやる時に使用されるものである。

しごく便利なものであるが、しろうとにはちょっとできかねるから、女をさかさにつるす場合は、まず両足を縛り、女のからだを高い板の上に上向きにして（手はさきにしる手に縛っておく）板を突然除けば、女のからだはブラリとたれ下がるのである。

これも、一見容易のごとくにして、実は難事ちゅうの難事であり、このさかさつるしのコツは、実験に待つか、口伝によるほかない。

⑮ 吊るし



両手をうしろに

縛って、大衆小説のさし絵のような形につるすことは不可能である。女のすそは、つごうよくひろがり、長

いふりそでは形よく動くと思うと大違い。女のつるされたのはあまりいい形ではない。

ことに、前述のごとく、女の乳の上には絶対に縄をかけられないから、ますます形は悪く、足はダラリとブラ下がり、グルグル回っているばかりである。仮に、女の帯に縄を結んで女体をブラ下げたとしても、棒のような姿勢になって、美観はない。

縛り方は、両手を高手小手にして、胴へ綱を巻き、梁などにつるしておくのであるが、この縛り方には、相当手かげんを要するものであって、危険がともなうことを忘れてはならない。

レール
・ 訳



マダム・アリタリバの家は、ラタン区のソ
ルボンヌ美術学校の近くにある、閑静な一画
で、木々の緑にとりかこまれていた。夜にな
ると、木立ちの闇の奥に夫人の室の灯があた
たかい色で差し洩れた。未亡人アリタリバが
こよなく美貌の三十女性であることを知って
いる男なら、その窓の灯を、なにやらなまめ
かしくも感じることだろう。じっさい、マダ
ム・アリタリバは、容色優れた婦人だった。

大学教授であったアリタリバ氏の死後、今
日までのおよそ二年間、彼女には、ついぞみ
だらな浮いた噂はない。それは、夫人が自分
の情事をたくみに秘密にし通して来ているた
めである。夫の死後、じつは、すぐに男と関
係ができていたのだ。

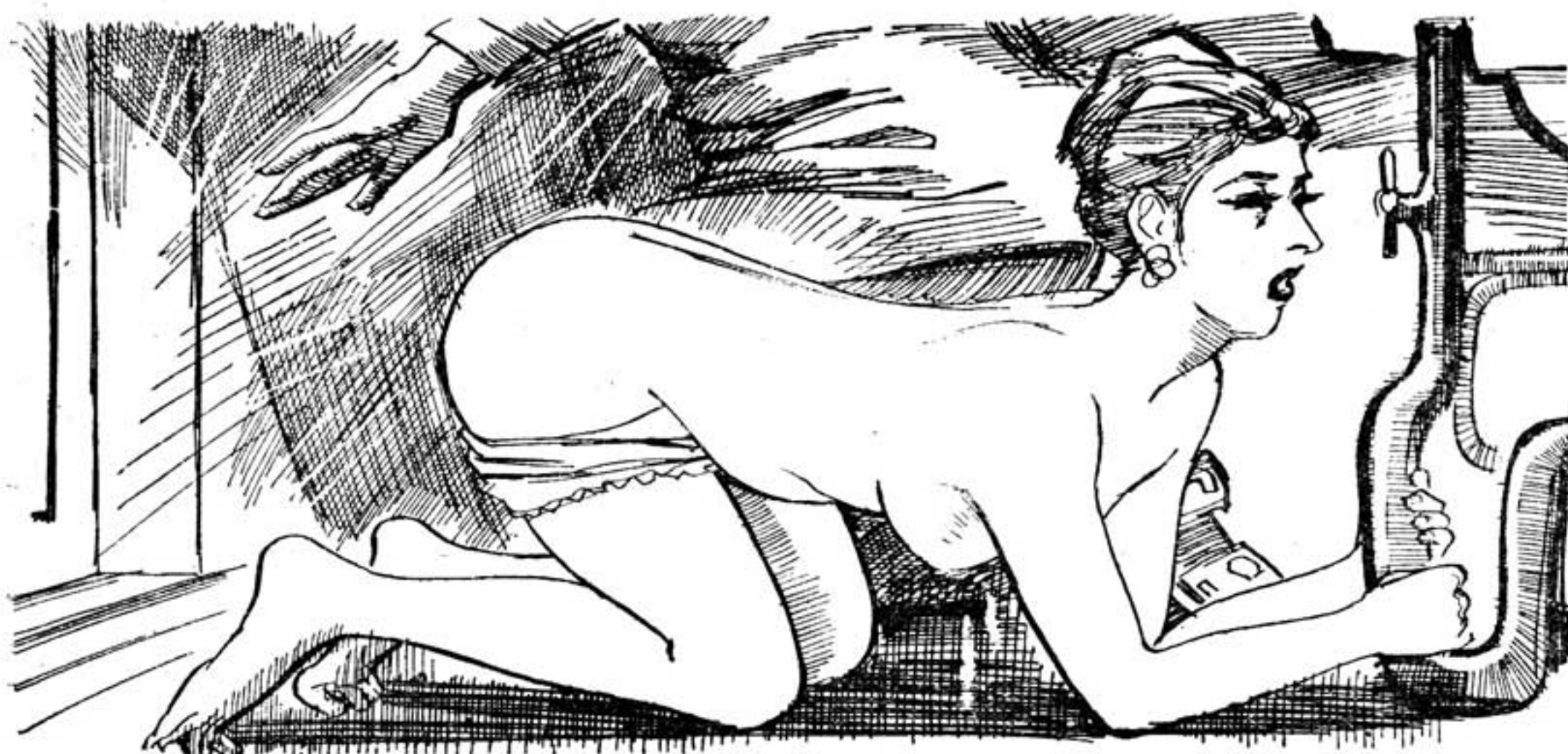
その情人は、ロベール・クレマンと言い、
はるかに年下の、亡夫の教え子の大学生で、
女たらしで有名な美貌の青年だった。

だが、アリタリバ夫人が彼のモノになった
のは、彼の口説きになびいたわけではない。
眠り薬をジュースに仕込まれて、昏睡してい
るうちに犯されてしまったのである。

それ以来、夫人はロベールと切れることが
できず、哀れな境遇になってしまっている。
どういうふうに哀れであるのか？

鞭魔ロベール

ミ シ ェ ル ・ ク
北 潤



それは、これから知らしていきたい。

浣腸のあとの平手打ち

ひる過ぎ、ロベールから電話がかかって来て、今夜行くと言う。彼は、どこかの酒場からでもかけているようで、ざわついた男女の声と、生のモダン・ジャズとが受話器から洩れて来ていた。

「どうぞ、待ってるわ……」

夫人がそう声弱く答えると、ロベールはにやにや笑っているような声で、

「臀を叩いてみな、マダム」

アリタリバ夫人は、言うままに、受話器を置いて、みずから臀に平手打ちを加えた。びしびしという音が、酒場のカウンターでほろ酔い、気分のロベールの耳にひびいた。クフフと彼は含み笑いをし、

「もっと叩きな」

「ロベールったら……」

白い纖手はもう一度自分の臀を叩いた。

「よしよし、今夜たっぷり責めてやらあ」

臀責めの用意をして待っていたな、彼はそう命じて電話を切った。

ロウソク、鎖、浣腸器、フォーク、バラの枝、棒、皮鞭——そうした種類の責め道具

を、夫人は、居間の丸テーブルの上に準備して、地獄の夜がおとずれるのを待った。

玄関の横手にカー・ポート（車置き場）がある。その中へ、灯を消してしずかにロベールの黒いセダンがはいって来ると、夫人は、中庭に面した入り口に灯をともした。ロベールは、いつもここから家の中へはいる習慣なのだ。

「いつものとおり揃えたわ」

責め道具をならべたテーブルの前に、うしろ向きに突っ立って、アリタリバ夫人は顔をうつむけて、言った。黒い下着をひき下げて、臀をさらしてロベールの観察に供している。白桃のような形のいい美しい臀である。

「いつ見ても、何度見ても……」

と、美貌の女たらしは含み笑った。

「さ、まず浣腸だ」

おとなしく、夫人は先に立ってトイレにはいり、便器に中腰でまたがったが、

「ひどい人ね」

声をうるませ、両手でぴっちりした白い臀を押しひろげて、浣腸を受けた。

浣腸がすむと、そのままの格好で臀を叩くと彼が言うので、夫人は、華奢な指で、しっかり配水管を握りしめ、臀筋をひきしめた。

きゅーっと二つの臀が寄ってひきしまるのを見ると、ロベールは意地悪く、

「力をぬけ」

と命じた。すると、夫人は、にわかになすり泣きながら、臀部を全解放にした。

びしっ！ びしっ！ びしっ！ ロベールははげしく平手打ちを加えた。夫人はだんだん前のめりに上体をせりだし、配水管にひしとしがみついて痛みをこらえた。白桃のような美しい臀の左半分は、みるみる赤く手のひら型がつけられていった。左半分だけに、びしっ、びしっ、平手打ちが集中するのだ。せまい窮屈な場所なので、ロベールは叩きやすい手前側の左臀だけを叩き責めるのである。

臀肉が千切れそうな、猛烈なその平手打ちに、

「ああッ……ああッ……ううう」

たまらなくなつて夫人は、苦痛の声をほとばしらせ、美貌を涙で濡らし、

「右臀を打って……！」

と哀願する。

はじらいながらのその哀れな声は、いっそうロベールの嗜虐感をそそるだけでしかなかった。

彼は、クフフと狼得の含み笑いをもらしながら、左臀がいちめん充血の赤みをにじませるまで、しつように、ぶちつづけた。

ロウソク挟み

ビデで、夫人が臀を洗い清めている間に、ロベールは、バラの枝の葉をむしり取り、トゲだらけの手ごろな一本の鞭にした。ついで、クリスマス用の大きな色ロウソクに火をとすと、それを片手にかざして、

「マダム！」

タオルで臀を拭いている夫人を、こちらから声荒く呼んだ。

「ぐずぐずしないで早く来い！」

これからの本格的な臀責めの苦痛を思つて、夫人は、おびえきっているふうである。いつまでたっても、彼女は年下の情人の残酷なプレイに馴れないのだ。それは彼女の不幸だった。女たらしロベールの手にかかること、たいていの女たちが二、三度のうちにマゾに化し、被虐を喜ぶのにもかかわらず、この気高く美しいアリタリバ夫人だけは、例外だった。

夫人が床に四つんばいになった。

「クフフ。熱いぞ」

赤々と炎の揺れる色。ロウソクを、ロベールが差し込むと、夫人は臀筋をひきしぼって臀の間にそれを挟み立てた。早くも熱いロウ涙が一、二滴、円丘にすべり落ちた。

「熱っ……」

「さあ歩け！ 赤ん坊のように、はいはいしろ！ 火を消したら鞭打ち五十回！ ロウソクを落としたら百回だ！」

寢室まで、はいはいの格好で廊下を進んで行かねばならないのだが、臀を動かさずに両手を使って、そろそろとにじり進んで行く苦行に加えて、ロウ涙が熱く臀をなぶるのである。

廊下をそろそろと火をともした臀が行く。

「熱ッ——熱ッ——ううう」

ロウソクはふらふらと揺れ、赤い火影はゆらゆらとかしぎ、熱ロウは雨のようにしたたった。今にもロウソクは倒れそうである。

この責めを、ロベールは、ロウソク挟みと称していて、夫人に対してはとりわけよくこの責めを行なう。だから夫人は、多少は馴れていて、コツも心得てはいるが、失敗したらほんとうに皮鞭で尻を百叩きされることだから、冷や汗を噴きだしながらの懸命な努力なのだった。あぶなく倒れそうになって、また



ロウソクは立ち直る。熱ロウで臀は赤くただれだしている。

「上手になったな、マダム」

やっとの思いで夫人が寢室のドアの前にたどり着くと、「クフフ」ロベールはロウソクを抜き取って、ふっと吹き消した。

鉄の鎖でベッドに女体を縛りつけ、バラのトゲ枝による叩きと、フォークの刺し責めと、棒による叩き、それから最後に皮鞭による叩きとをロベールは加え、満足して臀責めを終えていた。

手も縛ってね

ラタン区の某国大使館に勤めているマリ・レンベルグという娘がいた。二十歳前の若い可愛い娘で、とりわけ唇の形が受け唇であどけなかった。髪はブロンドで、しかもくせのない素直な毛質だった。生粋のパリジャンヌである。

そのマリ・レンベルグは、女たらしの美貌の大学生ロベール・クレマンに首ったけであった。もとより彼女も、みずみずしい処女の中からだを、ロベールにむさぼられてしまっているのだが、後悔の色はなく、たいへん熱を上げているのだ。

ロベールの住まいは、モンマルトルの近くにある、裏町と背中合わせの場所に小奇麗な白ペンキ塗りの一戸を構えている。国元からの年額莫大な送金でこの若い女たらしは、ぜいたくに振舞っているのである。

女たらしは青いガウン姿で、スコッチ瓶を片手にひじ掛け椅子にどっかりすわって、片脚をぐいと突き出し、マリに足の爪を噛み切らせていた。マリは、海老茶色のスカートをつけただけで、乳房は二つながら裸でむきだし、その胸ふところにロベールの足を抱え込んで、歯でその爪を噛み切っている。

「愛しているわ、ロベール……」

ロベールの片足が、乱暴に乳房を虐げだすと、マリは、声をあえがせて、

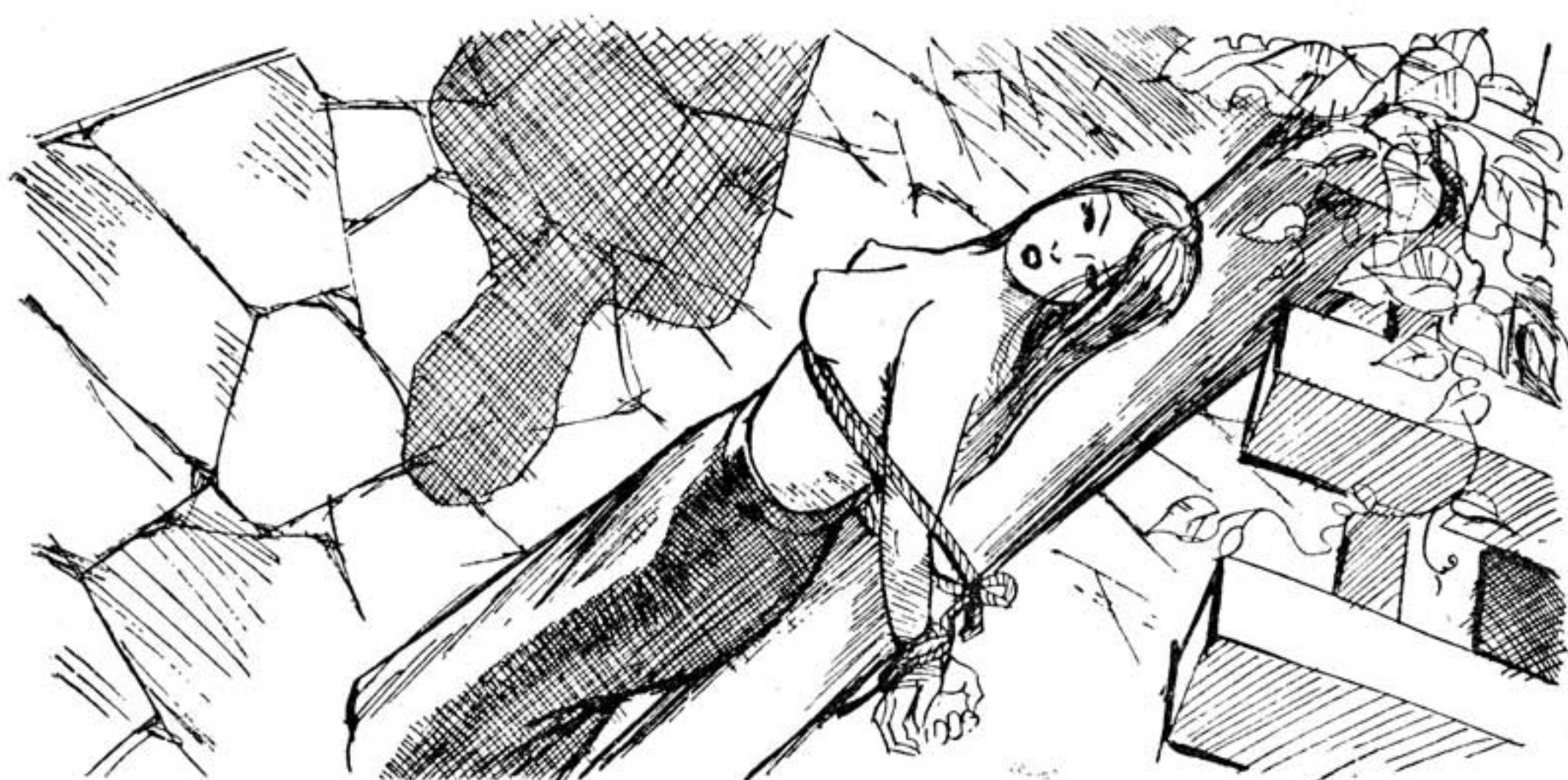
「愛してるわ……どんなにでもいじめて！」

ああ、こんな可愛いせりふを、一度でもいいからアリタリバ夫人の口から言わしてみたい——ロベールは、胸のうちでそう思った。

彼は、心のどこかでやっぱり、美しい恩師の未亡人に参っているのだ。

テラスの柱にマリを縛りつけながらも、ロベールは頭の隅で夫人のことを考えていた。

そうとも知らずマリは、細腰をかたく柱に縛りつけられると、その金髪の可愛い顔に被



虐のよろこびをにじませ、

「手も縛ったね」

「むろんだ」

うしろ手にした可愛い手を、ロベールはロープのはしで縛り上げると、キッチンに行つて、バケツ一杯水をくんで戻つて来た。

「おお、冷たい」

頭からざーっと水を浴びせられて、マリはふるえ上がったが、その艶やかな肌は、水をはじいてしまうほどに若々しい。

青いガウンのポケットから、おもむろにロベールが皮鞭をとりだし、数歩退ってゆたかな美しい乳房へ横なぎに振り当てようと構えた。ちょうどそのとき、玄関でベルが鳴った。

「女だわ、きつと！」

うらめしげにマリが身をよじって言った。

「クフフ。やけるのかい」

ぎゅっとマリの片乳をつねっておいて、ロベールは鞭を握ったまま玄関へ出て行った。

マリのカンが当たって、客はやっぱり女性である。

「会いたくてやって来たのよ、ロベール」

セーヌ河に面したリヴォリ街で旗亭を営んでいるエディット・ロバン夫人は、四十近い仇っぽい年増である。グレーの秋コートを着

て、その袖に、小さな子供の手がすがっている。

七つになる彼女の娘だった。

「可愛い娘だな」

ロベールは無表情に言い、

「会いたくてやって来ただろ？」

「会いたくて！ とっても会いたくて！」

マダム・ロバンは叫ぶように言った。

「お願いだわ、どうぞあたしを虐めて！」

この場で脱げ、とロベールは命じた。裸になつていくママンの様子に、娘は驚き、ロベールの手にする長い皮鞭に、いっそうおびえを大きくしていた。マダムは、コルセットをはずすと、娘のからだを胸に抱き寄せ、

「ママンは悪いことをしたから、お臀を打たれるのよ」

言ううちに、びしーっ！ と鞭が臀部に飛んで来た。

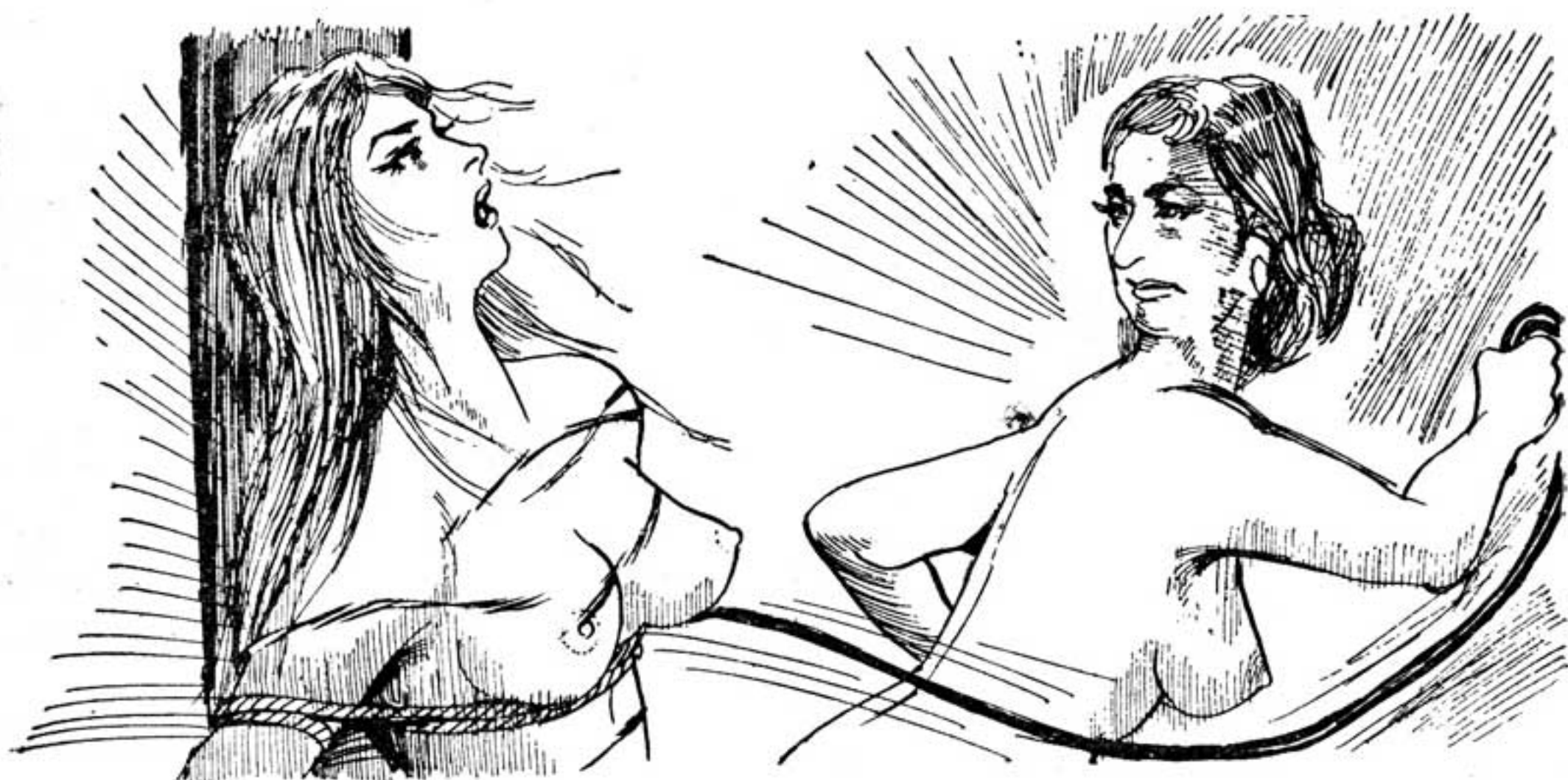
「ううう！」

臀を揺すって夫人が苦悶すると、わあーんと娘が泣きだした。泣くんじゃないよ、と言つて、この艶婦は、

「どうぞびしびし打ってちょうだい」

「クフフ」

ロベールは激しく二の鞭を加えた。



「ううう！」

白臀に四すじの赤い条痕をつけて室にもなわれて来た子連れのマダムを見ると、テラスの柱でマリ・レンベルグは、青い瞳に嫉妬をともした。ロバン夫人のほうは、さすがにむきだしの肢体をはじらう風情で、

「いやだわ」

つぶやいて、裸形をうづくまらせた。

「先客があるとは知らなかったわ」

女たらしは、黙って薄ら笑っている。

鞭のダブル・プレイ

「ロベール、あたしのおっぱいを鞭打ってよう！ 早くう！」

せつなげにマリは言った。

「よしよし、おまえたちは、おたがいで責め合いつことをしな。マリは、せっかく柱に縛られているのだから、先に責められるんだな。マダム！」

夫人の臀を蹴って、

「さあ、マリ嬢のおっぱいを存分に打て！」

差し出す鞭を手にとって、ロバン夫人は紅潮した顔で、マリの手前数尺まで歩み寄り、

「いい？ 遠慮なく打つわよ！」

「ロベールの命令だから仕方ないわ——ど

うぞ、お願いするわ」

かしやくなく夫人は、マリの若い乳房をびしんびしんと打ちしいたげていった。

「おおッ、痛ッ——ううう……おお——！」

たるみのない、憎らしいほど若さのあふれたみずみずしい乳房を、思うさまに虐げぬく快味に、徐々に夫人は酔って来ていた。

「なかなか猛烈じゃないか」

クフフ……椅子にすわって、ロベールは笑う。その横で夫人の娘は、ただもう幼い瞳をみはって、じっとすくみ上がっていた。

両の乳房がむざんに血アザだらけになったところで、

「よし、それまで」

と、ロベールの声がかかった。

「マリ、今度はおまえが責める番だ」

椅子をたって行って、マリの縛めを彼がほどこいてやると、マリは、鞭を受け取ったものの、乳房の激痛にたえがたく、くずおれるようにうずくまってしまった。あ……！と絶え入るようなうめきをもらす苦悶の姿を見下ろして、ロバン夫人が、

「だらしないのね、このお嬢さん」

そのことばを聞くと、マリは、よろよろと立ち上がって鞭を振りかぶり、

「マダム、さあ臀を向けてお這い！」

「縛らないのか？」

「いいえ、ロベール、手足は自由にさしておくわ。ただし、何にもつかまることもできないのよ。——マダム、おはいったら！」

「こうでしょう」

じゅうたんの上に犬のようによつんばいになってロバン夫人は、臀部を高くつきだした。かすかな羞恥の色が、そのあられもない姿態ににじみ出た。じゅうたんをむしり取るようにしっかりとつかんでいた。その指にルビーの指輪がきらめいている。彼女が身につけているものは、その高価な指輪と、黒い靴だけである。

「マダム、覚悟おし！」

焼けるようにうずく乳房をそのままに、マリは、鞭を振り下ろした。しゅっと空気をひき裂いて、白い豊臀へ、びしーと鞭は炸裂した。

「ううう！」

途端、わあーとまた、夫人の娘が火のついたように泣きだして、

「ママン……」

駆け寄って来て、母親の白い裸の腰にしがみついて、

「こわい……こわい！」

「……ママンはね、ルッチイ、いけないことをしたから、お臀を打たれるのよ。折檻がすんだら、すぐに帰るからね。さ、おとなしく隣の部屋で待っていて」

ロバン夫人は娘にそう言いきかすと、
「お願いだわ、ロベール」

この子をどうかほかの室に連れてって、と頼んだ。クフフ、ロベールは含み笑いをしながら、「さあおいで」と可愛いルッチイの小さな手をひっぱって隣室へ行った。ロベールが戻って来るまで、マリは、夫人の臀をびしびしと手のひらで打ちしばたいていた。

「魅力的だわ、あなたのお臀——」

マリは素早くキスをした。

「鞭打ちをつづけな」

ドア口からロベールがアゴをしゃくると、マリは鞭を振りかぶり、

「マダム、もっとお臀を突きだして！」

しゅっと鋭い気流を生んで、長細い鞭は、空気を二つに割り、前よりも苛烈に艶婦の豊臀へ炸裂していた。

キルクの栓をつめて

黒塗りの古風なセダンが、灯を消したまま

玄関脇のカー・ポートの中へしずかに滑り込んで来たのを、アリタリバ夫人は、浴室の窓から眺めた。地獄の使者が来た……と彼女は観念した。半月余り、久しく訪れることのなかった残酷な年下の情人を、よろこんで迎える気持ちは、みじんもない。

(このお臀にまた残酷な鞭打ちが……)

彼女は、いとおしむように、美しい白臀をなぜまわして、裸の肌にじかに藤色のガウンをまとうと、いそいで浴室を出て行った。

中庭に面した入り口に灯がともる。

「ロベール、いらっしやい……」

湯上がりのガウン姿ですらりとたたずんで、エレガントな美婦人は言った。その声は弱々しく悲しげで、その知的な美しい顔には、微笑すらなかった。嫌悪の情をどう隠すかにただ骨折っているだけでしかなかった。

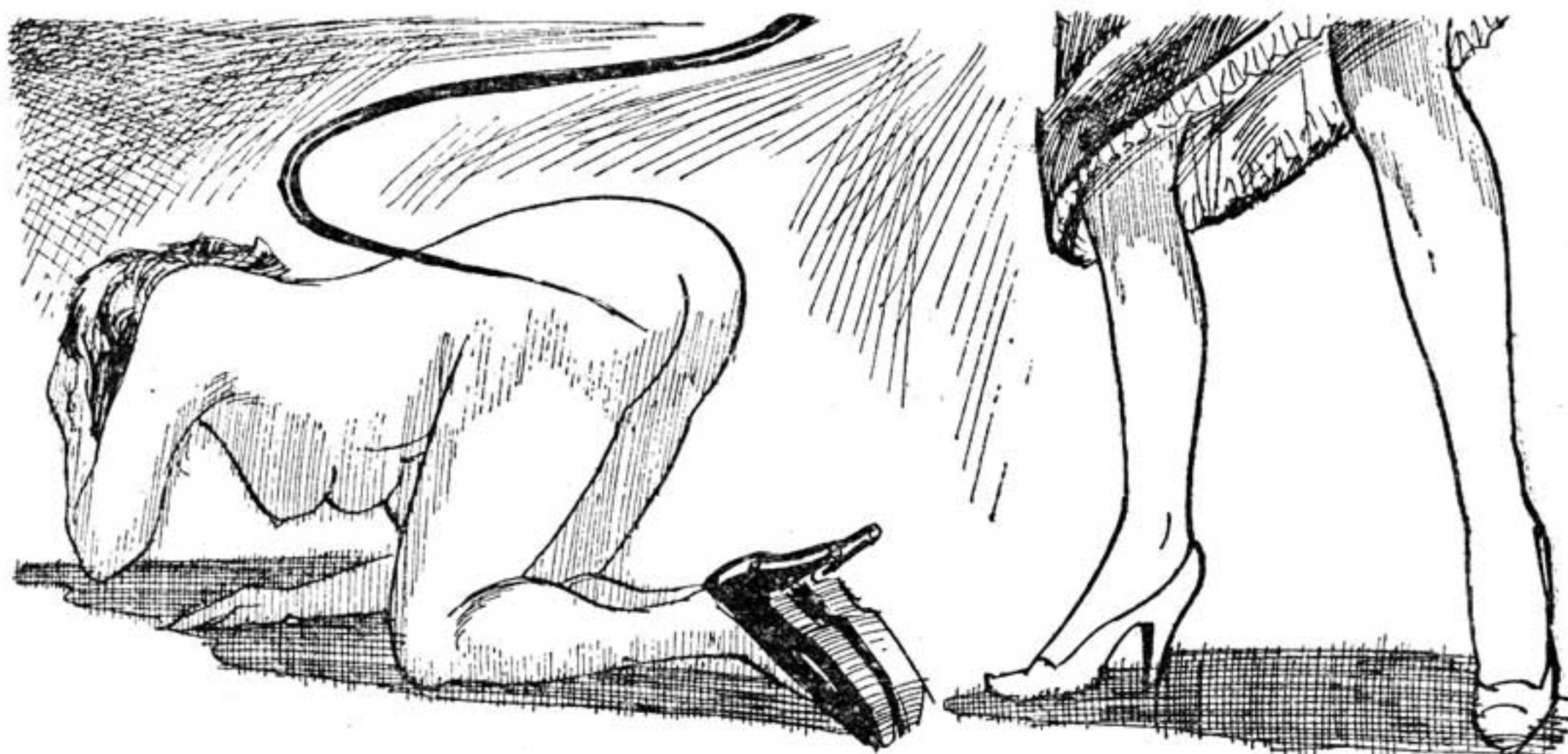
常に変わらぬその夫人の態度は、ロベール青年の美貌の自負をおびやかす、心をいらだたせ、また寂しくもさせた。

(ちきしょう)

と、彼は胸の底で舌打ちした。

「愛してるわ、どんなにでもいじめて！」

マリばかりでない、自分のモノになった女は、どんな女でもすべて、そういう可愛いこ



とばを吐くの、この恩師の美しい未亡人ばかりは、心にも肉体にも、目に見えないヨロイを着ているようなのだ。年月をかけてどんなに加虐しても、夫人の肉体にはついに、マゾの発芽はないのかも知れない……と、ロベールは、いつもながらいらだたしきかられた。そうして、その裏側では、ひどく寂しい思いにつきまつわられていた。

夫人の居間のソファで彼は、例の含み笑いももらすことなく、複雑な表情をして、夫人の臀部を眺めていた。

小奇麗な室の一隅のマントルピースの前に立って、夫人は藤色のガウンの裾を背中までめくり上げ、白桃のような美しい臀をすっかりむきだしにして展覧さしている。この前のときの鞭痕が、わずかに薄い青じみになって残っていた。

ソファの横のテーブルの引き出しから、ロベールは、長い指で浣腸器を探り取った。

トイレのドアの前で、ロベールは、夫人にガウンを脱がさせ、素裸にさして、便器にまたがらせた。

夫人は、かすかに嗚咽しながら、みずから両手で臀部を押しひろげる。なめらかな白い膝が小ささみにふるえていた。

「うううー はずして！」

キルクの栓がつめられたのだ。

「うううー！ く、くるしい——！」

もだえる細腰を、片手でしっかり押えつけ、

「愛してる」と言いな！」

碧眼を光らせて、ロベールは言った。

夫人はお腹が苦しくてたまらず、

「愛してるわ……栓をはずして——！」

「もう一度言いな！」

「ううっ！ くるしいっ！……あ、愛——」

気絶しそうな様子なので、ことば半ばに、ロベールはキルク栓を抜いてやった。解放感と同時に、はなはだしい羞恥が、アリタリバ夫人を見舞う。

「ああ、もう死んだほうがましだわ」

涙がおびただしく、美しい頬をつたいだした。泣きじゃくりながら、両手で配水管を握りしめ、強い平手打ちを片臀に受けるのである。

ビデを使っている白裸のうしろ姿を眺めながらロベールは、胸底に寂しいものがまつわりついていて、やりきれなかった。

この夫人ばかりはどうにもならない、と思



うのである。

「愛してるわ、どんなにもいじめて！」

マリのように真実の表白を、彼女の唇から聞かれないのが、どうにもいらだたしいような寂しいような気持ちで、やりきれない。マゾの芽ばえはついにないものかと思う。

いらだたしさが増して来て、

「来い」

彼は怒鳴った。

「早く来るんだ！」

泣き濡れた顔のまま、アリタリバ夫人は、小走りにそばに來ると、また、にわかにしゃくりながら、彼の足もとに四つんばいに身をはわせた。

女のヨロイ

いつも行なわれるロウソク挟みを観念して夫人は、四つんばいになったのだが、

「立ちな！」

その臀をロベールは靴の先で蹴った。

「ひー……」

悲鳴をあげてぶざまに突っ伏した女体が、よろよろと立ち上がると、

「書斎へ行きな」

ロベールは、びし！ と臀に一鞭くれた。

「ノン……書斎は使わないで——」

愛しい亡夫の思い出に満ちている書斎で臀を責め虐げられるのは、考えただけでも夫人にはたえがたいことであつた。

「行け！」

すさまじく鞭が炸裂した。

「ひーっ……ううう！」

エビのように背中を折り曲げて夫人は、激痛にあえいだが、それでもその場を動かさずに、

「ノン……書斎はいや——ううう」

一種妖しい微笑が、女たらしの口もとに浮かんだ。

彼にとっては恩師であり、同時に、夫人にとっては最愛の夫であつた故アリタリバ氏の面影を、なるほど最も思い出させる場所は、生前愛用した書斎がいちばんであろう。夫人がかれをきらうのは、一つは亡夫の面影が胸を去らないからであらう。思い出を大切に胸に秘めているのだ。——だから、わざとロベールは、書斎で虐げてやる氣になつた。

美しい未亡人がたつたひとつ守りとおしている思い出を、彼は踏みじり、彼女の胸から取り去りたいのだ。そうしたら、身も心も夫人は、自分のサディズムに同化してくれるよ



うな氣が、彼はするのだった。目に見えない夫人のヨロイは、じつに亡夫への追憶であつたことを、ロベールは、いまあらためてはっきりと認識し直した。

口もとに浮かんだ一種妖しい微笑は、波紋のように顔中にひろがり、

「世話をやかせるで」

白いからだをうしろから羽がい締めにして、自分の腹の上に抱え上げて運びだした。

長いしなやかな脚を夫人はバタつかせ、

「ノン、ノン、かんにんしてようっ——」

「えい、じたばたするな」

ロベールは乳首をつねり上げた。

「痛ッ——乳首がもげるわ！」

夫人は叫んで、抵抗を弱めた。

むりやりに、力ずくで書斎の中へ運び込まれ、ドアにカギをかけられてしまうと、夫人は、わあっとばかり泣きくずれてしまった。悲しくて悲しくてたまらないふうに。

書棚の書物の並びも、机上のペン皿も、ノート類もアリタリバ教授が生前のときのままに置かれていて、窓のカーテンさえも、そのままとどめられているのだった。ここには教授がまだ生きていたような印象があつた。ロベールが思わずたじろぐほど、故恩師のなま

なましい名残りが満ちていた。

恩師の警咳にふれるようなこの雰囲気の中で、その残された美しい未亡人を責めしいたげることの快味は、彼の嫉妬が裏返しになったものだった。

「憎い女だ」

妖しく光る目で、ロベールは、夫人の裸の脚に鎖を巻きつけながら、

「このいいからだは、いつまでも教授との甘い記憶でいっぱいなのだな」

はげしく夫人は泣くばかりだ。

「クフフ……泣けるだけ泣くがいい」

両脚に鎖を縛りつけると、その両端を岩乗なイギリス机の脚と、テーブルの脚とに、それぞれまわして、ぎりぎりひきしぼった。股が裂けるような痛みが、白い四肢を襲い、夫人のからだは、うつ伏せに大の字の形になった。

そうさしておいてロベールは、そのむざんな肢体のふくよかな腹の下に、厚い大きな皮表紙の書物を三冊積んで当てがったのだ。臀部が、高く浮き上がった。

すでに、二筋の鞭の血アザが描かれているその臀部へ、本格的なすさまじい鞭打ちが加えられた。

「ひーっ……ううう……ひーっ……うう……ゆるして……ひーっ！」

しゅっ、しゅっ、ぶきみに鞭はうなり、たてつづけに白い美しい豊丘に炸裂した。びしん！ びしん！ と皮膚を打ち裂くように苛烈に！

股を左右にいっぱいひらいて縛られ、じゅうたんを両手十本の爪でめちやくちやに掻きむしって苦悶する痛ましい白裸のさまを、壁で、亡夫の遺影が見おろしている。

亡夫の写真の顔が真上にあることが、夫人にとっては、鞭の苦痛にも増した心の苦痛であつた。

「ああ——痛いッ——」

肌が裂け、こまかい血しぶきが飛び散りだした。背中まで、点々と赤い血しぶきがかかる。しゅっ、しゅっ、しゅっ、長い皮鞭はうなりをひいて旋回し、責めに責めるのだった。夫人の双臀はむごたらしく血まみれになっていった。

「かんにんしてよ」

気絶寸前の弱々しい声を夫人はもらした。

縛られて夜明かし

非情にもロベールが、鞭打ちのあと、さら

 外国異色ホース写真
 ハイヒール
 コルセット
 アップボーズ
 100ポーズ
 写真入・カタログ
 〒100 東京北區
 野川7-40ベスト

にロウソク挟みの責めを加えるうちに、とうとうアリタリバ夫人は、ふいにぐったりとなつてロウソクを倒した。血まみれの臀を焼いて、太めの色ロウソクは、じゅうたんの上に落ち、それでロベールは、夫人が仮死状態におちいったのを知った。両足をひき裂くように二本の鎖でひきしぼった格好のまま、ロウソク挟みをさせて、熱ロウをしたたらせていたのだ。

「とうとうまいっちゃったな」

彼は二、三度、夫人の動かない頭を小突いてみたりしたが、やがて思い直したふうで、書齋を出て行った。

台所に行って、バケツに水を満たしながら、戸棚の中のブドウ酒が目につくと、ロベールは、それをラップ飲みに一息に飲みほし、満水になったバケツを下げて書齋へ戻った。

「おお……」

バケツになみなみの水をいちどに浴びせられて、夫人は正氣づいた。

たちまち凍えるような冷たさに身ぶるいし、齒を鳴らした。

「マダム」

ロベールは、なんとはなし沈んだような声音で、言った。

「その格好のまま夜明かしをしな」

鎖で手も縛りだすと、

「あんまりだわ、ロベール」

夫人は悲痛な声をふりしぼった。

「ロベール！ ロベール！ 鎖をほどいて！ ほどいて行ってよう！」

ロベールはやはり沈んだような声音で、

「その哀れな姿を、一晩中、亡夫の写真の前にさらしているな」

彼は、水びたしのじゅうたんをまたいでドア口へ向かい、廊下に出て、外からカギをかけた。

そうして、故恩師の書齋と、その中でいっぱいひびいている悲痛な泣き声とに、背を向けた。

古めかしいシャンソン「パリ祭」を口ずさみながら、モンマルトルの近くのわが家に向



けて、電光燦然と輝く夜の街衢を、ロベールは、片手ハンドルで車を走らせていた。

ブドウ酒ひと瓶の酔いが出ている。

なにかしら沈んだ気分が、そのブドウ酒の酔いで幾らかはれて来るようだった。しかし、それでも、胸の底には、やりきれない気分がはしっていた。

（一度でもいい、夫人の心からの……）

ロベールは思う。

（被虐願望のことばが聞きたい……）

やがて、とある町角で、黒塗りのセダンが、十輪トラックと正面衝突をした。

セダンのほうが交通ルールを無視していたのだ。

頭蓋を割られて、まっかな血みどろの顔になり、彼は、ほとんど即死同然だったが、束の間、息がのこっている彼の耳に聞こえたのは、

「愛してるわ、どんなにでもいじめて！」

そのアリタリバ夫人の声だった。

遠い風の音にも似たその幻聴を耳底に鳴らして、女たらしは、血みどろの顔を、がっくりとハンドルからずり落としていた。

快楽用の少女たち

——「痛ましきダニエラより」——

柏 正 彦 田 上 恵 子・え

焼けたスタンプ

ポーランドのコングレッシェに生まれたダニエラは、ユダヤ娘だった。当時、ポーランドは、ナチの侵攻下であり、ダニエラも、生まれてはじめての修学旅行の途中で、級友といっしょに捕われの身となってしまった。当時ダニエラは、まだ若い、夢多き十四歳の女学生であった。

ダニエラは、友人とともに、ユダヤ人捕虜収容所へつれていかれ、衣服をはがされてしまった。

収容所には、すでに、捕えられたユダヤの少女がたくさんいたし、彼

女は、さっそく、とり調べを受けねばならなかった。

書記のひとりが、近づいてくる少女たちの乳房の間に、かたはしから連続番号を青く入れ墨し、もうひとりの書記がすばやく、その番号の上に、まっかに焼けた電気スタンプを押して焼きつけた。

けれども、おそろしさのあまり感覚を失っている彼女たちの肉体は、通し





番号をきさま

れたり、電気ス

ランプで野戦慰安

婦と焼きつけられても、

あまり感じなかった。そのよう

な虐待には、ユダヤ人区にいるときから、

ならされていたからだった。

しかも、最後のテーブルのところに、女看

守長が待っていて、ここで、労働区と快楽区

のどちらへ送られるかが、この女看守長によ

って、決断されるのだ。

ダニエラは、最後のテーブルに立ち止まっ

た。

女看守長は、少女たちの中でもとくに美し

いダニエラの、しなやかな肢体から目をはな

さなかった。

「それは何、見せなさい」

「写真です——家族の」

「そんなクソみたいなものを、捨てちまえ！」

ダニエラは、写真のはいったロケットをに

ぎりしめながらうつむいていた。あまりの興

奮に、裸であることも忘れて、その場に立ち

すくんでしまった。

すると、皮のムチをにぎった女看守長の手

が突然のびて、ダニエラの裸体をしたたか打ちのめした。

残忍な笑いを唇に浮かべながら、彼女は、ダニエラを責めた。ダニエラの美しい裸体にはいく筋もの赤い線ができた。

「おまえ、あしたになれば、そんなクソみたいなものを、自分から捨ててしまおうよ！ おまえは労働区行きだよ」

そのことばは、死の宣告のようなものだった。労働区へやられたものは、ふたたび生きて帰れるかどうか——。

乳房の間のスタンプのあとが、赤くはれあがっていたが、そんなことより、今、あのにくらしい看守長に言い渡されたことばが、ムチ打たれたあとの黒いミミズばれの、ヒリヒリといったむのといっしょに、全身を苦痛に追い込んだ。

彼女の背中の肉は、ハガネのバネの間にはさまれたように、しめつけられた。

みせしめの打擲

その日、ダニエラたちは労働区へ送られた。なんのためにこんな荒野へつれて来られたの

か、最初はだれも気づかなかった。だが、みんなは悲鳴でハッとしてわれにかえった。この収容所の監視員のヘンチェルが、いま送られて来たばかりのハンナの上におおいかぶさるように立ちはだかり、シャベルの柄でハンナをあたりかまわず打ちのめしている。なんの考えもなく、ただ打つことだけが目的のように、シャベルをふりおろしていた。

ハンナは線路の上にたおれ、ヘンチェルは、手といわず、頭といわず、手あたりしだいにたたきつけた。ハンナは、線路の上をのたうちまわり、砂をかみ、髪の毛をかきむしった。舌は唇から出、目はとび出した。

だが、彼女の上にまたがったヘンチェルは少しも怒りの色を見せず、なにかの作業でもしているように、その動作をつづけた。

「わたしを死なせてください！」

ハンナは、息もたえだえにさげんだ。

しかし、ヘンチェルは、彼女を死なせはしなかった。ハンナが死ぬまでには、まだ

まだ何回も悲鳴をあげなければならぬことをよく心得ていた。そして、死の直前まで彼女を打ちのめすのだ。

こうして、新参の少女たちに、恐怖

を与えることが、ヘンチェルの仕事だった。こうしておく、新参者たちは、彼のいうことをよく聞くことを知っていた。新参者があらわれるたびに、彼は、自信をもってそれを取り返した。

そして、ヘンチェルは、新参の少女たちに命令をくだした。

新参の一人は、線路の間にはいり、果てしないほど長い線路にそって一列にならんだ。

それから、ふたたびダニエラの一行は、医師の検査を受けた。

医師は、全裸で一列に並んだひとりひとり丹念に調べ、

ダニエラのところまでくると、

立ちどまって、ムチのあとをしらべた。





「こんな美人を石切り場へやるとは」
と医師にいわれた瞬間から、ダニエラは快
楽区の所屬となった。そして、快楽区に送ら
れるための準備を命じられ、収容所の病室へ
つれて行かれた。

実験用の生体として

ダニエラは、鉄鋼ばりの檻の中へ入れられ、
不妊の手術を受けた。野戦のドイツ兵士の慰
安婦として戦場に送られるために、妊娠でき
なくされたのだ。

むりやり、からだを台の上に乗せられ、皮
ひもで、身動きできないほど、くくりつけら
れ、その台に立っている二本の鉄棒に、両
ひさを、ぶさな格好で、くくりつけられ
てしまった。

背骨の下部がえぐりとられるような

苦痛がつづいた。その痛みの間隔がじょじょ
に長くなっていった。

彼女が、痛みの静まるのを感じたのは、そ
の日もあまりおそくならないうちだった。下
腹部をのたうちまわっていたはげしい火
が、いくぶんやわらいできたのだ。し

かし、局部をつんざくようなはげし

い炎は、まだからだの中をかけま

わり、あちこちの骨をこづき

まわしていた。

このようにして、少女

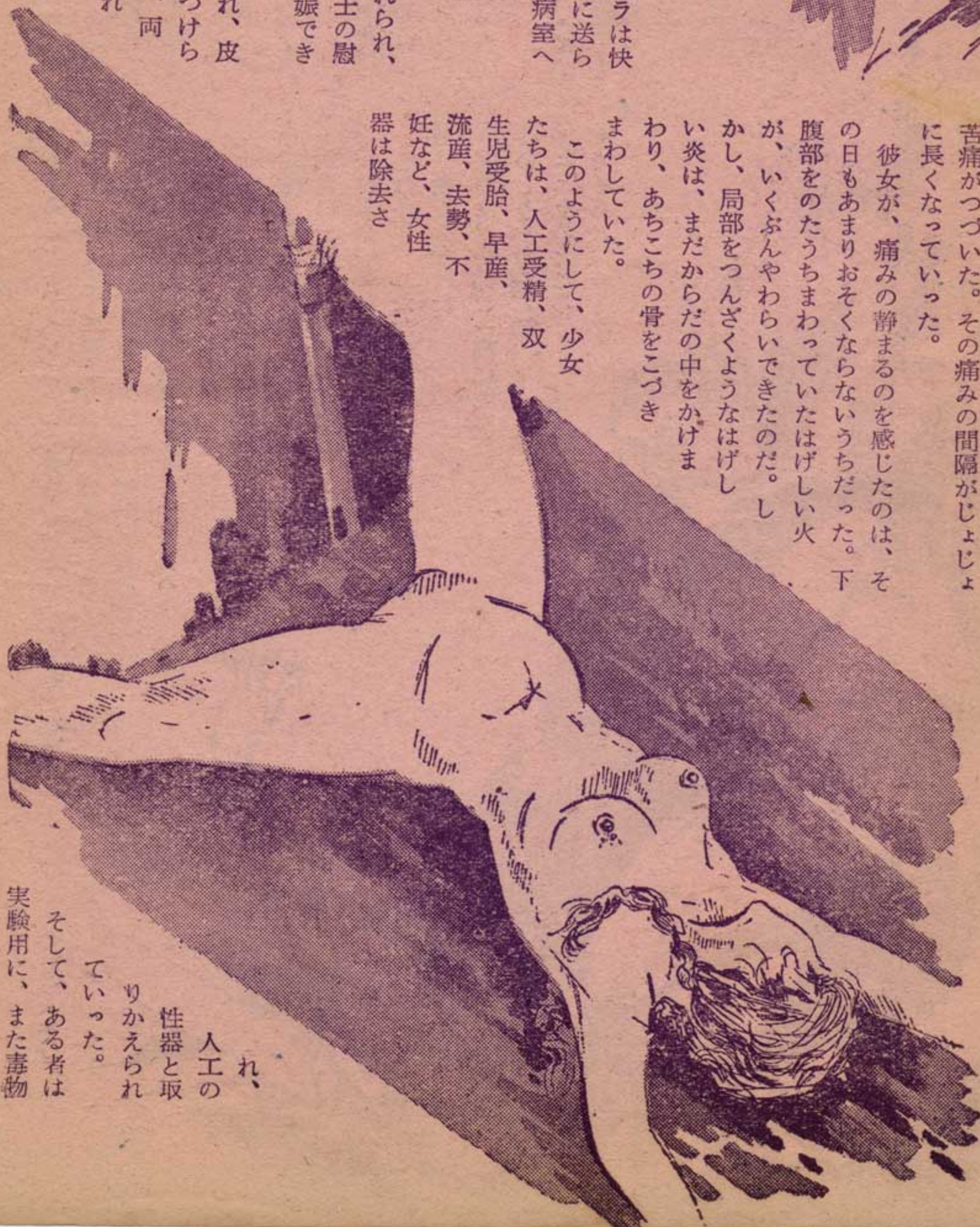
たちは、人工受精、双

生児受胎、早産、

流産、去勢、不

妊など、女性

器は除去さ



れ、
人工の
性器と取
りかえられ
ていった。

そして、ある者は
実験用に、また毒物

の実験資料や外科実験用に
された。

ダニエラは翌日、快

楽区へ送られた。こ

こでは、重労働

はなかった。



ムチ打
たれる
こともな
かった。こ
この監督は、
エリザという女
の人で、彼女は、
少女たちのからだ
がきれいで清潔であるか
を調べる役だった。そし
て、慰安の時間に楽しみに
くるドイツ兵全部に、少女た
ちが満足を与えているかどうか
を調べるのだった。もし、エリザ
がダメと決めれば、その少女はすぐ
にトラックに乗せられ、火葬場行

き”だった。
ダニエラは恐怖にさらされな
がら、なにもわからずに意志の
ない行為をした。多くの少女もそ
うであった。

快楽区の女監督

慰安の時間が終わって、ドイツ兵が帰って
いくと、エリザは、さかりのついた犬のよう
にうろつきまわった。やがて、エリザは、一
番あとまでドイツ兵と関係をしていた少女を
つかまえて自分の部屋へつれていき、その上
にのしかかって、からだじゅうを嗅ぎまわり、
いまその少女からはなれたばかりの男のお
いを、鼻いっぱい吸いこむのだった。

このとき、エリザの欲望を満足させなかつ
たら、その少女は、からだじゅうをムチ打た
れなければならなかった。そのムチは、エリ
ザを快楽の頂点にもっていくのだった。

そのときのエリザの顔は、あやしくゆがみ、
うすい唇の間からは、まばらな歯がのぞいた。
そして、餌食をのみこむときの大蛇のよう
な目で、少女を動けなくし、悪魔のような静
けさで、こういった。

「きよめてやるよ、おまえのからだを……み

んなわたしのもものだ……すっかりきよめてやる……」

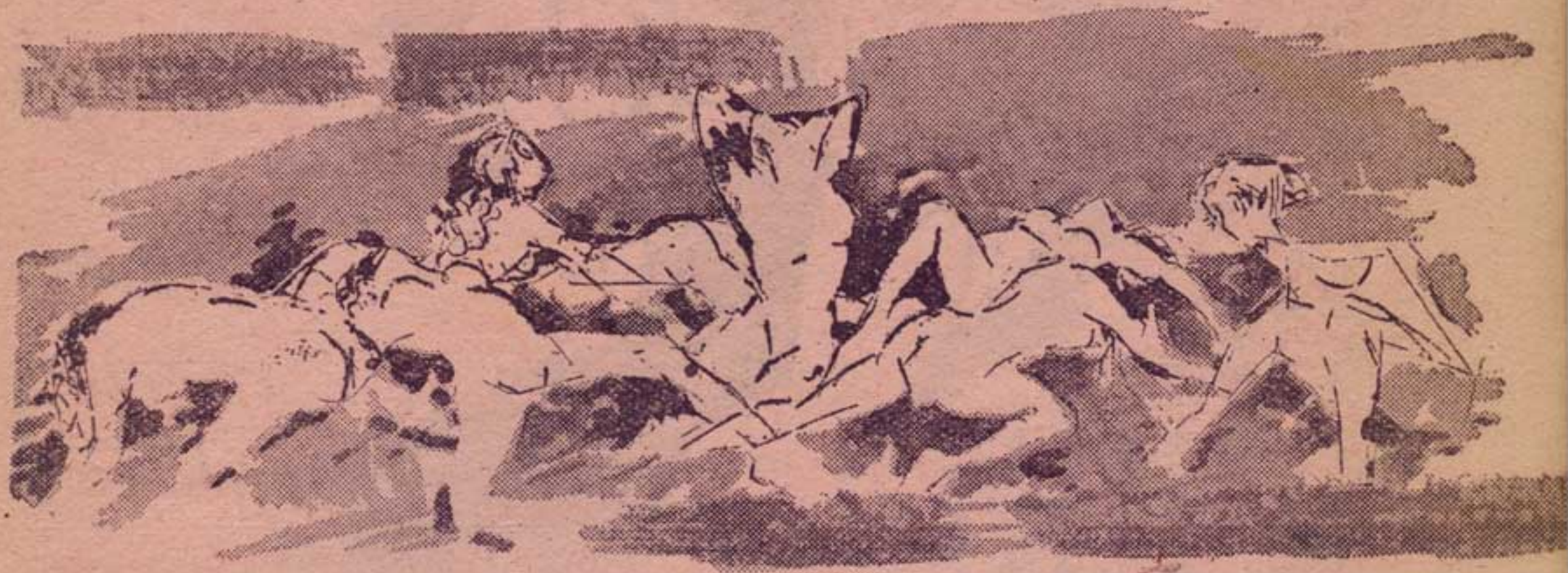
エリザの腕は、少女のからだにまきつき、その手は、相手の全身をなでまわすのだった。

エリザは、いまや快樂区の慰安婦のうゑに君臨する全能の領主だった。彼女の顔に残っているいくつものきずあとは、その年齢をわからなくしていた。体格は細型で背が高く、いつもからだにピタリした乗馬ズボンを騎士ふうにはき、それを長靴のなかへ押し込んでいた。目は小さい節穴のようで、唇はぎゅっと結ばれ、浅黒くて長いきずだらけの顔は、しじゅう、飽くことのない性的欲望と、はげしい嫉妬にもえあがっていた。

ケダモノの獲物

ダニエラが来て、二日目の「快樂の間」がやってきた。

少女たちは、足を立ててベッドにすわっていた。二列にならんだ五十のベッドには、五十人の少女がお互いに背を向けてすわっている。が、彼女たちは笑うことを、監視人のエリザに命令させられて



いた。笑わないものはすぐ処刑されるのだった。バケツ一ぱいの快樂を味わいにくるドイツ兵のため――。

突然、ドアがパタンと音をたてて開いた。と同時に、バラックじゅうはドイツ兵たちでいっぱいになった。少女たちは、いっせいに恐怖にさらされてしまった。

男たちは、だれかれかまわず、少女をつかまえると、ベッドにつれていった。ひとり、ふたり、三人、次々にベッドは満員になった。ダニエラのベッドでも、ひとりのドイツ兵が戸だなに上着をつるした。

隣のベッドでは少女が、ドイツ兵の顔をのぞきこんでいた。彼女の生命は、彼の手中にあるのだ。彼女はすべて彼のものなのだ。そして彼は、獲物をむさぼり、のみこみ、満足して鼻を鳴らしながら行ってしまうだろう。

はじめて男に接する少女をあわれみながらダニエラは、自分も身ぶるいするのだった。ダニエラの耳はつまってしまった。みだらなドイツ人の叫び声が、人食い人種の歓声のように、あちこちから聞こえてくる。彼女は自分の髪の毛が引っぱられているのに気づいた。ミイラのような男の顔が彼女の上にのしかかり、手でなでまわし、顔をひくめている。

ダニエラは、檻の中で寝ていたときのようにひざをぶざまにひろげ、手足は全然動かないようにしぼりつけられて横たわっている。となりのベッドから奇妙なうなり声が発せられてくる。もうのがれることは不可能だ。

男のくさいにおい。口は大きな歯をけものようにむき出して、パツクリと開いている。

荒い息づかいは、彼女の顔じゅうをなでまわす。指がカニのハサミのようにからだにくいこんでくる。

もし、このドイツ兵が、あの女はダメだと報告したら、彼女たちは処刑されることになっていたのだ。だから、彼女たちは、男をはいのけることはできなかった。

向かいの少女は、いっしょうけんめいドイツ兵に笑いをおくっていた。

ダニエラは悲鳴をあげたかった。彼女はがまんがならず、頭を左右へふった。口を大きくあけて悲鳴の出かかるのをがまんした。処

刑される恐怖が、コルクのようにノドにふたをした。痛みが下腹をはしった。近くのベッドからドイツ兵がおきあがり、上着を着て出かけようとしている。

少女の裸の白い腕が、男にしがみついたが、男は少女をつきとばし、つばをかけて歩いていってしまった。少女はぼんやりと白い腕をたれて、べしやんとその場にすわった。

やがて、エリザが点検にやってきた。

そして、少女たちを集め、ひさをまげるように命令した。ひさをまげて、両手をうなじにまわし、おしりが地面につかないようにうずくまるのだった。

この検査が終わるころは、全身が痛みのかたまりとなって、ちょっとさわってもたえられないほどひどい痛さであった。歩くどころか、足をのばすことさえもできないほどだった。

彼女らは、たがいに助け合って、ベッドへ行くのだった。そして、またやってくる兵士たちのためのおつとめを果たすため

に――。

監視役のエリザは、美しい少女がこのうえもなぐ憎らしかった。だから、そういう





少女を処刑することを楽しみにしていた。とうとうダニエラも処刑の一団に加えられてしまった。

棍棒^{こんぼう}の処刑

処刑台が十、だれもない処刑場にならんでいた。

兵士に快感を味わわせなかったという理由で、ダニエラたちは、ここ

へ連れてこられたのだった。

監視役のエリザは、きょうは、よそゆきの長靴の先をピカピカにみがき、右靴の横にはムチがたれさがっていた。やがて、女看守たちがなわを持って現われ、少女をひとりひとり処刑台に縛りつけた。処刑場は、見物のドイツ兵によって囲まれていった。

こん棒がいっせいに打ちおろされ、少女たちの肉体にくいこんだ。

打ちおろす看守、見物の兵士たちは、歓喜の声を発し、裸体をいためつけられる少女たちの金切り声とまじって、空にひびいた。

ドイツ兵たちは、処刑が終わると、満足そうに帰っていった。少女たちはトラックに投げあげられると、処刑場をはなれ、快楽区に帰ってきた。正規の刑ではなかったのだった。

ダニエラは、もうがまんすることができなかった。黒い毛布が亡霊のように見え、突然ドアがあき、バラックがドイツ人でいっぱいになるような気がする。

青酸カリを買ってさえいたら……。

もうこれ以上、わたしはこの残虐と破廉恥に耐えきれない……。ダニエラは、放心し、霧の夜道にさまよい出て、見張り塔の監視員の一撃にうたれてしまったのだった。



△ファンタジック・エッセイ△

鼻の穴がピコピコうごく

宇佐美 清

レンコンの穴

マツタケが、ある男性器官に似ていることは、上品なお嬢さんでも知っています。口をおさえてホホと笑ったりするんでもの、知らないとは言わせません。

ああして口をおさえてホホとやるのは、まるでマツタケが口の中にはいつてくるのを防ごうとでもするようです。でも、いまだきは、そんな貫一お宮時代のカルタ会にでも出てきそうな、つつしみぶかそうなお嬢さんなんて、めったにお目にかかれません。いいかげんにキワどい冗談をいって、「あらイヤーだ」

マツタケが三本ぐらいもはいりそうな口を、キュッとゆがめてみせるぐらいのところで。

私はのっけから、なぜマツタケなどを話しましたか。

造化の神さまというのは、いろいろおもしろい工夫を凝らしたと見え、この地上には、似たようなかたちのものが、いろいろとあります。マツタケなど、その傑作の一つですが、まだほかにもあります。人間の鼻の穴と、レンコンの穴などもそうです。

鼻の穴は、ご存知のように、呼吸をしたり、もののおいをかいだりする、人間にとってにはなかなか大切な器官です。それになぞらえてレンコンの穴をつくり、泥の中

ふかく埋めたというのは、「人間どもよ。おまえたちは、いい気になっていると、いつかは、レンコンのように、泥の中ふかくその鼻を埋めるときがくるぞよ」

という神のいましめかもしれません。人間の鼻については、いろんな残酷な物語があります。

芥川竜之介の『鼻』という小説。谷崎潤一郎の『武州公秘話』などです。芥川の『鼻』は、なんとなくユーモラスな中にも、読んでいるとムズがゆくようになってくるような官能的な刺激にみちた短編ですし、谷崎の『武州公』にいたっては、忍びこんできた曲者^{くせもの}に、殿様がうしろから、からだを



かかえこまれ、身動きもできなくなったところを、鋭い刃物でゾックリと鼻をそがれるあたり、サドとマゾの交錯した、気の遠くなるような戦慄感があります。それ以来、殿様は、鼻なしのみにくい顔を、家来たちに見せたくないため、いつも大きなマスク

をしている。しかし、ものを言う声が、フガフガ声です。

また、『十八史略』の中に、楚王が、愛妾の鼻をそぎおとす話があります。楚王には、麤袖というお妃があるが、このお妃は、とてもヤキモチやきです。王があたり

しいお妾を後宮に入れたとき、なんとかしてそのお妾を失脚させたいと考えたあげく、一策をあんじて、お妾につぎのようなことを吹きこみます。

「あんたに教えとくけど、王さまは鼻から出る息がとてもキライだから、王さまのお相手をするときは、いつも鼻をツマンでなきゃだめですよ」

なんにも知らないお妾は、それらしい、王さまのお相手をするときは、いつも鼻をつまんでいる。

王さまはそれを妾に思っ、当人にはなく、お妃にたずねてみた。

「今度召しかかえたあの女のことだがな。おれのそばにいくと、いつも鼻をおさえているが、どういうわけだろう」

お妃はここぞとばかり、

「あの女は、王さまのからだはヘンなおいがすると言っているようですから、そのせいでしょう」

「おのれ、あいつ、そんなことを言っているか？」

というので、抱えたばかりの側妾の鼻を、そぎおとしてしまうという、残酷な話なの

です。

恥部の見える角度

私が、女性の鼻、とくにその穴にとくべつな関心をもつようになったのは、次のような機会からでした。

それは、テレビがいまのように普及していなかったことです。そのころから、私のうちには、テレビがあったのですが、ある晩、とくべつのプログラムがあるというので、近所の人たちが、十四、五人ばかり、私の家の八帖間におしかけてきました。ほとんど、おかみさんや娘たちです。

私は、テレビのすぐそばにすわって、調節係をひきうけます。そのうち、テレビの調子もさだまったので、私は、畳の上にゴロリと横になったまま、頬杖^{ほおづえ}で見はじめました。うすぐらいし（映像をハッキリさせるため電気を消してあったので）、自分の家なので、くつろいだ気持ちです。そうして寝そべった私のすぐうしろは、膝小僧^{ひざこぞう}がふれるくらいの近さで、彼女たちがすわっているのです。おもしろい場面があって、どっと笑いくずれるたびに、女たちの体臭

が、ムッと熱っぽく私をおそってくるのでした。それにそえられるように、私は寝そべったまま、そっと背後に首をまわして見たのです。

そのとき、私は奇妙な光景をみたのです。最前列にいる四、五人の女の鼻の穴が、笑ったり、感嘆したり、緊張に息をつめたりするたびに、ひらいたり、つぼまったり、いきもののようにピコピコ動いているのです。ひとつの画面にみいっていると、めいめいの呼吸のリズムも一致するとみえ、それはまるで申しあわせでもしたように、同じリズムで動いているのでした。下からのぞきこむ形になるので、それはハッキリわかるのです。

私は、まるで恥部をのぞきこんだように思い、ハッと視線を前にもどしましたが、またしばらくすると、彼女たちの鼻の穴をのぞきこみたい奇妙な誘惑にかられ、おもむろに背後に首をまわすのでした。そして彼女たちが、画面に熱中しているすきに乘じて、かなりたんねんに、それを観賞することができたのです。

レンコンの穴の形をした、その二つの黒

い穴に、私が異常な関心をもつようになったのは、それらしいことです。

世界中の空気を

女の鼻の穴の動きは、男のそれにくらべてデリケートな表情をもっています。私は、自由になるガール・フレンドのひとり、自分の部屋にひっぱりこんで首をしめてみたのですが、そのときのピコピコとした鼻の穴の動きが、とってもたまらない感じでした。

「いいかい。しめるぜ」

そう言うておいて、首に両手をまわす。

「ソーラ、いくよ」

ぐうっと力をこめる。女の顔が、だんだんあかぐろく怒張してくる。

「くっ」

と鼻の穴がひらいて、そこからケイレンの、みじかい息がもれる。それから、息を吸いこむにつれ、二つならんだレンコンの穴がせばまって、ぴったり、くつつく。どうせ咽喉^{のど}から下には空気はいかないのだから、それは呼吸のまねごとみたいな、ハカない発作にすぎない。その鼻の穴のくる

しまぎれの開閉を、私は、目をくつつけるようにして、ゆっくり観賞するのです。そして、断末魔に肛門がひらききるように、鼻の穴がっぱいふくらむと、外部のひかりにすけてみえる、うすもいもの鼻翼のうらや、鐘乳洞しょうにゅうどうの内部のように鼻毛の交错する奥のまっくら闇が、まるで私を吸いこみそうにパツクリと口をひらけているのです。

そんなふうにして、私が恍惚としてわれを忘れていくうちに、彼女のほうはせいっぱいのがまんがきたとみえ、
「うっ」

と、うめくなり、私の脇腹をつきとばしたので、私は、やっとわれにかえりました。「ほんとに、いい気でおもちゃになってたら、コロされちゃうわ。ほんとに」

彼女はプンプンです。

私はふだんでも、女の鼻の穴の表情をいろいろと注意して観察しているのですが、外国のある映画女優は、演技をするときに、鼻の穴をとてうまくつかっています。たとえば、恋しい男にやっこのことでめぐりあい、感激的な抱擁をかわそうとす

る瞬間、彼女の鼻の穴は、これ以上ひろげられようもないと思われるくらい、いっばいにひろげられていたのです。

女性の鼻の穴は、それが歓喜であれ、恐怖であれ、かなしみであれ、感情のクライマックスには、いっばいにひろげられるようです。

呼吸のたかまりにともなう、自然の現象なのです。

肉体的な快不快についても、同じことがいえます。

ワナワナとふるえる鼻の穴は、官能のクライマックスをしめすと同時に、苦痛の絶頂感をも表現します。だから、サディストが女に体刑を科し、その苦悶のありさまを観賞するばあいにも、鼻の穴が一つの重要なポイントとなります。

ひたいにじみ出すあぶら汗。へばりつく乱れた髪。あえぐくちびる。そして、世界中の空気をいちどきに吸いこもうとでもするように、死にものぐるいにひらかれた鼻の穴、です。

その意味で、サルグツワを噛ませるばあいに、鼻の穴まで覆ってしまうのは、とて

も効果的なポイントを殺してしまうことになります。

もっとも、多くのサディストはそのことを知っていて、サルグツワを噛ました責めの絵など、ハの字によせられた苦悶の眉や、黒々としたレンコンのタテ穴が二つ、描いてあるようです。

最後に、その勇気のある人は、望遠鏡をもってストリップ劇場にゆき、最前列の踊り子が舞台の最前方まで出てきたところで、かぶりつきのところから望遠鏡をかまえて見上げてごらん下さい。とてもおもしろいですよ。

ノイローゼ 神経質 赤面
恐怖症 性格異常 欲求不
満 変態 将来に対する不
安 睡眠障害等に悩む方は
詳しくお知らせ下さい。ご
相談に応じます。

遙雲荘

相模原市橋本四九六
電話 〇三七(相模原)七―三三四
外来、電話は月水金に限る

△あるサディストの告白▽

私のいけにえになつた処女

竜丸寺 伸



雪の中に放り出す

新橋烏森の「H」——このアルサロの、私は宿直番人です。

私は、正直にいうと、小男のくせに、欲情は人一倍はげしく、そのうえ、サディズムの傾向があります。こんな私だから、四十五歳になる今でも、女房に二度も逃げられたのです。

もっとも、私自身も、このふたりの女房に對して、実に乱暴の限りを尽くしました。よく夜中に、女房の蒲団をまくって、叩き起すなり、柱に縛りつけてさんざん殴りつけたものです。

使ったものは、古道具屋から買ってきた乗馬用の鞭。

「あうーッ、あうーッ」

その時の女房の苦悶にゆがんだ蒼白な顔を、いまでも、まざまざと思い出します。

昼間、ちょっと魚屋と話し過ぎたといっは、それをタネに折檻したりもしました。

貴美という名まえで、まだ十九でしたが、おそろしく気の強い女で、私の嗜虐が悪癖だと知ると、とっとと実家に逃げ帰って、それっきり戻って来ませんでした。

二番目の女房は、年増としもちでしたから、少しは耐えてくれましたが、そうだ、雪の降っている晩、私は、

「おまえはまるで、お義理のような気持ちでオレに抱かれているじゃないか、わかってるんだ」

ときめつけますと、いきなりひきずり起こ

して、雨戸を蹴って、庭に荷物みたいにほうりだしたのです。

降り積もった雪の白さと、豊満な肉体にまとった長襦袢と緋色との妙なるコントラスト、すごい美しさでした。

私は、彼女をムリヤリ庭のカキの木に太い縄で縛りつけました。そうしておいて、れいの鞭を手にもって、さながら悪鬼の形相でピシッ、ピシッと力のつづく限り打ち据えたものです。

鞭は、襦袢のうえからしだいに肌に食い込んでいきました。彼女は、この世ならぬ地獄の責め苦に声も出ず、ただ身をよじらせていました。私のほうが息が切れてしまい、彼女は全然動かなくなりました。

失神したのです。私は、井戸端から水をくんできて、彼女の黒髪のうちからザンブリぶっかけました。息を吹きかえした彼女の目は、憎悪と恨みで凍りついていました。

のぞいた女の部屋

それっきり、第二の妻も帰ってきません。私は孤独になりました。パンパンや商売女は見えずにいるし、とうてい私を満足させてくれませんでした。

そして、今の商売、まるで女の花園の中でくらしているような、恵まれた環境であるのに、私の相手をしてくれるような女は、ひとりもいません。

その私が最近、松井妙子という、ここで一番年の若い女給に興味をもつようになりました。彼女は「二十歳」と自称していますが、私のみたところでは、恐らく十九歳ぐらいだと思えるほど、清純な娘です。

こんなところに働きにくるようなタイプには見えませんから、おそらく家庭のためなのでしょう。仲間によけまいと大人っぽくふるまっています、とにかく処女であることは、私の目にもハッキリとわかりました。

私は、できる限りの好意を見せて、彼女に近づきました。彼女もまた、私の野心を知らないのです。

「おじさん、おじさん」

といって私にはなんでも打ち明けるようになりしました。

遅くなった夜など、気兼ねなく私の部屋で遊んで帰るときもあります。たしかに、妙子は、私の射程距離にはいっていたのです。

いつでしたか、私は、彼女が、従業員便所には行って行くのを見たことがあります。私

はあわてて、ものかげにじっと身を隠しました。

もちろん、戸はパタンとしめられました。が——シャーッと、かなり威勢のいい音が聞こえました。水洗便所ですから、よけい響きがよかったのでしょう。胸の動気を早めました。

ガサゴソと紙の音がして……それからしばらく、何をしているのか、彼女は出てきません。

やっと出てきた彼女が、スカートの裾を直して、かなり骨盤の広いむっちりした腰をふりふり行くのをやり過ごしておいて、私は、同じ便所にそっとはいって見ました。私の手はもちろん、隅に置かれた白い瀬戸の壺のフタをあけました。

彼女が手間どったわけがわかりました。目を射るような紅のじんだ綿のひとかけら。私はそれを鼻に近づけたとき、おかしいほどふるえて、ひどく興奮したものでした。

それから、こんなこともありました。更衣室でドレスに着換える妙子を、私が偶然見るチャンスがあったのです。

私は思わず、ゴクリとかたずをのみました。彼女は、もちろん私がのぞいているとは夢

にも知らないから、乳バンドをゆっくりとはずすと、私の目は、しゅんかん、瞳孔から飛び出したようになっていたに違いありません。大胆にも彼女は二つのゆたかな熟れた果実のような乳房をすっかりあらわにしているのはありませんか。少し薄暗い部屋でしたが、乳房だけが、別の生き物のように息づいてるのがはつきりと見えました。

乳首がほんのりと桜色。そして彼女は二つのなだらかな丘の間の谷間を、ゆっくりと丹念にタオルで拭うのです。

ふくよかなキメのこまかい肩に、濡れたような黒い髪がしっとり垂れて……彼女は、スリッパの裾をたくし上げて、ついに太腿を出しました。

じゅうぶんに脂肪がのっていて、いかにも弾力にとんでいます。

私は、太陽に射すくめられたように、瞬間、目がクラクラとしました。私は荒い息づかいが部屋の中の人たちに聞こえはしまいかと、心配だったくらいです。

ひつかかったエモノ

そんなことがあってから、二、三日しての夜のこと。

この夜も、彼女の帰りが最後になりました。

「寒いわね、きょうはシケで、ご指名がひとりもなくて……」

こういう彼女の声を聞きながら、私は、部屋のカギを、ガチャリと下ろしてしまいました。これでよし、そう思うと、私は急に下腹に力がいって、われながら頼もしいと思いました。

「妙子さん」

と、彼女の手をぎゅっと握りました。なんて柔らかな、ポチャポチャした手だろう。

「まあ、ナニをするの」

彼女がびっくりして振り離そうとした手を、私はますます強く握りしめました。しかも、その手をひっぱって、彼女のからだをぐいと近寄せながら、私は、さっと仮面をかなり捨てました。

「妙子さん、おや、ふるえてるね、男がひとりでいる部屋で、カギをかけられて、こわがったってしょうがないさ。往生際をよくしたほうがふさわしいぜ」

私が凄んで見せますと、彼女は初めて憎しみのこもった目で私を見つめました。が、その冷たく光る目の底に、すでに哀願の色がこ

もっています。私は、落ち着いて、自分にいきかせながら、タバコに火をつけました。

「おじさん、離してちょうだい。遅くなる」と、おとうさんに叱られるわ」

彼女もいまや必死です。

「さあ、そいつはちょっとできない相談だ。なにしろ、オレは、このチャンスを一日千秋の思いで待っていたんだからね」

私は、彼女の頭を抱えるようにすると、まだ幼い、ほこりっぽいにおいが黒髪から漂いました。それがよけいに私を興奮させました。彼女は瞳をキッと寄せて、

「よし。大きな声、出すわよ」

私が顔をおっかぶせるようにしますと、彼女はのけぞって、身もだえしました。私は、容赦なく抱きすくめました。

小鳥のいたましい最後のあがき！

白い歯がのぞいて、彼女の顔が、驚愕と恐怖でいびつにゆがんでいます。一瞬、泣いているのか笑っているのかわからないような表情になりました。彼女はいまはもう、自分がどんなおそろしい運命のさ中に叩き込まれたか、女の本能で察知したのです。

「妙子」



私は、あえぎながら、唇を、とうとう彼女の唇にかぶせました。まるで電気にでもふれたように、彼女の全身が鋭く痙攣する手ごたえがありました。

驕慢に咲き乱れた花の一輪をむしり取る

実感で、私は快感に酔いしれました。はじめは冷たく、しだいに熱くなってくる湿った唇の快感。ああ、彼女はじっと、観念したもののように、目をとじました。まつげが、私のまぶたにふれたので、それがわかったのです。

そうしていると、私は、自分が、これまでどんなに渴ききっていたかがよくわかるのでした。私は、そんな自分が哀れで、泣きそうになりました。そう思うと、私も、一種の憎しみで、彼女のブラウスをむしり取って、スリップをひきちぎってしまいました。

「あ、あー」

くずれようとする女のもろい溜め息が、女の口からほとばしり出しました。ふだん、あの宿直番人がと軽蔑しきっているこの私に、彼女は征服されようとしているのです。私の脳裏を、あらゆる淫虐の空想が突っ走りしました。あの更衣室でかいま見た白い陶器の肌が、私の鼻の先で息をひそめているのです。

ふと見ると、彼女のすっかり青ざめた顔からは、すでに日ごろの驕慢が消えています。無理ありません。純真無垢な処女が、身体検査のときでもなければ見せない乳房をすっかりあらわにさせられているのですから。

羞恥と屈辱と、そして、あきらめで彼女のからだから、力がガククリ脱けていくのがわかりました。

チクシヨウ、さまあ見ろ！

私は、胸いっぱいにひろがる嗜虐感で、齒がカチカチ鳴りました。

「さあ、妙子、そろそろ女の遊びを教えてやろうか」

私は、ニタツと笑って、手を、彼女の胸のほうにサツと伸ばしました。もはや能面のようになく、無表情だった彼女の顔に、またあらたな恐怖が閃光のように流れました。

なにしろ、こうなると、私は醜い小男ですから、演出効果は百パーセントというものです。ふしぎに声までが悪魔なみにしわがれてきました。

もちろん、そんな格好で、彼女が窓の外へ飛び出せるものじゃない。もうどんな抵抗もいっさい役立たないことを知った彼女は、首をうなだれて、両手をうしろへ回しました。

「もっと胸をそらすんだ、そうそう。ウーム、たまらない」

乳房に煙草の火

私は、歓喜に目を一段と光らせました。彼女はへなへなと床にくずれました。そのため、ふたつの乳房がくびれたように盛りあがって、私は、カッカッと燃え立ち、気が狂いそうになりました。なめ回すような私の視線の中に、彼女の肢体は、ガッチリはまり込んで、微動だにしません。ただ、かすかに息づ

いている乳房、なにびとの触手をも許さなかった小さな薄赤い乳首、私ははげしい衝動を、とても押えられませんでした。

いきなり、その薄赤い二つのシグナルの上へ、焼け火箸のように燃えた唇をおしつけました。しゅんかん、彼女の両腿がはねあがり、全く本能的に膝をこすり合わせました。

「フワッ、フワッ」

私のすさまじい鼻息が、彼女の肌からはねかえってきました。

彼女は、我慢できぬふうに、手をうごかしまた。私は、彼女の両手をネクタイでぎゅっと縛り上げてしまうと、もう絶体絶命だと思いました。

「なにをするの、悪魔」

血の気のない彼女の顔にあるものは、底知れぬ憎悪だけでした。顔は統一された感情で、すごいばかりの美しさでした。

「なに、殺されないうちが、まだ幸いだと思うんだね」

私は、彼女の二つの乳房をにぎりしました。

「あ、あッ、もう、よして……」

濃い眉をひそめました、が、さわられるのが必ずしもイヤでない証拠には、腿をもぞもぞさせながら、身も世もないふうにもだえる

のでした。

私は、ツト手を放して、ふたたび鑑賞の恍惚にはいりました。彼女はもう、死んだようにぐったりとなっています。よし、パッチリと目をさまさせてやろう。私は、タバコの火を、二つの丘陵のあいだの谷間にちかけました。残虐の快感が、私の背筋をゾクッと流れました。

「あッつい、あ、あッ」

彼女は、ネクタイがちぎれそうなほど腕を張りつめました。でも私は、タバコを離しませんでした。

「堪忍して、もう」

これはちょっと意外でした。のどがカラカラで、私は、水の代わりに、また彼女の唾をばげしく吸い込みながら、彼女の腰をまさぐってスカートの横のスナップを乱暴に引きちぎりました。

すると、スカートはひとりでのうのように床に落ちてひろがりました。厚い脂肪の層にぬめりとおおわれた太腿に、ズロースの跡の食い込んでいるのが可憐でした。私は、息をハッとのみました。

妙子の肉体は臨終のように、またたきましたが、やがて、ぐったりと力を失った。

夫婦和合の祕器

NEO

ワゴリング

空前の反響を呼ぶ！

▼週刊新潮3月23日号及び夫婦生活等に紹介され、益々反響話題を呼ぶ新製品！本器は（取付けたまま使用）するので効くのは当然！而も長年月使用しても副作用又は使用感がありませんから全く理想的です。

アナタの性能を即時10倍にする新製品ワゴリングをスグ御使用下さい。

ハガキで申込次第カタログ無代進呈致します。

▼定価送料共一組11,350円
（個人名で急送します）

- ★本器を使用すればアナタの悩み即日解消！専門家も断然推奨す
- ★勃起不全に対して
本器使用数分内に完全隆起し且つ射精後も萎縮しません。
- ★短小の方に対して
本ワゴリング使用数分内に局所は驚く程膨大します。
- ★早漏の方に対して
本ワゴリングを（併用）により絶対に30分以上持続し効果絶大！



（新案特許出願中）

性に悩む男性に朗報！！

短小のポテ
ビル療法！

◎専門医家助賛！
★画期的構想による最新式
短小増大器の発明！
男性器発育不全、短小のため失望せる方は、最新式真空治療法「レンジ増大器」の出現により局所の肥大、伸長を図り、大なる喜びを得られよ！

●定価一組11,450円（荷造、送料サービス）

レンジ真空増大器

手芸品

おみやげ
贈物に……
大好評！

名産 肥後

九州名産品

★好評新発売★

特製品7種1函…850円で急送！

- 性力チヨコレート！
普通板チヨコと同一で、食べて30分位で性的亢奮を示す！
男女共有効！
六枚入り……六五〇円
- オットセイ丸末
驚異の一夫多妻のオットセイの墨丸を粉末とせる性力の王者！
一函……千円
- スポンチ式スキン
従来のスキンの外面に微細なるザラザラを付す好評品！
一ダース……三〇〇円

東京都杉並区神戸町128
株式会社 療養の友社
電話 (398) 4679 替振東京118443
（高田馬場より西武線井荻駅下車 徒歩2分）
（荻窪より井荻駅行バス5分、柿の木町下車）

＜中国悪虐史＞

羅王と

朋后

青山三枝吉
田上恵子・え



1

「つまらぬ、もう飽きたわ、この女たちにも——」

早羅王は、ペッと大きな唾を路上に吐き捨てて、いった。

「はッ」

低頭したのは、茅伯だった。

またはじまった、という目で、茅伯はチラと早羅王の顎のあたりを見あげた。そのつぎには新しい女をさがせ、とくるのはわかっている。気にいるのも早い、飽きるのも早いのが、この王の常であった。

城内の後宮には千に近い美女を擁しながら、それに満足せず、こうして新たな女を求めて、紅灯の巷を夜ごと徘徊している羅王なのだ。

（どこまで好色なのか計り知れぬわい——）

と、参謀役の茅伯も、ほとほとあきれてしまう。

ここ北都随一の柳暗花明の地、金殿巷に群がる五百余の女も、この半年ばかりの間に、あらかたは漁り尽くしてしまった。

英雄色を好むという諺があるが、いくらなんでも激しすぎる。なにしろ、下賤の出だから仕方がないが、それにしても、これでは餓鬼だな、と茅伯は心中思う。

早羅は匪賊あがりの王だった。だから、やることすべてが粗野であり、横暴である。この悍馬のような王に仕えてそれとなく手綱をひ

きしめているのが茅伯だった。羅王も、才知豊かな茅伯には一目置いていた。

「——殿、もう城へ戻りましょう。娼婦はしょせん娼婦。いくら娼態を示したところで、単なる技巧にすぎず、お飽きになるのも当然でございますよ」

王の袖をひくようにして、茅伯がいった。

「うむ」

うなずきながらも、羅王のぼうぼうたる怪異のひげ面は欲情満たされぬ不服をうかべてゆがむ。後宮の女たちなんか、とっくの昔に飽きがきているのだ。鼻についている。

羅王は、欲しい玩具を与えられぬ子のごとく、頬をふくらませた。

この金殿巷は、虎天楼、蘭芳店、花仙楼などの、贅を凝らした娼家が建ち並び、はなやかな朱塗りの柱、艶やかな白壁が、昼をあざむく灯燭に照り輝いて、羅王の目には世にも華麗な玩具箱と映るのだ。

しかし、この大きな玩具箱に積みこまれた中身は、すでに色あせてしまった。

「——帰る」

不機嫌に、羅王はいった。紅灯に背をむけ、大股に歩きだす。

「そうなされませ」

ところが、城へ戻る途中の町角で、羅王の足が、ふっととまった。いぶかった茅伯の目が、その羅王の視線を追った。

青蛾は素裸にされ、両手は背中で縛りあげられ、小さな白い足は、地上三尺の宙に浮いてもがいた。その足首を、朋后の皮鞭が打ちすえた。青白い素肌に、たちまち赤い鞭跡がしみつき、まっかな血を噴きだした。

一軒の貧しげな鍛冶屋が、そこにあった。店先には、あかあかと火が燃え、黒くよごれた二人の人間が夜業をしていた。

二人とも粗衣をまとい、額からは汗を流して、夢中の仕事ぶりであった。片方はかなりの老人だが、鉄槌をふるういま一人は、発刺とした若々しい手足、腰つきをしていた。

「——おい、茅伯」

羅王はふり返った。その分厚い唇が、にやりとした。

「はあ？」

「あの鍛冶屋の小僧を、明朝早く城へつれてこい」

「はあ、しかしながらあんなきたならしい子供を、殿はなにゆえに？」

「馬鹿」といって羅王は侮蔑の笑いを茅伯に投げた。

「おまえの目は節穴か。あれは子供ではない。もう一人前だ。一人前の娘だ」

「えッ？」

茅伯はおどろいた。注意してその鍛冶屋の小僧を凝視した。鉄を焼く炎が、小僧のからだを赤く照らした。

なるほど、腰まわりの肉づき、胸のあたりのふくらみ、女と見えないうことはない。しかし、蓬髪、破衣、煤にまみれた顔手足、あまりにもみすぼらしかった。

「よいか、明朝早くだぞ。忘れるな」

羅王は歩きだした。その足どりは、きゆうにはずんでみえた。

2

貧乏な鍛冶屋の娘、朋恵の運命は一転し、激変した。

羅王から届けられた金十貫が、鍛冶屋の店先に運びこまれ、これで衣服化粧を整えたうえ、城にくるように命じられたのである。

(夢ではなからうか……)

朋恵は内懐へ手をさしこみ、おのれの乳首をつねった。痛みがなかった。やっぱり夢なのか、と朋恵は落胆した。しかし、それは、はげしい興奮に感覚が鈍ったためなのである。

羅王の目にとまったのは事実だった。

朋恵は長女であり、彼女の下には七人の弟妹たちがいた。その小さな弟妹たちは、いつも空腹に泣いていた。父母や長女の朋恵は、鍋底に残った粟汗しかすすれなかった。

十八歳の娘盛りを迎えていたが、紅白粉を買うゆとりもなく、手足を煤にして、父の仕事を手伝う毎日だった。それが一変したのだ。

朋恵は、親孝行のできるうれしさに泣き、弟妹たちに腹いっぱい食べ物を与えることのできるうれしさに泣いた。垢だらけの衣を脱ぎ捨て、やわらかな絹布の袖に手を通したとき、感きわまり、声をあげて泣き伏した。

貧乏の辛さが骨身にこたえていたのだ。

やがて、数名の兵隊が、城から乗り物をもって迎えにきた。その輿に乗りこむとき、朋恵の足はふるえた。夢ではないか、という危惧がまだあった。朋恵にとって、天上にもものぼる心地だったのである。

城へむかって遠去かっていく娘のうしろ姿を見送りながら、父母の脳裏には、一抹の不安があった。鍛冶屋夫婦は、匪賊あがりの王の粗暴さを知っていた。その不安も、いまとなつては、どうすることもできない。

朋恵を乗せた輿は、町中の人々に見送られながら、ほどなく城へ着

いた。

「——ほほう——」

奇声に近い感嘆を發したのは、茅伯だった。

「ほんとうにおまえ、あの、鍛冶屋の店先にいた者か？」

思わず、問わずにはいられたかった。

垢を落とし、化粧をほどこし、白絹の衣装を身にまとった朋惠の美しさは、輝くばかりであった。やや吊り気味の細い眉、象牙細工とまごう鋭く高い鼻、夕闇に浮かぶ芙蓉の花さながらの白い細面に、ひときわ男ごころを惹きつけてやまぬ唇の臙脂。しかも、これらの美点には、すべてみずみずしい若さが溢れていた。

(これは、天性の美貌だ！……)

茅伯はうなった。同時に、あのよれきった鍛冶屋の小僧の風体から、このすぐれた美女を見ぬいた羅王の眼力に舌を巻いた。

(さすがに好色をもって鳴る殿だわい)

性粗暴にして無知だが、戦いのかけひきと女にかけての精力は、確かにずば抜けて長じている。茅伯は感心した。

「こちらへくるがよい」

茅伯は、朋惠を伴って、羅王の居室へおもむく。

「ふむ」

羅王は、ひと目朋惠をみるや、満足げに赤黒い唇をねじまげた。つぎに、茅伯の表情に目をやった。黒々とした長髪をしごく。

(どうだ、おれの眼力におどろいたか) という無邪気な誇りを示したのだ。

「ちとこう寄れ、娘。そうだ、名はなんと申したかな」

羅王は顎でまねいた。

「——朋惠と申します」

こたえる声は、金鈴をふるうような美しさであった。かるやかに小腰をかがめて歩み進むと、媚びに濡れた笑みを紅唇にうかべて、羅王の膝下にぬかずく。

(いや、おどろいた。この小娘の口のききかた、たおやかな物腰はどうだ。まるで、生まれたときからの貴族のようではないか。鍛冶屋の娘の面影はどこにもない。これはどういうわけか。おそろしい娘だ……) 茅伯の襟首に、一筋の寒気が生じた。

3

羅王は朋惠を寵愛した。溺愛した。朋惠の肉体には、かつて味わったことのない新鮮さがあった。

朋惠の麗資には、いっそうの磨きがかけられた。

朋惠は利発な女だった。普通の娘なら嫌悪するであろう羅王の野蠻めいた野卑乱暴な愛撫も、甘んじて受けた。過去の、飢餓に苦しんだ生活よりはましだった。

(この榮華榮耀からひきずりおろされまいぞ——) と、誓った。

羅王に飽きられ、見捨てられることは、もとの貧乏鍛冶屋の娘に戻ることである。それは、死ぬよりもいやなことだ。

朋惠の天性は、単にすぐれた容姿のみでなく、男を籠絡する手練手管にも秀でていた。羅王の心は、朋惠一人のものになった。やがて朋惠は、羅王にねだって后の位につき、家臣や宮女たちに「朋后」さまと呼ばせることに成功した。

朋恵は有頂天になった。それでも、
(油断はできない——)

と、思う。後宮には、美女千人がひしめいて、一夜なりとも王の寵愛を受けんものと媚びを競っている。隙あらば朋恵を落として入れ、蹴落としても、おのれがその地位に、と狙っている。

(自分の身を安泰にするためには、王の目に触れる限りの女を消すことだ——)

朋恵の胸中には、殺伐な虚栄と、傲りと、嫉妬が、どす黒い炎をあげて燃えはじめた。

朋恵は、自分の決意を実行に移したのだった。

古代中国の帝王、侯伯には、おどろくべき漁色王や淫虐王のいたことは隠れもない事実であるが、見落とせないのは、妖艶驕慢なる后妃、愛妾などの動きである。

帝王のかげにいて糸をあやつり、寵幸を独占するためには、世にも陰險な権謀術策をもって争った。明君といえども、その巧言令色に惑わされるものは多かったのである。

暴虐の悪名を歴史に残した最初の君主は、三皇時代における歴陸王で、つぎに夏の桀王がいる。

殷の紂王も、妃己の色香に迷ったあげく、悪虐の王となり果てた。重税をかけ、やたらに刑

罰を嚴重にし、無実の人民を惨殺した。

ついには、その愛妃とともに滅亡する。

周に至っては、幽王における褒姒があり、

戦国時代に君

臨した呉王は、西施を溺愛

して身を滅ぼした。秦には朱太後の淫虐、漢に至っては淫后、淫妃数限りない。ことに呂后は、漢の高祖皇帝の愛人である戚夫人を惨殺し幼帝を毒殺するなど、その暴虐の数々が正史に伝えられている。

まして——

玉をあざむく麗貌の朋恵が、一介の匪賊あがりの旱羅王をあやつることなど、造作もないことであった。

4

朋恵の白磁の頬に、ふッと残忍の微笑がよぎった。朱塗りの高縁に立つ朋恵の眼下には、中庭がひろがり、その古樹の一枝からは、全裸の女が吊り下げられていた。





ここは、朋恵にあてがわれた竜香殿という離宮。吊り下げられているのは、後宮ではもっとも勢力をもつ青蛾という美女であった。この刑罰の理由は、愚にもつかないことであった。

朋恵が昨夜、無気味な夢をみたと言いだしたのだ。夢の中に青蛾が現われ、その片手には、短剣が握られていた。青蛾はおそろしい顔で短剣をふりかざすや、羅王の胸もとを狙って突き刺したというのである。

「正夢に違いない！」
朋恵は、臥床からはね起きると、けたたましい悲鳴をあげた。なにごとかと馳せ参じてきた侍臣に命じ、ただ

ちに青蛾を捕縛せしめた。

青蛾にしてみれば、とんでもない言いがかりだった。必死の弁解をしたが、ききいれられない。いまや朋恵は、絶対の権力をもっているのだ。

（おのれ、朋恵めの奸計か！）

さとしたときには、青蛾は素裸にされ、両手は背中に屈辱の縄目にあえいでいた。羅王への叛意を白状せよという折檻だった。

青蛾の小さな白い足は、地上三尺の宙に浮いてもがいた。かつては羅王が恍惚の声をあげて抱きしめ、口中にふくんで愛撫した足なのだ。朋恵の目にも、たしかに愛らしく美しい。

朋恵の胸は嫉妬に熱くなった。羅王がこの美しい足を頬ずりしていたころ、自分は煤だらけになって焼けた鉄を叩いていたのだ。

（この足を、二度と王の手に触れさせるものか！）

朋恵は、長い裾をひいて庭へおりと、侍臣の手から皮鞭を奪い、青蛾の足首を打ちすえた。

青蛾は悲痛な声をあげ、瀕死の白蛇のように裸身を宙にくねらせた。朋恵の袖は巨大な白扇のようにひるがえった。皮鞭は青蛾の足首から腿、腰から腹へと鋭い音とともに巻きついた。

青白いほどうたけた素肌に、たちまち赤い鞭跡がしみつき、やがて血をふきだした。

青蛾の裸身は、鞭打たれるたびに反転し、きりきりと吊り縄がよじれた。乳房がしびれて醜く突き出た。

朋恵は背のびをして鞭をふりあげ、その乳房を打った。滅多打ちにした。

ぎくん、とのけぞり、青蛾の唇から一筋の赤い糸が流れた。この屈

辱と苦痛に耐えきれず、青蛾はみずから舌を噛み切ったのであった。

「おのれ！」

朋恵は、侮辱を感じて怒った。

青蛾の唇からどっぷりと溢れでた鮮血は、顎をしたたって乳房に落ち、さらに線を引きいたように腹部に伝わった。

青蛾の首が、がっくりと前に垂れた。それでもまだ生を残した白い腹のふくらみは、ひくひくとあえていた。そのなだらかな下腹に、朋恵はびしりッとした最後の鞭を入れた。

「おろしてはならぬ。このままに放置しておくがよい」

断末魔の青蛾を、憎々しげに見つめて朋恵は鞭を投げ捨てた。

青蛾の息はまもなく絶えたが、死体は吊るされたまま放置された。やがて死臭をかぎつけて、カラスの群れが飛来してきた。もはや息づかぬ乳首からついばみはじめた。われ先に争い、すさまじい鳴き声と羽音だった。

この光景を、朋恵は高縁の手すりにもたれて眺めた。妖しい微笑に頬をゆるめ、まるで花でも愛でるような目つきで眺めた。

かつて後宮一といわれ、羅王の寵愛をほしきままにした美女の玉肌も、カラスのくちばしに突つきまわされては、またたく間にザクロのように破れて形を失っていく。

朋恵の背筋に、いまだかつて感じたことのない、奇妙な疼きがつかぬいた。

快感、に似ていた。体内の奥深く眠っていた朋恵の嗜虐の血が、絶対の権力を得て、激しくめざめたのであった。めざめると同時に残忍な活動をはじめたのだ。

五日たつと、青蛾の死体は、肉を食い荒らされて白骨がむきでてき

た。骨にこびりついた肉片から、猛烈な腐臭がただよいはじめ、さすがに朋恵も、顔をそむけて取り片づけることを命じた。

5

「ほほほ、ごらんなさりませ、王さま。あの珍妙な獣めらを——」
この日、朋恵は、城壁の上の望楼にいた。朋恵に誘われて、羅王も望楼まで身を運んだ。

朋恵の裳は風に吹かれて、霧のように長くたなびいていた。地上から仰ぎみる者の目には、天から舞い下りた天女のように美しく高貴に映じた。

二人の眼下には、たしかに奇妙な生物がうごめいていた。

だが、よく見れば、それは、世にも残酷な、そして猥雑な景観だった。朋恵は、兵士たちに命じて、百人の裸女に首枷をはめた。そして、頭髮を二人ずつなぎ合わせると、後宮から引きずりだした。

二人一組にして、城壁の修理人夫に駆りだしたのだ。素足、素裸にして……。

五十組の裸女は、石運びに苦しい汗を流していた。髪をつながれ、首枷をはめられているので、二人の女は、常に同じ行動をとらなければならない、痛ましい姿態をみせた。

一人が転べば、もう一人も転ぶ。転んだままで息をついていると、監視兵の鞭が容赦なく背中打ちおろされるのだ。石は重く、女たちの手のひらはやわらかい。すぐに皮膚が裂け、血にまみれた。つい昨日までは後宮にいて、美味を食し、琴をかなで、化粧と肌の手入れだけの日を送っていた女たちである。

それが、朋后の命令一下、思いもよらぬ奴隷の苦役に転落したのだ。なよなよとした柔肌と堅い首枷、白い腕に石を抱く不調和は、傍観者の胸底を異様に刺激した。

「ほほう……なるほど、これは珍奇な見せ物だ」

羅王は卒直に感嘆し、熱心な目で見おろした。どこか子供じみた動作だった。

鞭に追われ、重労働にあえぐ五十組の白い肌の奴隷たちの姿は、壮観ともいえた。間隔をおいてひびく鞭音と、たえまなく洩らす女たちの泣き声は、望楼上の羅王と朋后の耳に届く。

乳房に抱きしめた石の重さによるめき、のめって、まるい尻を天にむける女。その尻にすかさず鞭が振りおろされると、女は獣じみた悲鳴をあげて、また起きあがるのだった。

全身の皮肉が破れ裂けて血に濡れていた。

「おもしろい！」

羅王はうなり、生唾をのんだ。その羅王のひげ面を、朋恵はチラと盗み見た。

この淫猥な見せ物は、きっとこの王の氣ににちがいない。だからこそ、朋恵は彼をここへ誘ったのだ。案の定、羅王の目は新しく発見した女体のおもしろさに興奮した。

朋恵は心中ひそかに快哉をさけぶ。

青蛾を殺したが、後宮にはまだ千に近い女がいる。すべて羅王の愛撫を、一度は受けた女だ。その女たちを一人残らず葬らねばならない。そうしなければ、羅王の寵愛を完全に独占したとはいえない。

朋恵は決意した。

このぼう大な計画を完遂するには、羅王に嗜虐の味覚を教えこむこ

とだ。

(まず、成功した……)

と、朋恵は思った。いま眼下に虫のごとく苦悶する百人の女。このまま石運びを続けさせれば、かよいい肉体は三日とたたないうちに足腰たたぬほど衰弱するにきまっている。そのとき、怠惰の刑罰として鞭で乱打し、息の根をとめればよい。

「くくく……」

朋恵の白い咽喉が鳴った。思わず洩らした快心の笑いだった。

それから五日後、朋恵は竜香殿の中庭に大きな柵をめぐらせた。

その柵の中へ、百人の裸女を押しこめた。女たちには手枷足枷をはめて自由を奪ってある。さらにその女たちの裸身の一部には、ある汁液をぬりつけてあった。

そこへ、数十頭の餓えた犬を追いこんだ。寸時、犬どもは途惑っていたが、女体にぬりつけられた汁液の強烈な香りに、鼻頭をとがらせた。餓え犬どもの四肢が地を蹴った。

かれらは牙をむきだし、咆哮して歓喜を示した。芳香を発散する女体に殺到した。

女たちは舌をひきつらせて絶叫したが、逃げる自由は、数歩も与えられていなかった。

餓え犬の一群は、跳躍して襲いかかった。

この世の地獄が展開した。

「うむ、これはみものだ！」

狂喜したのは、朋恵よりも羅王だった。

高縁の上には酒肴の席が設けられていた。羅王のつきだす青銅の大杯に、朋恵は腰をくねらせて酒を注いだ。



羅王は餓え犬
にも負けずガツガ
ツと歯を鳴らし、豚や牡羊
の肉を食らって酒を飲み、残
虐な見せ物を楽しんだ。

朋恵はつぶやいた。酔い痴れた羅王の耳には、その意味が通じな
かった。

「あと、八百……」

地上に残っているのは、血の海の中にかたまる黒
い毛髪と、白い骨片だけだった。犬どもは、臓腑まで
もたいらげていた。

が消えた。

この日は、わずか数刻で百名の女のいのち
が消えた。
柵の中には白い肉片が
四散し、血のにおいが充満し
た。犬どもの腹が弓なりに垂れるほ
どふくれた。

6

三日後、中庭に血のにおいが失せぬうちに、朋后はまた新しい虐殺
の趣向を思いついた。

同じく竜香殿の庭にある池畔の広場に、高い銅柱の橋を架設させた
のだ。円柱の一本橋である。

「あんなものを作らせて、どうするのだ？」
と、いぶかる羅王へ、

「まあ、ごらんなさいませ」

朋恵は艶然と白い歯をみせて、侍臣に合図した。わらわらッと、兵士たちが現われた。

橋の下に、乾燥した薪が山積みされた。

「王さま、よくご覧なさいませ。あの丸い橋には油が塗りつけてあるのでございます」

朋恵は指をさして説明した。

なるほど、高く横に渡されてある円柱は、濡れたようなにぶい光を帯びていた。地上十数尺の高さに、それは奇異な景観だった。

「ふうむ」

羅王は、好奇の目をむきだした。朋恵の考案が次第にわかってきた。うしろ手に縛られた女たちが、兵士に小突かれて庭へ現われた。羅王と朋后の姿を高縁に仰ぐや、女たちは膝を地に折って哀願をはじめた。彼女たちは、すでに自分の運命を直感していた。女たちの大半は泣き声をあげて命乞いをした。

「うるさい、だまれ！」

羅王は、唾を吐き散らして一喝した。朋后はつぎの合図をした。

非情な皮鞭が、女たちを円柱の橋のそばまで追いたてた。同時に、薪にたいまつがつけられた。

「この橋を向こう側まで渡るのだ。渡れたら許してくださるとの仰せだ」

鞭を鳴らしながら、兵士がいった。垂直に近い梯子をまずのぼり、それから水平にかかっている円柱の橋を渡るのだ。むずかしい運動だ

った。円柱には油が塗ってあるのだ。ぬるぬるとすべりやすくなっている。

「おもしろい。落ちたら火の海というわけだな」

羅王が膝を叩いていった。

薪の山にも油がぶちまかれてあった。火は黒煙をあげて勢いよく燃えはじめていた。

女たちは、いましめの縄を解かれて、つぎつぎに追い上げられた。

「ぎゃあッ！」

悲鳴をあげて、先頭の女が頭から火の中に落下した。炎は赤い巨大な魚の口のように、裸女をのみこんだ。

それを見て二番目の女は、柱の上で足をすくませ、動けなくなった。しかし、あとからあとから、女たちは蟻のようにひしめいてのぼってくる。

とまれば、下から激しい鞭で尻を叩かれるのだ。

「おゆるしください、おゆるしください！」

哀願と号泣は、合唱となって羅王と朋后の耳に迫った。呪咀の声も混じっていた。

「ええ、うるさい。橋にのぼらぬ女は、すぐさま火の中へ投げ入れろ！」

羅王は、杯を投げつけてわめいた。彼は、絢爛たるこの紅蓮の刑に我を忘れて興奮していた。朋恵の考案に魅了されつくしていた。

羅王の命令どおり、たちまち三、四名の女が炎の中に投げ込まれた。

真紅の渦の中から絶叫がきこえたが、すぐに途切れた。

このみせしめは、ただちに効果をあらわした。一分一秒でも生きのびたいのが人情である。

女たちは、おののく足で円柱を渡りはじめた。

円柱に塗られた油が、火にあぶられて熱くなっていた。女たちの足の裏を焼いた。

足の裏はおろか、太腿、腰の上まで火勢はのびてきた。白い尻をなぶるように火炎はめらめらとなめた。

人肉の焦げるにおいがした。絶叫が重なり、悲鳴は天にふきあがった。

女たちはぞくぞくと炎の渦に転落した。なかには、覚悟をきめてみずから火の海に身を投げる女もいた。一人として、向こう側にたどりつく者はいなかった。

「わははは！ わははは！ わはははッ！」

狂ったように羅王は哄笑した。手を叩き、足を踏み鳴らして、女たちの悶死にうち興じた。たしかに迫力に満ちた見せ物だった。

数刻をへて、炎の静まった後には、百五十人の死体が、半ば灰になって山積していた。

「あと、六百五十……」

朋后がつぶやいた。

7

後宮の女たちは、恐怖のどん底におちこんだ。

(王さまは、お氣が狂われた！)

明日のいのちを知ることができない。女たちは、いたずらに虐殺を待つよりも、後宮から逃げだすことを考えた。

城からの逃亡は、反逆罪として極刑に処せられる。だが、狂王狂妃の嗜虐の餌食になることを思えば、極刑をおそれてはおられぬ。

炮烙の刑の翌日、勇氣と決断力のある五十人の女が、夜中ひそかに

城からの脱出を計った。

しかし、城門を越える寸前に、衛兵たちに発見されて捕えられた。衛兵たちには、あらかじめ朋后から内命が下っていたのだ。

おびえた女たちが後宮から無謀な逃走を計ることを、朋后は察知していた。そして、その実行を待機していた。朋后は、その首謀者に対する刑罰までを、すでに考えていたのだ。

新しい虐殺法を考えることは、すでに羅王や朋后にとって楽しみの一つになっていた。

庭の中央に、幅十尺ほどの、かなり深い穴が掘られた。

穴の底には、蛇、サソリ、毒蜂、ムカデなどの毒虫をとり混ぜて、およそ数百匹も放ち入れた。

そこへ、首謀者とおぼしき女五名を裸にして、足首を縛り、さかさにして吊り下げたのである。

穴の縁には数本の丸太を水平に差しわたし、その丸太棒に女の足首を縛りつけ、頭から突き入れたのだ。

うしろ手に縛ってあるから、両手で毒虫を払いのけることはできない。まさに毒虫責めだった。

同じく逃亡に同意したほかの女たちは、動けぬように数珠つなぎに縛って穴の周囲にすわらせた。首謀者たちの苦悶を見物させるためであった。

穴底からひびく悲痛な声は、徐々に低くなり、やがてやんだ。

兵士たちの手によって、足首から引きずりだされた五人の女の胸、咽喉、顔は、むさんにも赤紫色にふくれあがっていた。

一人の女の乳房には、数匹のサソリが、鈴のようにぶら下がって食らいついていた。

一人の女の咽喉首には、斑紋様のある毒蛇が堅く巻きついていていた。女は齒のあいだから舌をだして死んでいた。

また、べつの女は、顔ぜんたいが火ぶくれのように赤く腫れあがっていた。目も鼻も耳の形もわからなかった。毒蜂に突き刺されたのだ。鼻の穴には、小さなムカデがもぐりこんでいた。

兵士たちは、竹の棒でその毒虫たちを払い落とすのに一苦労した。どの女の表情も、恐怖と苦痛のために口を大きくあけて、死んでいた。見物をしいられた女たちは、この凄惨な死にざまを一瞥し、ほとんどが氣を失ってのけぞった。

朋后は兵士に命じて、べつに大きな穴を掘らせ、その中に氣絶した五十人近い女を、一時に蹴こませた。上から土をかぶせた。生き埋めだったが、朋后にしてみれば、これはもっとも慈悲ぶかい殺し方だった。恐怖も苦痛も、いままでのなぶり殺しよりも、はるかにすくないと思われたからである。

「あと……六百か」

満足げに、朋后はつぶやいた。胸もとからつきあがるような虚栄の歡喜があった。自分の権勢の偉大さを朋后はしみじみと味わった。文字どおり、生かすも殺すも自分次第なのだった。西山に沈みゆく太陽を、自分の白い手でさし招けば、斜陽はふたたび中天にもどるのではないか、とまで朋后は錯覚した。

8

（早羅王と仰ぐのも、これまでだな——）

ふかく腕を組んで、茅伯は考えこんだ。

羅王の暴虐は、近隣の諸国に鳴りひびいてしまった。暴虐の実際は朋后が企んだものだが、他国ではそうと思わない。

王がその権力に倣って淫虐に没すれば、治政の乱れは当然である。その虚に乗じて攻め入れれば、いかに勇猛をもって鳴る羅王とて、討ち破るはやすい。

一朝事起きた場合、参謀の茅伯には、朋后に魂を抜きとられた羅王の惨敗が目に見えはじめてきた。

羅王がこうなるまでには、むろん茅伯もたびたびの忠告をしてきた。

だが、淫虐の刺激に憑かれた羅王は、部下のことばなど耳にはいらない。

（どうせ他国の軍に攻め奪られる城ならば……）

ついに、茅伯は決心した。

（この国は、おれがいただいてしまおう）

決意すると、茅伯の心身に、きゅうにみずみずしい力が満ち溢れてきた。

茅王さまか、悪くないな——。

兵隊たちの中には、朋后にうつつをぬかした羅王に、不安や反感を抱く者が、次第に増えてきている。

（やるなら——いまだ！）

茅伯は、具体的な方策を練った。

しかし、色香に溺れ、酒に酔い痴れ、兵士人民から忌み嫌われている王を殺誅することは、戦略を練るほどのこともない、やさしいことだった。

逆臣という立場になることだけが、ちょっとうしろめたい気持ちで

ある。

(しかし、要は、その後の治政をうまくやることだ)

茅伯は、おもだった武官たちに、この謀叛をうちあげ、勝算を説いた。

数日間の説得ののち、彼らは同意した。城内の兵は、茅伯のものになった。

手はずは整った。

一夜、羅王の寝間を、茅伯みずから剣をもって襲った。

「どうした、こんな真夜中に——茅伯！」

羅王の叱咤は、途中でうめきと変じた。茅伯の剣が、ふかぶかと羅王の胸板を刺しつらぬいたのだ。

もっとも信賴していた臣に襲撃されたのである。羅王の油断も致し方なかった。

「ひゃあーッ！」

かん高い悲鳴をあげて羅王の横から転がりてたのは、朋恵だった。

一糸まとわぬ裸身は、みだらな汗に濡れて魚の肌のように光っていた。

朋恵は、柳眉を吊りあげて茅伯をにらんだ。

「おのれ、家臣の分際で！」

その声は驚愕にふるえていた。白い顔が、いよいよ白く血の気を失っていた。

茅伯は嘲笑した。

「羅王を殺したのは、ほんとうはおまえなんだぞ、女狐めが！」

茅伯は、血糊のしたたる剣を構えなおし、朋恵の乳房の下に狙いをつけた。

が、ふと、その手をゆるめた。

▼本誌特写／男性縛りと六尺禪姿の決定版▼

★禪姿二人プレイ (略B 18)

サドとマゾの逞しきプレイ

★禪男一人プレイ (略B 19)

白禪と緊縛美の強烈自虐図

★禪姿二人プレイ (略B 20)

大名屋敷にこの美小姓貴め

★全裸男性美決定版 (略B 21)

筋骨たくましき全裸男性美

★禪姿一人緊縛 (略B 22)

キリリと締めた六尺禪の男

★青竹十字字背負い (略B 23)

加虐の青竹を架せられ悶絶

★禪股間ポーズ3態 (略B 24)

逞しき男性美の曲線の極致

★変形縛り責め (略B 25)

男の号泣さそう加虐の絶叫

手札型 各三枚一組 三〇〇円

ご注文は、現金書留か

振替がご便利。ご来社

くださっても結構です

すぐ殺してしまつては、いままでこの女のためになぶり殺しにされた数百の女の霊が浮かばれまい。

茅伯は、朋恵を俯伏せに組み敷くと、その両腕を背中にねじまわした。憎しみをこめて縛りあげた。

一城の革命は、羅王一人を血祭りにあげただけで、難なく成功した。翌朝、茅伯は、治下の人民たちに、自分が新王の地位についたことを布告した。

同時に、城壁の上に羅王の首をたかだかとさらして、前王の運命を明示した。

その梟首台の横に、大の字型の磔柱をたてた。

そこには、素裸のままの朋恵が、さかさにされ、両足を空にひろげて縛りつけられていた。

青く晴れわたった空を背景に、それは、奇妙に美しいさらしものに

見えた。

「国の平和を乱す淫虐の女狐を、ここにさらす！」

茅伯は大声をあげて、城壁の下に集い寄った人民たちに告げた。群衆は目をあげ、口をあけて、一夜のうちの異変を見守った。

その群衆の中に、鍛冶屋老夫婦の顔があった。娘のおかげで、すでに鍛冶屋はやめ、大きな家に安楽な暮らしを送っている身分だった。

自分の娘が、股を空にひらいたむざんな姿でさらされているのを、老夫婦は、信じられぬもののように茫然と見あげていた。

伯さかさ磔の苦しい息の下から、朋恵は、必死の氣力をふりしぼった。

て茅にいった。

「ゆ、ゆるしておくれ、茅伯。わたしをゆるしてくれれば、わたしはおまえのものになる。わたしは前から、おまえが好きだったんだよ」茅伯の表情が、かすかに動揺した。朋恵の魅力は、いつも茅伯の心をとらえていた。しかし、茅伯はすぐに堅い意志の顔になり、無言を守った。

（あの夜、鍛冶屋の店先に働くおまえを、羅王が見かけた時から、おまえの運命は狂ったのだ。栄華是一片の夢でしかなかったな。だが、おまえは、思う存分のことをした。いまさら悔いることはないのだ……）

茅伯の唇に、冷酷な微笑がよぎった。

城壁高くさらされ、三日目に、一代の淫妃朋恵の息は絶えた。とみるや、貪婪なカラスの群れが襲いかかった。

半日のうちに、すべての肉をむさぼりつくした。

それでも茅伯は、死体をおろさなかった。空にさらした朋恵を見あげることに、彼は、おのれの女色への自戒とした。

権力と栄華に執着し、数百の女を惨殺した朋后の美しい四肢は、数日の後に白骨となって、磔柱の縄から抜けた。

白骨の数片は、風に吹かれる枯れ枝技のような、むなしい音をたてて城壁からころがり落ちた。

＜新連載小説次号より登場＞

悦虐の彷徨

青山三枝吉

〔第1話〕 夜すすり泣く女

さし絵は、田上恵子先生が心血を注いで、担当します

作者のことば——来月号から本誌に読み切り連載小説を書かせていただくこと

になりました。本誌いよいよ発展の途上にあるとき、まことに光栄です。

小説の題名は『悦虐の彷徨』——主人公は、ひとりのアブニスト。彼が遍歴し、体験してきたアブの世界の陶醉と苦悩を、赤裸々に描いたものです。

その彼というものは、あるいは筆者自身かも知れません。ともあれ、筆の秘材をさらけだして、他誌にはみられない、心理的な、現実味のあるアブ小説を書いてみたいと思います。

「これぞまさしく『風俗奇譚』だ！」といえるような小説を——。この一編が筆者自身にとっても代表作となるように、精いっぱい力を投入してみます。読者のご批判をお願いいたします。

読者サロン



▼純白の禪の魅力

創刊号から愛読している男性
貴めファンです。一月号の口絵
「血を好む大公妃」のすばらし
さ。六尺を極めて児玉氏の氣品
のあるマスク、均齊のとれた肉
体や、目にしみる純白の禪姿に
感激してしまいました。できる
ことなら、こんなモデル氏とプ
レイをしてみたいと思います。
二人プレイ・オン・パレードも、
児玉氏でしょうか、三、四枚目
のほうか、縛り方も、責めのア
イディアも、真にせまっておも
しろいと思います。記事も、奥
村、かびや、谷氏のものなど、何
度読みなおしてもあきません。
私は、筋骨たくましい精力的
な男性を、禪（六尺でも越中で
も）やサポーター一つにして、

さまざまな縛りで責めあげてみ
たり、されたりしたい衝動にか
られています。

芦立氏の「憲兵狩り」や、男
に加えられる責めなど、忘れ得
ぬ作品です。全国の同好者のお
便りを待ちます。（東京都麻布筈
町一〇三・山田一夫）

▼切腹写真によせて

画報一月号、風奇三月号と、
相ついで切腹写真の出たことは
女性切腹ファンの小生にとって
まことによろこばしいことでし
た。ついでには、この写真の感想
を述べさせていただきます。
画報8集では、血紅を使った
のが、切腹の感じをよく出して
います。そして、ひざをしごき
でくくっているのは、死後の乱
れを見せないためだと思い、ま

ことによく配慮されています。
上半身が裸体になっているのが
ありました。これは左ページ
上のように、女性のつつましさを
見せたほうがよいでしょう。

また、下右のポーズは、右脇腹
まで引き回した場合、実際には
苦痛のため、あのような姿勢は
とれないと思います。左手を前
について苦痛にたえているポ一
ズをとるほうがよいと思う。

3月号では、画報にくらべて
顔の表情が、一段とすぐれてま
す。すわっているときは短刀で
もいいが、腰かけているときは
長刀のほうがいい。

刀を腹部に押しつけて、その
部分が深くへこんでいるのを見
ていますと、今にも切っ先がブ
スツと音をたてて突きささるの
ではないかと、その瞬間が目の
前に見えるようです。

いろいろ述べさせていただきました
ましたが、この次に出されると
きは、白ムクの正式の切腹衣装
にして、いっそうムードが出る
ようにしてください。

また、B・Gが白いシュミ一
ズの上からナイフを突き立て、
シュミミーズが血にそまってい
るような図はいかがでしょう

か。なお、写真とともに切腹小
説も希望します。

全国の、女性切腹ファンの皆
様、ぜひご意見をお聞かせくだ
さい。（兵庫・山脇則一）

▼原稿料ありがとうございます

今朝「神よ、くたばれ」の稿
料、拝受いたしました。いつも
発売日前にきちんと送金くださ
いまして、うれしく、信頼感が
増し、深く感謝申し上げます。

今後とも、いっそう努力して、
できる限りおもしろいものを書
こうと存じております。なにと
ぞよろしく願います。

なお、投稿小説の掲載号寄贈
にあずかり、これも合わせてお
礼申し上げます。（大分・北 潤）

▼私は芳江になりたい

浣腸マニアの小生にとり「風
俗奇譚」3月号の「神よ、くた
ばれ」のなかの浣腸責めのシー
ンは、ほんとうにすばらしい。
また、百二十ページのさし絵も
みるだけで全身熱くなるほど興
奮する。

そこで私は、芳江役となり、
浣腸責めにいたいという欲望
を禁じ得ません。どなたか、ハ

リー・キッドの役をしてくださるお嬢さん、いらっしゃいますか。もちろん、なんかいいでもリハールしたいものです。私は、匿名にしておきますが、もし本誌上にお名のりくださればあなただけに、本名住所をお知らせし浣腸の場も熱演します、ぐったりとしてしまい、便器から腰を上げる気力もないほど浣腸してもらった芳江は、なんという幸福なんでしょう。

私は芳江になりたい！
そして、私は男であるので、女装して排便をこらえる時間、間隔は3分、しかも浣腸器は大型30CC。

この快感！この苦痛！ただし、舞台装置は腰高の洋式便器に限ります。和風便器は興味半減。

次に、自作の「エネマの歌」

ピストン押せば

腸も踊るよ 身も踊る

排便とめられ 身をよじる

切なさ 嬉しさ 悩ましさ

う う……うーん

こらえて浣腸もう一本

う うっーむ むむ うーあ

あっ！

おわりに、貴誌がこのような迫力ある浣腸小説を多数のせ、浣腸愛好の会をつくることを希望します。
(東京・I)

▼浣腸とオムツの記事を

「風奇」の愛読者として一言。
最近、鶴藤氏の記事がないのが残念でたまりません。それは私の好きな浣腸とオムツに関する記事がないからです。

画報第9集の「浣腸の責め苦」
「浣腸される女」のフォトは秀作でした。これも、浣腸器を配されたところに、いちだんと雰囲気表現されているのだと思います。

江馬美久氏、田上恵子氏の麗筆をもって、「おむつカバーをつけた女形のさまざまなポーズ」「おむつカバーをつけた女学生」「お仕置きにオムツをされる女学生」などの姿を発表してください。

——春村玲子様へ。

「読者サロン」にて記事を拝見しました。K誌で二度ばかり記事でお目にかかりましたが「風奇」にも、ぜひ発表してください。レスポスの手記、また浣腸ゴツコの手記、おしめカバー

に關しての手記など、あなたの奇抜な空想を書いてください。文中の総ゴム製ブルマー型のおしめカバーについて、市販されてはいません。もちろん注文する以外に方法はありませんが、住所をお知らせくだされば、よろこんでプレゼントします。
(岐阜・S A生)

▼お姉様、いじめて

本屋で「風俗奇譚」を見つけた時には、ハッとしました。だって、開いて見たら、神秘的なことばかりだったのですから。3月号、胸をときめかせて読みました。

僕はまだ十代ですけど、女のかたといっしょに、ゆっくりお話ししてみたいのです。どんなにかいがですか。

僕は、マゾやサドの経験はありませんが、お姉様がたをキッと満足させます。

それで、お話しできるお姉様がたがいらっしゃいましたら、駒沢野球場の正門前で毎土、日曜日（五月末日まで）の二時にお会いできませんか。
合いことばは、「僕が「国立病院はどちらですか」と聞いたら

「OK」と答えてください。
青いキルティング・コートを着て行きますから、目印にしてください。よろしくお願いいたします。
(東京・三原明義)

▼プレイをいっしょに

小生夫婦とも貴誌の愛読者です。といっても9月号から「奇ク」を変更して貴誌にしたので、すから、新入りのほうです。

最近、私になつかしく思ったのは伊藤晴雨氏の作品およびその一生についてです。前々からこの作品は愛読しています。

私たちふたりはマゾであり、サドであるため、いろいろなプレイを行ない、ときには三日も四日も、からだに縄のあとが残る、痛さのため悲鳴をあげ、あぶら汗を出したこともあります。しかし間借りのため、また家風呂がないため、思うぞんぶんできず、不便をしております。みなさんは、どんなふうに行っているのでしょうか。最近になってふたりだけでなく、だれかいっしょになってプレイを指導してくれる人がいないものかと考えております。

私たちふたりを、この方面で

使用してくださるかたはごさいませんか。お世話ください。

小生は、体重十五貫三百、身長五尺三寸、二十八歳。妻は体重十三貫二百、身長五尺二寸五分、二十三歳。(愛知県豊川市中央通り五の十六、近藤年恵方太田幸一)

▼男性ヌードはすばらしい

今月号の男性ヌードは、たいへんすばらしかった。ことに、前向きで立てひざをして、手ぬぐいで前をかくしている図は見ているだけでエレクトする。

僕は、彫刻みたいながちりした男より、普通の男性のほうがはるかにエロチシズムを感じる。

二月号の通信欄にどなたか、児玉さんはすばらしいと書いておられましたか……。僕だっすばらしいと思いますよ。

(東京・SOS)

▼赤禪斬り込み隊に感激

前日、三月号を入手し、さっそく読んでみました。男性緊縛や禪姿の写真がなく、少々失望しました。でも、芦立鋭吉氏の赤禪斬り込み隊の一篇で、その

不満はじゅうぶん満たしてくれました。少々欲を言えば、責め場の状況をもう少し詳細に、また最後の場面では、もうひとり滝一等兵にも腹を切らせてほしいものでした。

そして、ふたりが重なって死んでいく壮烈な最期にしてほしいものでした。

さし絵も泉のほとりで禪をしまった兵士たちの絵もあればよかったと思います。芦立様、お願いします。

なお、東京のTK生様、小生も、貴兄と同じ意見です。同好の志をもっております。よろしかったら、文通か、誌上でいろいろ話し合いたいと思います。できれば、ともにプレイをして楽しみたいと思っております。

また、浅草の六尺禪狂様、ともに住所・氏名を知らせてくだされば、うれしく思います。

最後に、編集部にお願ひします。

禪姿のポーズの写真、たとえば、机にもたれかけ上体をぐっとそらせた姿、ひざまずいて同じく上体をそらせた姿など、ふやしてください。

緊縛のものでも、前部から写

したものの、全裸のものを希望します。できれば、男性緊縛・禪姿特集号を、予約制にして発行してもらえないでしょうか。

(京都・愛禪生)

▼もっと大胆なポーズを

小生、古くから奇クを愛読してましたが、近ごろ、御誌のファンとなりました。

「奇ク」でなし得なかった思い切ったアイデアをどしどし実行に移される御誌に、敬意を表します。

しかし、まだまだ思いついたポーズが、市販の許可の限界内で可能なはず、いくつか次にあげます。

① 近ごろはガン・ブーム。黒く冷たい非情のピストルを小道具に、乳房などに押しつけてみてはいかが。

② 海老責めも、押し広げられた股間の前に、花瓶かなにかを置いて写せば、あお向けのポーズもできるはず。

③ 四つんばいのポーズも味なもの。首輪をつけてね。

④ 単なるヌード写真にも大胆なポーズを。美術出版社の「動くヌード」なんかの一例。それ

をヒントにして、ナワをからませれば、まだまだ新機軸がだせるはず。(一読者より)

▼あこがれの女王様

私は男性のMです。Mひとりおりに興味がありますが、とくに心をひかれるのが、凌辱であります。

そのいくつかをあげますと、① 半裸の女王様が奴隷の顔の上で、イスがわりに休息する。

② 入浴された女王様に、全身を奴隷が舌でなめ洗わす。

③ 便器の代用にされる奴隷は、一滴ももらさぬよう女王様の泉に口をつけて吸収する。

④ 夜は舌で女王様の性欲を満足させる。

このような奴隷こそ、私のもっとも求めている姿なのです。若い女王様が、あわれな私の頭上に現われます日を、心待ちにしています。

願わくば、誌上でこのようなフォトや読み物が掲載されることを。(富山・西村六夫)

▼「女王様」はいないか

始めてお便り差し上げます。僕は京都に住む二十一歳の大学

生です。

「風俗奇譚」を購読するように
なつて一年近くになります。が、
「風奇」は、マゾヒストのこと
がおおくでているので、発売日
がとて楽しみで。

僕は、若いB・Gのかたや、
セーラー服姿の女の人にいじめ
られることを、とても熱望して
います。

とくに足をなめさせられた
り、顔の上にべったりと尻をの
せられたり、顔を太腿の間には
さまれぐいぐい絞めつけられた
り、四ツんばいになり股の下を
くぐり、においをかがされたり
することが大好きです。そし
て、のどがかわいたときは、お
小水を飲ませてもらえたらどん
なにすばらしいか、考えただけ
でも興奮してしまいます。また
僕は、よごれたパンティーにも
とても執着を持っています。
女王様の体臭がじゅうぶんつ
いたパンティーに顔をうずめ芳
香を心ゆくまで味わうことがで
きたらと思っています。

ところで「風奇」には今月号
もセーラー服縛りが出ていまし
たが、あのモデルのほうが同じ
セーラー服を着て、男の人をい

じめているところをだしてもら
えないでしょうか、セーラー服
を着て、馬乗りになっていると
ころなど、すばらしいと思いま
す。

全国の女王様がた、ぜひ、こ
の孤独なマゾ学生と交際してい
ただけないでしょうか。できな
ければ、文通でも結構ですが、
僕は女王様のためなら、女王様
が喜ぶならどんな奉仕でもいた
します。僕はあなたの忠実な奴
隷です。(京都・マゾ学生)

▼私の夢が実現された

三月号拝見しました。毎号、
巻を追うごとに充実していく貴
誌の将来が楽しみです。

「画報風奇」へ「女禪の絵を望
む」と投書したところ、さっそ
く三月号に「血の紅白試合」で
ふんどし一つの裸女の斬り合い
の場面をのせてくださったこと
ほんとうに感謝しています。今
後もどしどし、この種のを
のせてください。とくに、ふん
どし一つの裸女の血みどろな斬
り合いを描いてください。
誌上にあった、緋のふんどし
をしめて抜き身の刀をさげ、相
手に斬りかかるとする裸女、

相手の女は刀を持ったままおび
えて、いすくんでいる姿——こ
れもよかったです。

白い肌、もえるような緋のふ
んどし、きれいに結い上げた髪
など、実現されたものは、私の
理想像より一歩前進していまし
た。(女禪狂)

▼浣腸のページを作って

はじめてお便りします。

3月号のグラビア最後のペー
ジの村上ユキさんのさかさしば
り、たいへんよかったです。また私
は、西牧えり子さんの大ファン
です。それも全裸の責めを望み
ます。

また、最近の貴誌には、浣腸
に関するところが、全然でており
ませんが、どういうわけでしょ
うか。私たちマニアとしては、
大不満です。どしどしのせてく
ださい。浣腸の特集もやってく
ださい。それに、鶴藤氏の小説
が最近ありませんが、どうした
のでしょうか。以上、編集部
の解答を望みます。

それは、私は、浣腸をはじめ
て間もないのでお聞きしたいと
思いますが、イルリガートルの
高庄浣腸とは、どのようにプレ

イするのでしょうか。どなたか
教えてください。その他のこと
はいろいろ試みました。水道、
空気入れ、エネマシリッジ、ガ
ラスなど。

最近、エネマでよく洗滌し
てから、ソーセイジをもっぱら
愛用しています。局部の苦痛は
なかなかないでしたもので、たい
へん楽しんでいたのですが、こ
れも物たりなくなりました。ほ
かによいアイディアがありました
たら教えてください。

きょう、熱海で、ソフトコケ
シを買いました。これでためし
てみたいと思っていますが、ち
よつと太すぎますので、うまく
いかしと、今からワクワク
しています。この結果はまた来
月号にでも発表します。

もう一つお願いがあります。
ホモのページとか、女装のペー
ジがあるのですから、浣腸のペ
ージも一ページでもよいから設
けていただけないでしょうか。

(神奈川・夏川絹子)

■おわび——本誌三月号の一

二〇ページ「神よ、くたばれ」
のさしえ、印刷上の手違いから
大変見苦しくなりましたことを
おわびします。

風俗奇譚既刊号



三月号 36年度 (一四〇円)

多色口絵・雪の露台……モデル 村上ユキ
 グラビア・雪と女・雪にころがされて・
 艶切腹の図・制服椅子責め・裸身な
 がながと・なまめかしい受縛・ころが
 された受縛・古風な雰囲気・テーブ
 ルの上の裸女・乳房を縛る・足を責め
 る・呪縛の姿勢・さかさ女……
 モデル 村上ユキ・西牧えり子・風早由
 美子・さつきみち……
 特集・マゾヒストの世界……
 マゾ小説・でんすけ地獄……獅子村 裕
 赤禪斬り込み隊(凄絶録)……芦立 鋭吉
 戦争残酷4つの物語……菅 良太
 絵物語・毛皮を着たヴィナス……
 K氏自虐帳……百田 章治
 黄金色のご馳走……椎名 喜作
 サロン・マツキスチカ……
 マゾヒストの手紙から⑧……谷 貫太
 妖異の世界……
 乳房・尻・頭髮フェチズム……
 サディストの使用したムチ……
 職業サディストの女が用いた処刑台……
 長靴を挿げて礼拝する女たち……
 変わり種二輪の名花……
 あたしの「女形」……
 女体責め絵集……

二月号 36年度 (一四〇円)

多色口絵・縛愁・囚花・制服は悲しから
 ずや・乳房をかむ縄・ハリツケ縛り・
 緊縛・拘束の写真と責め特集……
 妖美なる女体責め絵集……古正英生ほか
 マゾヒストの手紙⑧……谷 貫太
 ほも禁秘帖④三人のソドミアとの会見
 あたしの女装生活ありのまま 湯島ゆり子
 鞭の味を知らされた少年……高木 清明
 美少年アルキピアデスのこと 番場多計夫
 妻をいじめる私の方法……領家 誠
 鞭打悦虐小説傑作特選集……
 死を呼ぶ鞭打……真野 麗
 白い双丘(あるヒップ狂の物語) 真崎伸一
 地獄の密航船……青山三枝吉
 ドリー・モルトンの思い出……稲見 悦郎
 お尻をムチ打たれるシネット 北 潤
 「長靴屋」さんの女たち……岡村 芳夫
 女体標本(アブ小説)……獅子村 裕

一月号 36年度 (一四〇円)

多色口絵・血を好む大公妃……A・Z筆
 責め絵集・空中緊縛・雪責め・ほか……
 色刷写真・ふたりプレイ・オン・パレ
 ト・レザー・フェチズム・ほか……
 グラビア・妖美吊り艶姿・ころがし責め
 ハリツケとさか立ち・閨怨のポーズ・
 ほか……
 特集・ソドミアとレスボス……
 ビニータ・ビニータ……獅子村 裕
 ウールニンクについて……奥村世紀男
 著名ソドムの人びと……羽井 鯨亭
 有名レスビアン群像……真野 麗
 男色殺人事件を推理する……雨妙院一太
 ほも禁秘帖③その愛のすべ……
 マゾヒストの手紙から⑦……谷 貫太
 悦虐小説・花の木馬……北 潤
 淫腸の和解……鶴藤 恵
 責められる絵の羞恥……宮原 静雄
 絵の肌をうかニ……志乃田藤美
 アブ小説・悦虐クラブの絵……青山三枝吉
 縛虐悦態特集 十二月号 (一四〇円)
 特集・伊藤晴雨写真自選傑作集
 多色口絵・野ざらし……
 責め絵スケッチ集・火の靴をはかせて
 駿河責め・しもと責め・引きずり責
 め・死体責め・すり鉢責め……
 晴雨女体緊縛写真集……
 伊藤晴雨さんのプロフィール 江古田八郎
 晴雨さんの雪責め……宮原 静雄
 グラビア・石段の緊縛裸女・めしい鳥・
 石垣の前で・長じゅばんも乱れて・棒
 しぼり・浴室の悶姿・魔窟のとらわれ
 びと・花模様のなかで・事務所の狼藉

凌辱無残特集 十一月号 (一四〇円)

多色口絵・水地獄……土井 啓子
 女体責め絵・丸太小屋の惨・岩場ハリツ
 ケ・竹しぼり責め・射撃のマト・ほか
 グラビア・艶麗無残・はなやかな足吊り
 犬の首輪のブラジャー・吊るし責め他
 特集・戦争残酷の記録……
 拷問倉庫(従軍看護婦の悲劇) 島木恵子
 憲兵狩り(終戦残酷秘話)……芦立 鋭吉
 伊予富士の地獄地帯……鹿火屋一彦
 102人の集団ハリツケ……志乃田藤美
 少年愛の人びと……かびや・かずひこ
 マゾヒストの手紙から⑤……谷 貫太
 あたしの乗馬日記……牧田 則子
 女の下着に憑かれて(告白)……真崎 伸一
 死美人館潜入記……神田 弘晴

松の木吊り・庭園の二つのポーズほか
 魅惑の水を求める男……松井 宏水
 告白小説・美しきムチの下で……
 とやま・かずひこ
 マゾヒストの手紙から⑥……谷 貫太
 ほも禁秘帖②五角形のなかの成人儀式
 かびや・かずひこ
 木馬責めと滑車吊り……藤川 潤
 異常願望を昇華させる刺激遊戯4つの法
 女レポの拷問……真野 麗
 白い蝶(水車緊縛の幻想)……東門 博
 男性責め郷土史立石さま縁起 芦立 鋭吉
 ヴォイヨール(のぞき)……番場多計夫
 においのフェチズム……田島 末吉
 スナミチズムということ……岩崎 弘一
 女装願望者の手記・あたしの結婚生活
 富貴クラブ……平井由紀子
 アブ小説・顔のない足クラブ 獅子村 裕
 サド小説・耽美荘の恐怖……青山三枝吉

アブ小説・ひつぷ・えんど・はいひーる
獅々村裕ほか

恋虐呪縛特集 十月号

(一四〇円)

多色刷口絵・女体知恵の輪……田上 恵子
色刷写真・美しき囚虜・あかりも淡く他
グラビア・白衣の佳人・長椅子と女・白
衣も乱れて・ローソクが肌を焼くほか
特集・サディストの群れ……大達 欣治
残虐なるサディスト達……本郷 寅夫
あるサドやぐさの告白……荒川 太郎
ネクロフィリーの男……佐藤 重雄
私の緊縛の記録……今やスリル第3世紀
アブチック秘画展……鶴藤 恵
地下室の吊り責め……谷 貫太
マゾヒストの手紙から④……目黒 考二
生きながら焼かれる女……獅々村 裕
サド小説・裏切りの決算……獅々村 裕

艶美悶悦特集 九月号

(一四〇円)

多色刷口絵・空中鞭打……田上 恵子
原色写真・殿頭の裸女・つるされた白魚
グラビア・落花の景・裸女無残・二人し
ばり・静かなる地獄・投げ出された女
ほか……かびや・かずひこ
特集・女装する男たち……高村 貞安
男が女装するということ……高村 貞安
女装マニア、その魅せられるもの……
かびや・かずひこ
女装する男たちの生……佐東 英策
マゾヒストの手紙から③……谷 貫太
アブ小説・奇妙な再会……文津部三郎
流腸のいけにえ……鶴藤 恵
レポート・若年における異常の生……
編集 部
狐奇事件(おこの殺し)……新海米太郎
サド小説・暗黒街の処刑室……青山三枝吉

幻妖異虐特集 八月号

(一四〇円)

多色刷口絵・受縛二重奏……本誌特写
口絵・荒れ小屋の残虐・つるべめ責ほか
グラビア・スタンドの美女・柔肌縛り他
特集・レスビアンとの生……
東西レスビアンとの愛の技法……
かびや・かずひこ
レスビエンス……ビエル・ロビス
サディスト・マゾヒストの往復書簡……
谷 貫太
あたしの告白プレイ(告白)……本郷みゆき
男に加えられる責め……芦立 鋭吉
妖怪変化とセックス……三崎 光男
少年の腎肉切り・野口男三郎 新海米太郎
美少年の家探訪記……佐東 英策

怨羞無残特集 七月号

(一四〇円)

多色刷口絵・落花図……本誌特写
グラビア・恋慕受縛・姐上の白魚・肌も
あらわに・ベッドは知っている・鏡の
中の緊縛女体・灯籠しぼり・縛られる
女……ほか……
特集・食人症……大達 欣治
サディズムの極「食人症」……大達 欣治
食人国物語……エル・ワシレフスキー
中国における食人奇譚……千石仙太郎
人肉料理を食べた人々……七浦 青人
死を賭けた遊戯……八海 春樹
鉄鎖・鉄環・鉄衣責め……雪俊 遙
ムチの下で陶酔する女……山下 精
死体と添寝・愛撫する女……岸本 信介
女装マニアのピス健……新海米太郎
女忍(戦国秘聞)……星野かおる
女肌をはう毛虫……志乃田藤美
変態残虐物語・姦殺譚ほか……殿村 七郎

嗜虐陶酔特集 六月号

(一三〇円)

多色刷口絵・痛ましき祭壇……本誌特写
グラビア・樹間のニンフ・密室の呪縛・
足づり裸女・庭園の囚人・憂愁の美女
障子の前の残虐・狂熱の園・読者緊縛
写真・他……
特集・フニチズム(物症淫)……大達 欣治
フニチズムの真実……大達 欣治
毛に関するフニチズム……染井恵一郎
排泄物に発情する……植村 久三
女の下着に執着する男……高島 隆
黒い通り魔・腎切り事件史……新川 勇二
流腸に魅入られた女……鶴藤 恵
変態王・燕山君……小松 五郎
八十七個の洗濯バサミ……星野かおる
マゾヒストの手紙から……谷 貫太
刑罰はどのように変態的か……久保寺正己
マゾ妻・二代目「矢作ヨネ」……浜村 利男
十八の乙女を散らした変態性欲……竹崎 孝
アブ小説・レスボスの日……真崎 伸一

夏の臨時増刊 薫風特別号

(一八〇円)

多色刷口絵・無残石灯……本誌特写
口絵・蛇責め・穴蔵さかき吊り・ローソ
ク責め・鞭をふるう女たちほか……
グラビア・珍花ひらく・デヴァンの狼藉
お膳の上のご馳走・ベッドの愉楽・裸
女無残絵・首つりとくすり・のど責め
特集・世界怪奇残酷秘話……
十代の悪の女王……ウッンス・マーチン
白肌責め絵……志乃田藤美
花嫁を突き殺したサドの夫石垣 要助
特集・変態性欲犯罪実録……三崎 光男
俺のモノをなめろ……殿村 次郎
淫楽殺人魔ランドリニー……新海米太郎
尼僧強姦魔・大米竜雲……安井 貞一
サド男の無理心中……飯塚邦夫
写真物語・責め写真家とモデル……
絵物語・無法狼・娘しぼり……法谷 一恵

耽美法悦特集 五月号

(一四〇円)

多色刷口絵・空中人魚……土井 啓子
口絵・ルーベンスの名画にみる変態性欲
グラビア・捕われの人魚・裸体緊縛・女
が縛られるとき・艶肌受難・椅子責め
特集・同性愛……大達 欣治
同性愛の種類と実際……大達 欣治
女性的男性の恋慕手記……湯浅 重二
同性愛少年が殺人を犯すまで城戸義一
マゾッホの被虐待契約書……間瀬 照夫
女の切腹、その心理を分析する小仏京太
マゾヒストの美酒……真崎 伸一
女だけに加えられる拷問……雪俊 遙
性的イレズミ考……千石仙太郎
女の人肉を食べた男……新川 勇二
吹上佐太郎の性の異常遍歴……神保 健三

悦虐特集四月号

(売切れ)

多色刷口絵・近衛家の老女村岡月岡芳年
写真口絵・捕われの白肌・秘画展覧会……
グラビア・責められる肌・妖しき陶酔・
変態性欲考……大達 欣治
妖異・狐奇・艶笑特選読物25編……
猫の怨霊……小宮山章吾
若い女の生胆をとる老婆……音羽喜代二
猥褻・女と犬……千石仙太郎
貞操帯のはなし……久保寺正己
吸血鬼は実際にいたほか……村松 芳文
男を尻に敷き虐待した大浦玉慶 花島清次
全身男の紋所を入墨したお玉 由良正太郎
会員三百人の男色クラブ……谷田 義郎

艶妖特集二月号

(一四〇円)

創刊臨時特集号 (売切れ)

画報風俗奇譚は、全国の読者のみなさまから大好評をいただいております。既刊号は在庫が少なくなりました。お早くご注文ください。

画報風俗奇譚・第10集

36年度三月号 (一八〇円)



画報風俗奇譚・第9集

36年度二月号 (一八〇円)



画報風俗奇譚・第8集

一月号 (一八〇円)



画報風俗奇譚・第7集

35年度十二月号 (一八〇円)



表紙・ハレムのサルタン……………本誌特写
色彩写真・艶縛クワルテット……………本誌特写
グラビア・コタツに乗せる・雪中縛女・戸
外は雪と氷・縛悦のひと・乳房をいたぶ
る・黒い下着・浣腸のとき・あたしをど
うするの・おむつの代用・人間風・ほか
哀艶無残責められる女七景……………田上 恵子
掟を破った女・蒸気責め……………田上 恵子
毛虫責め・マキの山で……………古正 英生
新案拘束装置・狼の餌食……………江馬 美久
不思議な世界・ソドム・勝利の女神・新し
きディオギネス・乙女の尻を守る甲冑……………田上 恵子
馬に乗る裸女……………田上 恵子
ガウチの女……………田上 恵子
縄の幻想……………田上 恵子
男はあたしのしもべ……………田上 恵子
緊縛モデル万華鏡……………沢島将二郎
伊藤晴雨責め写真集(追悼責め写真集)
尻打ちの世界・男の尻打ちに興ずる女・ボ
クサーと女トレーナー・スパンキング・
あたしの写真を見てちょうだい・ほか
絵物語・天道白蛇教異聞……………三村 次郎
絵物語・丁半に賭けた女……………田島 末吉

表紙・ボタン止めの長靴をはく女……………ルドルフ・シュリヒテル
色彩口絵・肌もあらわに・制服無残・裸姿
の緊縛……………ルドルフ・シュリヒテル
グラビア・なまめかしき縛女・全裸のいけ
にえ・板敷きの責め場・石と落ち葉と女
ぐるぐる巻きの裸女・浣腸される女・ム
チが飛ぶ・全裸のポーズほか……………田上 恵子
女性刑罰史絵巻・海老責め無残・かきなわ
とりしめ・四寸なわ・れんじやく縄・き
りなわ・まいなわ・草行真のむねはり・
棒責め……………田上 恵子
女体責め悦虐画集……………田上 恵子
ガラスの幻想……………田上 恵子
水責め苦悶図……………江馬 美久
湯気赤熱責め……………小田 利美
アブチクな世界への招待……………小田 利美
お仕置きはこれから・男性願望の女・他
異常な性風俗展覧会……………田上 恵子
女装の男に恋する・同性愛女性ほか……………田上 恵子
女を責める5態……………田上 恵子
絵物語・山小屋のいけにえ……………江馬 美久
絵物語・皮はぎ小屋……………小田 利美

表紙・モルヒネ……………ステファン
色彩写真・女体羞姿・縛虐二重奏・ほか……………田上 恵子
女体責め絵巻・クサリ吊り・腹を踏む・襲
うへび・ドブを散歩・物干し場の責め・
吊り下げ女・針の床……………田上 恵子
グラビア・盛装無残・妖美のベッド・古風
な花・腹切り悶悦・縛られた裸姿・嗜虐
ふたりぶれい・股しぼりほか……………田上 恵子
鞭打10のア・ラ・カルト・尻打ち・調教・
禁男の家の私刑・愛と苦痛ほか……………田上 恵子
ピグマリオン4態・フランツバイロス・他
カプリス・イン・メキシコ……………光哉
自分を愛す……………ヘーゲマン
街頭の痴漢……………イギリスの諷刺画
女の臀部フェチズム……………オルランド
女をいじめる5景・女を縛る……………田上 恵子
フォト・ストーリー……………三村 次郎
消される女……………三村 次郎
絵物語・縄とムチに魅入られた女……………田島 末吉
絵物語・女の責め絵巻……………田島 末吉
読者の広場……………田島 末吉
女装狂・愛される喜び……………かびやかずひこ

表紙・ステンドグラス……………田上 恵子
色彩口絵・海老責めの女・垣根しぼりの女
竹に縛られた女・古風な縛女……………田上 恵子
グラビア・縄に埋もれた女・船とおんな・
皮ひも十字・柱に首を縛られて・首ひし
縄・ちごなわ・股裂きしぼり・女なわ・
竹やぶのしいたげ・板の間は冷たい・可
憐なとらわれびと・ほか……………田上 恵子
女体責め絵巻七景・大の字吊りのムチ・吊
られる女・針地獄・まといつくベルト・
片足吊り・棒しぼり・ほか……………田上 恵子
伊藤晴雨傑作責め絵・責め写真集……………田上 恵子
人弓・しぼり責め・しりを焼く・ほか……………田上 恵子
女体責め写真集……………田上 恵子
絵物語・男をいじめる女たち……………田上 恵子
絵物語・ビート・ゲーム……………江馬 美久
絵物語・電流責めの私刑……………小田 利美
絵物語・責められる女忍者……………江馬 美久
女をしいたげる7景……………田上 恵子
新着封切・緊縛フォトと拘束絵画集……………田上 恵子
ハレムのドレイ・拷問の機械・刑罰の使
役・ドレイの反逆・クサリにつないだ女
人犬・幽囚の島・矯正の家・ほか……………田上 恵子

画報風俗奇譚・第6集

十一月号 (一八〇円)



多色口絵・石橋の上に・緊縛置き物・ほか
 第1グラビア・壁上の呪縛・タイルは冷たい・浴室の責め・ハダカの女犬・他
 第2グラビア・はなやかな縛唐・法悦の時は流れて・石と草の中で・ほか
 第3グラビア・華麗なるハリツケ・受縛の表裏・葦盤の上に・片手つり・残唐を運ぶ自動車・御姿二人プレイ・ほか
 責め絵集・吊つてくすぐる・アリ責め・丸太流し・愛憎の果て・柱しぼり・ムチのあと・肌を巻くベルト・ほか
 画集・ソドムの額縁7景……田上 恵子
 写真物語・恐怖のドライブ……志田 悦郎
 アブチツクな写真集・皮とのひととき・身体矯正器・嵌口具の諸形式・ほか
 演劇・緊縛ア・ラ・カルト・片っぱしからムチで打つんだ・さかさ吊り3態・緊縛裸女群像・艶麗しぼり模様・ほか
 絵物語・サリートの体験……江馬 美久
 絵物語・マミーの正体……江馬 美久
 絵物語・悦唐の天国……小田 利美
 ショーン・ウィリー画集・コルセットをしめる・女主人・クラッカー・ほか

画報風俗奇譚・第5集

十月号 (一八〇円)



多色口絵・白い肌のいけにえ・石の壁は冷たい・暗黒の世界・首輪しぼり……
 口絵・熱気むし・さかさ髪づり・手首宙づり・うしろ手づり・犬になりたい・鉄の輪まわし・ハナ輪責め器・ほか
 第1グラビア・憂愁のひと・まひるは静かスタンドの白魚・柱を背負わされて・荒縄の受縛・首つり人形・棒責め・ほか
 第2グラビア・お膳の上の生きづくり・憂いの花・石そり・からす天狗の襲撃ほか
 第3グラビア・ピアノのある風景・静かなる苦悶・鼻をつままれて・カギで責める肌を噛むクサリ・屈辱のポーズ・ほか
 奇妙な絵画展覧会・ジョン・ウ・リィほか
 トリツクによる残唐……佐村 弘
 絵物語・続・悪徳の栄えマルキ・ド・サド
 絵物語・ワナにかかった令嬢・小村伸太郎
 絵物語・女密輸船……大西 伍郎
 アブチツクなアルバム・ギョースターフほか
 五十万人の大虐殺……磯部 乙彦
 死にまざるアヒル行進10マイル津村 静治
 生きながら射撃標的にされた男・田島末雄
 写真物語・奇妙な娼婦……赤木 圭介

画報風俗奇譚・第4集

九月号 (一八〇円)



色刷写真・五輪石塔の前で・水辺の小屋で緊縛落花・すだれ戸を背に……
 第1グラビア・水車に縛られて・水責め・露台の囚女・岩上受縛・ローソク責め他
 第2グラビア・青い無残絵巻・岩に寝かされて・はなやかな腰紐・髪の手縛りほか
 第3グラビア・片足宙づり・縛られた肉体お灸責め・同性悦唐・活魚料理・ほか
 口絵・白肌針責め・納屋の中・焼きゴテを乳房に・古屋敷の幽囚・帆綱折り・ほか
 世界名作秘画誌上展覧会・サルダナパールの死・ルクレチアの死・馬上の曲芸ほか
 女性緊縛考……湯浅 重二
 絵物語・悪徳の栄え……マルキ・ド・サド
 絵物語・町の野獣たち……江馬 美久
 絵物語・野盗と女たち……小田 利美
 リチャード・ミューラー・グロテスク画集
 ソ連兵20万を悩ました男……ヘンドリック
 ベン・ホーガンの力業……マーチン・ミラー
 人質にされた金髪的美女……ストローム
 地獄の戦士……ジョエル・クッター
 裸女緊縛30態・本誌モデルが演ずる圧倒的な各種ポーズの緊縛プレイ集の決定版

画報風俗奇譚・秘蔵版

(二〇〇円)

多色刷写真・まひるの艶肌・盤上人魚ほか
 多色刷口絵・空中はりつけ・白肌への執念
 第1グラビア・二人無残・あるポーズほか
 第2グラビア・鏡の中のナルシスト・竹が責める・投げ出された女・ほか
 第3グラビア・柱しぼり・格子責め・ほか
 責め絵画集・被虐のロープ・風鈴づり・生き埋め・土人の餌食・石を抱いて・ほか
 アブチツク絵画館・コルセットをする女達
 乳房をしぼる女たち・亀裂へのあこがれ
 猛獣と女・タマラ・プスライエフ女史
 男をしいたげる女たち
 永遠の美と若さの泉・ザッヘル・マゾッホ

画報風俗奇譚・第2集

(一八〇円)

多色口絵・池畔の愉悦……
 写真口絵・陶酔する女体八景……
 第1グラビア・鴨居づり・女の置き物ほか
 第2グラビア・椅子しぼり・美囚六態・白い人魚のもたえ・美しき人柱・ほか
 第3グラビア・暗闇のよるこび・犬になれ木に縛られて・座布団も責め道具・さかさ海老づり・冷たいタイル・ほか
 マゾヒスティック絵画館・サルダナパールの死
 ルクレチアの死・馬上の曲芸・ほか
 人間ステッキ……池内 真一
 死の砂漠行……北原 雄三
 愛欲に狂う水原……国枝 譲
 絵物語・狂恋吉弥責め……団 令太郎
 絵物語・ギロチン台の美女……重山 規夫

画報風俗奇譚は、全国の読者のみなさまから大好評をいただいております。既刊号は在庫が少なくなりました。お早くご注文ください。

代理店ご案内

分譲写真が揃いました。新作も何点かふやしましたし、モデル別のセットもつくりました。あなたのコレクションにお加えください！



▼村上ユキ受縛特選フォト集

各三枚一組
三〇〇円

- ☆全裸うしろ手縛り……………(略M1)
- ☆お灸灼熱地獄……………(略M2)
- ☆本格縛り責め三態……………(略M3)
- ☆豊麗切腹……………(略M5)
- ☆閨房股間縛り……………(略M6)
- ☆凄絶雪責め……………(略M7)



▼西牧えり子純情緊縛フォト

各三枚一組
三〇〇円

- ☆支那服の悦虐フォト……………(略N1)
- ☆いたがられる姑娘……………(略N2)
- ☆乙女の祈り……………(略N3)
- ☆全裸いたがり……………(略N5)
- ☆鼻責め嗜虐……………(略N6)
- ☆哀花受難……………(略N7)



▼西条さくら豊艶女体緊縛フォト

各三枚一組 三〇〇円

- はちきれんばかりの肉体の狂宴地獄
- ☆乳房地獄責め……………(略S1)
- ☆腹部への嗜虐……………(略S2)
- ☆悶姿の祭壇……………(略S3)



▼風早由美子妖美特選フォト

各三枚一組 三〇〇円

- 大型グラママーの本格的な責め苦悦虐
- ☆樹間のニンフ……………(略H1)
- ☆嘆きのセーラー服……………(略H2)
- ☆死のベルトの誘い……………(略H3)



▼舟木喜代子新作緊縛フォト

各三枚一組 三〇〇円

- 可憐なBGスタイル・ハダカ馬の男の背中に乗ってハイドウ、ハイドウ
- ☆大の字縛り……………(略F5)
- ☆ハダカ男馬のり……………(略F6)



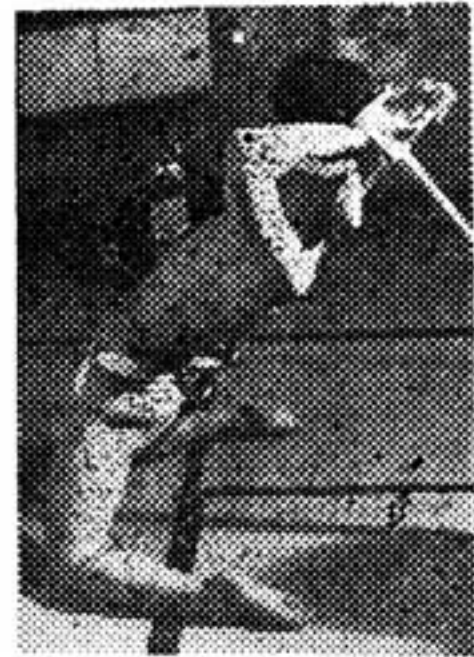
▼高月まゆみ野外緊縛二態

各三枚一組 三〇〇円

- 荒涼たる砂浜に転がる女の姿体、寒風に肌も凍り、息づまる静寂の悦虐
- ☆砂浜荒縄しぼり……………(略T5)
- ☆廃家(あばらや)の恋縄……………(略T6)



本誌独占・絶体魅惑の“男性しぼりと六尺禪姿の決定的姿体”選



手札型 各三枚一組 三〇〇円

★禪姿二人プレイ (略B 18)

サド・マゾコンビの逞しきプレイ

★禪男一人プレイ (略B 19)

白い禪と緊縛美の織りなす自虐図

★禪姿二人プレイ (略B 20)

大名屋敷にくりひろげる美小姓!

★全裸男性美決定版 (略B 21)

筋骨たくましく全裸の男の躍動美

★禪姿一人緊縛 (略B 22)

キリリと締めた六尺禪の珠玉版!

★青竹十文字背負い (略B 23)

加虐の青竹を架せられ悶悦する男

★禪股間ポーズ3態 (略B 24)

逞しき男性美の曲線を描く極致!

★変形縛り責め (略B 25)

男の号泣をさそう加虐責めの絶叫

☆女囚緊縛ポーズ (略A 6)

三枚一組 三〇〇円

江戸時代の刑罰資料をもとに
女囚縛りを再現した哀歎の譜

☆野外縛り (略A 7)

三枚一組 三〇〇円

森閑とした雑木林の中にくり
ひろげられた羞恥の緊縛女性

☆凄絶切腹六態 (略A 8)

六枚一組 八〇〇円

豊満な腹部への嗜虐、噴出す
る鮮血、女体悶絶の凄惨集!

☆全裸緊縛ポーズ (略A 9)

三枚一組 三〇〇円

はじめて公開した全裸凄絶の
女の妖しき悦虐姿態の決定版

☆臀部責め (略A 10)

三枚一組 三〇〇円

豊満な臀部への加虐のムチが
とび、悶える肉に針が突刺す

☆水責め・湯責め (略A 11)

三枚一組 三〇〇円

全裸女性をあくことなくバス
ルームに、古池に漬け責める

☆本格鞭打プレイ (略A 12)

三枚一組 三〇〇円

人間本態の嗜虐の極致!本誌
のみがなし得た恐怖の迫真感

☆豊満なる緊縛女体 (略C 6)

三枚一組 三〇〇円

超グラマーのはちきれんばかりの
肉体に食い込む縄の陶酔

☆海老責め地獄 (略C 7)

三枚一組 三〇〇円

死一步寸前のエビ責めに絶叫
する決定的瞬間の緊縛ポーズ

☆眼帯の女 (略C 8)

三枚一組 三〇〇円

不完全の美、片目をふさがれ
た女の魅惑、眼帯のもつ妖美

☆さるぐつわ艶姿 (略C 9)

三枚一組 三〇〇円

無残にも呼吸をせきとめられ
た責め苦の中の妖艶の美態!

☆制服の乙女縛り (略C 10)

三枚一組 三〇〇円

むしりとられたセーラー服の
乙女が悶える緊縛の青春譜!

☆裸女棒しばり (略C 11)

三枚一組 三〇〇円

荒れけずりの棒が縄の痛さを
増し、白肌に鮮血がにじむ!

☆密室の呪縛 (略D 6)

三枚一組 三〇〇円

呪われた女の宿命、のたうつ
裸女にせまる悪魔の鋭い牙!

☆全裸変形地獄図 (略D 7)

三枚一組 三〇〇円

うごめく女体を密室で責め抜
くサド・マニアの無残絵巻!

☆無残二人ばり (略D 8)

三枚一組 三〇〇円

背中合わせの美女ふたり、縛
られ投げ出された陶酔の極致

☆浣腸悦虐フット (略D 10)

三枚一組 三〇〇円

もだえにもだえる浣腸の嗜虐
はマニア垂涎待望の決定版!

☆血みどりのリンチ (略X 8)

五枚一組 五〇〇円

しばられ、吊り下げられ、あ
げくの果てに鋭利な白刃の譜

☆悦虐の表情 (略X 9)

三枚一組 三〇〇円

悦虐の極致をそのまま表情に
とらえた無上の陶酔の美しさ

☆本格吊るし責め (略X 10)

三枚一組 三〇〇円

妖美艶麗、まさに晴雨翁えが
く本格的吊り責め絵をしのぐ

▼代理部へのご注文は、現金
書留、小為替、あるいは振
替をご利用になるのが、確
実で便利です。



▼好評の本誌別冊増刊号！

本社在庫僅少につき、
ご注文はお早めに！

■画報風俗奇譚臨時増刊号

大型デラックス判の迫真力
と充実した内容の特別大冊
奉仕定価 二八〇円

■秘蔵版風俗画報第1集

全巻グラフィア百五十余ペー
ジの超豪華大冊の決定版！
限定版定価 五〇〇円

■秘蔵版風俗画報第2集

第1集につづき再び異常美
の世界をえぐる絢爛豪華版
奉仕定価 三〇〇円

■読者原稿募集

▼創作 (四百字25枚以内)
S・M・Hなどの妖気と異常美
の世界をえぐる力作をどしどしお
送りください。

▼告白体験記 (四百字20枚以内)
あなた自身、またはあなたのま
わりで秘められたアブの世界を
期待しています。

▼アブ・ニュース (四百字5枚)
本誌であらたにもうけた、ホモ
の窓、女装の部屋、サロン・マ
ノ、チカは、たいへん好評を受け
連日、ご投稿をいただいております。
す。近々、サドの部屋、マゾの部
屋も誌上を飾る予定です。ふるっ
てみなさまのご投稿をお待ちして
います。

▼口絵・カット
本誌では読者のみなさまの描い
た一枚の絵、カットを期待してい
ます。風奇誌上に飾るうえからも
お送りください。

▼読後選評 (四百字3枚以内)
読者のみなさまの批評を歓迎し
ています。本誌の緊縛写真、小説、
口絵など、ご遠慮なくご忠告なら
びにご希望をお寄せください。

▼緊縛フォト・アイデア
本誌の専属モデルの特色を生か
してあなたの自身のアイデアをお寄
せください。

▼そのほか、読者の広場、読者サ
ロンの原稿もどしどしお送りくだ
さい。

(なお、投稿原稿は採否ともに返却いた
しません。しかし採用の場合は、規定の稿
料を差し上げます。)

編集室より

★本号は「東西古今刑罰残酷物語」
を特集した。刑罰の基底に強烈なサ
ディズムを見いだすからである。収
録した写真や絵画は、現在の段階と
しては、集めうる最高のものと自負
している。その珍貴さのゆえに、ま
だまだ掲載したいものもあったが、
誌面のつごう上、割愛せざるをえな
かったものもある。いずれ次の機会
に発表したい。

★故伊藤晴雨先生の業績は偉大だ。
その先生はいまやない。本号では、
先生が苦心して発明された「女のし
ばり方」の一部を紹介した。先生を
追悼する意味合いからである。

先生の前掛け方は、昔の罪人を
しばるそれとは異なっており、独自の
ものである。得がたい資料として
貴重なものである。

★最近、深夜に電話をかけてこら
れる読者の方がある。本社は十時
から五時のあいだが営業時間であ
るので、その間にお電話いただき
たい。それ以外の場合は、失礼に
わたることがあるかもしれない。

★昨年十二月、大判の臨時増刊を
発売したが、おかげさまで好評を
博した。近く、その第2集をお目
にかけたいと準備している。ご期
待いただきたい。

▼月ぎめご購読の方法▲

風俗奇譚 (各送料とも)

一カ月 (二冊)	一五〇円
三カ月 (三冊)	四五〇円
六カ月 (六冊)	九〇〇円
一カ年 (十二冊)	一八〇〇円

画報・風俗奇譚 (各送料とも)

一カ月 (一冊)	一八〇円
三カ月 (三冊)	五四〇円
六カ月 (六冊)	一〇八〇円
一カ年 (十二冊)	二一六〇円

★本社に直接ご注文の場合は、現
金書留か振替が確実で、ご便利
です。ただし、振替は日時が
かりますゆえ、あらかじめご了
承おきください。

風俗奇譚 四月号

定価一五〇円

昭和三十六年三月二十日印刷
昭和三十六年四月一日発行

編集人 高倉 一
印刷所 刊行会印刷部

東京都千代田区神田神保町一の一三

発行所 文献資料刊行会

振替東京 四二四九四番
電話東京(291)二四三〇番